

毛

禮をも隕し失はず、人を親しみ、隣を善くせんことを欲するなり、是れ威徳兼ぬ行ふの義なり、柞械の木を抜き去りて、蹊徑の間、兎然として路を成し、使者の通行するや、路、混夷に近ければ、混夷の人、其の將に己れを伐たんとするを謂ひて、驚き走り、柞械の中に突き入りて、甚だ困むとなり、大王は狄を避け、文王は混夷を懼れしむ、其の迹異なりと雖も、國を興すは則ち一なり、故に連ねて之れを美するなり、

虞芮質厥成。文王蹶厥生。予曰有疏附。予曰有先後。予曰有奔奏。予曰有禦侮。

虞芮は二國の名、質は成なり、成は平なり、蹶は動なり、文王西伯と爲るの時に及びて、周道大に興る、虞芮の君、相與に田を争ひ、久しくして決せず、西伯の仁者なるを聞き、西伯に訟へて、其の是非を正さんことを欲し、與に周に朝す、然るに周の境に入りて見れば、耕す者は畔を譲りて相侵さず、行く者は路を譲りて相妨げず、少き者は老者を扶け、白髮の雜りし者は、物を提ぐるることなし、是に於て、二國の君これに感じ、乃ち其の争ふ所の田を譲り、與に之れを受けず、間田と爲して退く、質成とは、其の和平を成すことなり、是れよりして、周に歸する者、四十餘國の多きに及ぶ

詩

毛

故に之れに繼ぎて、厥の生を蹶かすと曰ふ、蹶生の字、初生の字と相首尾す、周家王業の大なる、大王之れを始めて漸く興り、文王之れを動かして益大なり、故に詩人自ら四等の臣の才徳を評して曰はく、文王の徳、此くの如き所以を念ふに、疏遠の民を率ゐて上に親しみ事へしむる疏附の臣あり、又君の前後に在りて、君を禮義に導ひき法則に依らしむるの臣あり、又天下の人に諭すに王の徳を以てし、王の聲譽を揚げ、天下をして皆奔走して歸服せしむるの臣あり、又武力ありて、能く敵人の衝突を折き、侮りを、千里の外に禦ぐの臣あり、文王上は大王の基を承け、下は賢臣の助けを得て、王業を成すことを言ふなり、

械 樸

芄芄械樸。薪之慄之。濟濟辟王。左右趣之。○濟濟辟王。左右奉璋。奉璋峨峨。髦士攸宜。○溈彼涇舟。烝徒楫之。周王于邁。六師及之。○倬彼雲漢。爲章于天。周王壽考。遐不作人。○追琢其章。金玉其相。勉勉我王。綱紀四方。

此の詩、古序に文王能官人也とあり、文王才徳ある者を擧げ用ゐて、之れに官職を

與ふることを言ふなり、

芄芄械樸。薪之類之。濟濟辟王。左右趣之。

芄々は木の盛んなる貌、械は木の名、樸は叢生なり、木のむちがりて、根と枝とこみあひたるを謂ふ、樸は積なり、濟々は多き貌、辟は君なり、左右は左右の臣なり、趣は趨なり、言ふこゝろは、芄々然として、枝葉の盛んなるものは、彼の械木の叢生するものなり、我が農人折きて之れを薪とし、又載せ來りて之れを家に積み、以て用を爲すことを得、濟々たるの君王、既に賢人を得て、之れを位に置き、此の賢臣、皆左右に補助して、疾く其の事に趨り、各其の職を司るなり、

濟濟辟王。左右奉璋。奉璋峨峨。髦士攸宜。

璋は半圭なり、圭を二つに割りたるなり、峨々は盛壯の貌、髦は俊なり、言ふこゝろは、文王能く賢に任じ、官を授く、故に濟々たる君王の禮を行ふに當り、左右の臣、璋を奉じ、助けて之れを行ふ、此の臣、璋を奉ずるの時、其の容儀峨々として盛んなり、是れ俊秀の士、宜しく爲すへき所なり、

溲彼涇舟。烝徒楫之。周王于邁。六師及之。

溲は舟の行く貌、涇は水の名、楫は櫂と注す、周王は文王なり、言ふこゝろは、溲然として流れに順ひて行くものは、涇水の舟なり、此の舟の流れに順ひて行くものは、衆多の舟人之れに楫すが故なり、文王の政令、能く行はるゝものは、諸賢臣の之れを助くるが故なり、文王若し往きて罪ある者を征伐せば、六師皆之れと共に進むへしと、是れ軍旅の人を得るを言ふなり、

倬彼雲漢。爲章于天。周王壽考。遐不作人。

倬は大なり、雲漢は天河なり、遐は遠なり、不は語詞なり、言ふこゝろは、倬然として明かなる天河は、天を終るまで大にして、文章を天に爲す、古へより今に至るまで此くの如し、文王の壽考にして位に在るの久しき、政教の人に及ぶを以て、紂の時の悪しき風俗を化して、善に化せしむるに遠からんや、其の必ず近きを言ふなり、

追琢其章。金玉其章。勉勉我王。綱紀四方。

追は彫なり、金に彫と曰ひ、玉に琢と曰ふ、相は質なり、言ふこゝろは、文章を金玉に彫りて、其の觀ることの美なるは、金玉の質の本美なるが故なり、文王の其の道を修めて、聖人の教と爲すものは、本其の心の睿聖なるが故なり、勉めて倦まざる我

が文王は、一世の賢才を網羅し、其の才の大小を見て、之れを用ひ、四方の人を治むること、網の綱を擧げ、絲すじを陳ね、聯屬して之れを治むるが如しとなり、

早麓

瞻彼早麓。榛桔濟濟。豈弟君子。干祿豈弟。○瑟彼玉瓚。黃流在中。豈弟君子。福祿攸降。○鳶飛戾天。魚躍于淵。豈弟君子。遐不作人。○清酒既載。騂牡既備。以享以祀。以介景福。○瑟彼柞棫。民所燎矣。豈弟君子。神所勞矣。○莫莫葛藟。施于條枚。豈弟君子。求福不回。

此の詩、古序に受祖也とあり、文王能く先祖の業を受くることを言ふなり、周の先祖大王より以來、能く后稷公劉の業を修め、守りて失はず、文王其の基業を受くること、由りて來る所、久しきを見るべし、

瞻彼早麓。榛桔濟濟。豈弟君子。干祿豈弟。

早は山の名なり、麓は山足なり、榛は木の名、和名はしばみと曰ふ、桔も亦木の名、形、荆に似て赤し、濟々は多き貌、言ふこゝろは、彼の周國、早山の麓を見れば、榛と桔と濟々として、衆く盛んなり、是れ山高くして、基厚きが故、麓の草木、其の潤ひを承く

るなり、子孫先世の德澤に藉ること、何を以て此れに異ならん、樂み安くして憂ひなきの君子、先祖の業を受け、許多の經營を勞せずして、之れを繼き續く、其の祿を祖考に受くること、樂みて易きなりと、

瑟彼玉瓚。黃流在中。豈弟君子。福祿攸降。

瑟は玉の貌、瓚は鬯酒を盛るの器、黃流は鬯酒の酒なり、言ふこゝろは、文王西伯と爲り、功德ありしを以て、天子より圭玉の瓚、及び柶鬯の酒を以てす、其の色黃にして、流れて中に在り、豈弟の君子、德あるを以ての故に、祖考の庇ふ所と爲り、福祿之れに降る、圭瓚の賜ものは、即ち福祿の降るなり、

鳶飛戾天。魚躍于淵。豈弟君子。遐不作人。

言ふこゝろは、鳶は其の性に率ひて天に戻り、魚は其の性に率ひて淵に躍る、君子の人材を成し、之れをして性を遂げしむること、猶魚の水に泳ぎ、鳥の雲に飛ぶがごとく、圓きものは壁と爲し、方なるものは圭と爲し、兵農禮樂、各其の性の近き所に就き、其の質の能く爲す所に隨ひ、皆其の材を爲さしむ、文王豈弟の德あり、人の性に拂らずして、人材を成就するに遠からんや、其の近きに在るを謂ふなり、遐不

作人の四字、棧樸の詩と同義なり。

清酒既載。騂牲既備。以享。以祀。以介景福。

清酒はすみさけ、騂牲は赤き牲の獸なり、言ふこゝろは、清酒既に尊中に在り、騂色の牲、既に備り、以て先祖を祀れば、則ち神の報る所、必ず助くるに大なる福を以てせんとなり。

瑟彼柞棫。民所燎矣。豈弟君子。神所勞矣。

瑟は衆き貌、燎は火を放ちて焚くなり、勞は勞來の意、猶佑助といふがごとく、言ふこゝろは、柞棫の多く茂れるものは、其の傍の雜草を焚き拂ひ、之れを養ひて、害なからしむるが故なり、豈弟の君子は神の助くる所なり、文王豈弟の徳あり、故に神の之れを佑助すること、猶人の柞棫を害する雜草を除くがごときを言ふなり。

莫莫葛藟。施于條枚。豈弟君子。求福不回。

莫々は延び蔓る貌なり、回は違なり、言ふこゝろは、莫々と延び蔓る葛藟は、木の枝と幹とに施ひ上りて盛んなり、猶臣子の命を君に託するがごとし、豈弟の君子、福を求むること、先祖の正道に違はずと、其の先祖の正道を修めて、福を致すことを

言ふなり。

思 齊

思齊。大任。文王之母。思媚。周姜。京室之婦。大妣嗣徽音。則百斯男。○惠于宗公。神罔時怨。神罔時恫。利于寡妻。至于兄弟。以御于家邦。○雖雖在宮。肅肅在廟。不顯亦臨。無射亦保。肆戎疾不殄。烈假不瑕。○不聞亦式。不諫亦入。肆成人有德。小子有造。古之人無斃。譽髦斯士。

此の詩、古序に文王所以聖也とあり、此の詩四章、言ふ所、皆聖人の事なり、

思齊。大任。文王之母。思媚。周姜。京室之婦。大妣嗣徽音。則百斯男。

齊は莊なり、媚は愛なり、周姜は大姜なり、京室は王室なり、大妣は文王の妃なり、徽は美なり、言ふこゝろは、常に齊敬を思ふ所の大任は、乃ち文王の母、其の徳、文王の母たるに堪ふるなり、又能く其の姑大姜を愛媚し、王室の孝婦と爲る、文王の聖徳あるは、此の賢母の生む所に成るなり、文王の妃太姒に至りて、又能く大任美教の德音を續ぎ行ひ、嫉妬せずして、而して子孫衆多なることを得、妻賢にして母望なり、此の故に和敬の風、闔門に充ち、二南の化、是れよりして始まるなり。

大姜の後、大任あり、大任の後、大妣あり、内事を治むる者、其の徳此くの如し、此れ周の興る所以なり、詩人文王の時に於て之れを言ふ、蓋し文王の徳、大任に本づく、大任能く婦たるの道を盡す、文王の徳を成すこと、大任に由るを知るべし、而して大妣又能く文王の徳に化し、又大任の徽音を嗣ぐ、其の母と其の配との徳此くの如くなれば、則ち文王の徳知るべし、大妣既に大任の徽音を嗣ぎ、妬忌せざるの行ひあるを以て、左右の賢女進御して、文王の子孫衆多なることを致す、百斯男と云ふものは、成敷を舉げて、其の衆きことを形容するなり、

惠于宗公。神罔時怨。神罔時恫。刑于寡妻。至于兄弟。以御于家邦。

惠は順なり、宗公は宗廟の先公なり、恫は痛なり、刑は法なり、寡妻は適妻なり、御は迎なり、言ふこゝろは、文王の爲る所、皆能く先公の心に順ふあり、故に宗廟の神、是れを怨む者なく、是れを痛む者なし、文王能く神明に敬み事へて、其の佑助を受くるなり、文王又能く禮法を適妻に施し、内人倫の道を正して、以て風化の本と爲し、兄弟親族に至るまで之れを化し、内より外に及び、徧く天下に被るなり、御は迎なり、迎の義を進と爲す、寡妻に法り、兄弟を化し、進みて家邦に及ぶの謂なり、

雝雝在宮。肅肅在廟。不顯亦臨。無射亦保。肆戎疾不殄。烈假不瑕。

雝々は和なり、肅々は敬なり、肆は故今なり、戎は大なり、烈は業なり、假は大なり、瑕は遐なり、言ふこゝろは、文王の盛徳、宮中に在りては雝々として、自然の和あり、宗廟に在りては肅々として、自然の敬あり、文王家を治むるに和を以てし、神に事ふるに敬を以てす、其の徳顯かならずや、此の顯徳を以て民に臨む、民其の爲す所を美とし、其の徳に厭ふ者なく、皆安んじて之れを行ふ、故に今大に人の行ひを疾み、害ふ者之れを絶たずして、自ら絶え、子の功業、廣大にして、豊遠からずやとなり、

不聞亦式。不諫亦入。肆成人有徳。小子有造。古之人無斃。譽髦斯士。

言ふこゝろは、文王の聖徳、生れながらにして之れを知る者なれば、前人の言を聞き、古への道を學ぶに非ずと雖も、行ふ所、皆法則に合はざるなく、臣下の忠言直諫を待たずして、爲す所道に入らざるなし、此の聖徳を以て下民を教化す、故に今周國の成人、皆成徳あり、其の小子は、學びて皆善に進み、徳を造す所あり、此の成人、小子の此くの如くなる所以のものは、文王名譽髦俊の士を厭ふことなきが故に、人

皆風を聞きて起り奮ひて名譽を成し俊髦の士と爲るなりと古之人は、文王を指して言ふなり、是れ後世より言ふが故なり、

皇矣

皇矣上帝臨下有赫。監觀四方。求民之莫。維此二國。其政不獲。維彼四國。爰究爰度。上帝耆之。憎其式廓。乃眷西顧。此維與宅。○作之屏之。其留其翳。修之平之。其灌其栒。啓之辟之。其櫪其楛。攘之剔之。其壓其柘。帝遷明德。串夷載路。天立厥配。受命既固。○帝省其山。柞棫斯拔。松柏斯兌。帝作邦作對。自大伯王季。維此王季。因心則友。則友其兄。則篤其慶。載錫之光。受祿無喪。奄有四方。○維此王季。帝度其心。貺其德音。其德克明。克明克類。克長克君。王此大邦。克順克比。比于文王。其德靡悔。既受帝祉。施于孫子。○帝謂文王。無然畔援。無然歆羨。誕先登于岸。密人不恭。敢距大邦。侵阮徂共。王赫斯怒。爰整其旅。以按徂旅。以篤周祜。以對于天下。○依其在京。侵自阮疆。陟我高岡。無矢我陵。我陵我阿。無飲我泉。我泉我池。度其鮮原。居岐之陽。在渭之將。萬邦之方。下民之王。

詩

毛

毛

詩

○帝謂文王。予懷明德。不大聲以色。不長夏以革。不識不知。順帝之則。帝謂文王。詢爾仇方。同爾兄弟。以爾鉤援。與爾臨衝。以伐崇墉。○臨衝閑閑。崇墉言言。執訊連連。攸馘安安。是類是禡。是致是附。四方以無侮。臨衝蕩蕩。崇墉仡仡。是伐是肆。是絕是忽。四方以無拂。

此の詩古序に美し周也とあり、天より善惡を諸侯の國に監み、諸侯の内に就き、殷に代りて天子と爲るべき者を求めるに、周に若く者なく、周の善き所以は、諸侯の内にて世々徳を修むる者は、文王に若く者なければなり、故に此の詩を作りて之れを美するなり、

皇矣上帝臨下有赫。監觀四方。求民之莫。維此二國。其政不獲。維彼四國。爰究爰度。上帝耆之。憎其式廓。乃眷西顧。此維與宅。

皇は大なり、莫は定なり、二國は殷夏なり、四國は四方なり、究は謀なり、度は居なり、耆は惡なり、廓は大なり、言ふこゝろは、大なる上帝、下に臨むの威赫然として畏るべく、下に在るの事を見て、殷紂の暴虐なるが故に、民の安んじ定まることを得ざるを知り、務めて之れを安んぜんことを欲し、天下四方の諸國を監み視て、聖人を

得て主と爲し、民の定まらんことを求むるなり。此の夏殷の二國、其の政を爲すと
と民心に得ず、是に於て四方有道の國、各懼れて其居る所を謀る、上帝乃ち之れを
惡み、又桀紂が大位を用ひ、大政を行ひ、淫虐を肆にして、下民を殘害すること、憎
み、殷の都より眷然と首を廻らして、西の方岐周を顧るに、文王の天意に合へるを
以て、天常に文王の所に居り、之れをして主と爲りて民を定めしむとなり、此の詩、
紂を主として言ふなれども、紂の惡、桀に同じきを以ての故に、配して之れを言ふ
なり、

作之屏之。其菑其翳。修之平之。其灌其柵。啓之辟之。其樗其栝。攘之剔

之。其際其柘。帝遷明德。串夷載路。天立厥配。受命既固。

菑は木の立ち枯れせしを謂ひ、翳は木の自ら斃るゝを謂ふ、灌は潑りたる木なり、
柵は柵なり、小栗を謂ふ、樗は楊柳の類なり、栝は節ありて杖に作るべき木なり、際
は山桑なり、柘も亦桑の類なり、串は、習なり、夷は常なり、路は大なり、言ふこゝろは、
文王天命を受け、四方の民皆之れに歸す、然るに岐周の地、險隘にして、樹木尤も多
きに由り、之れを刈り除きて、田宅と爲す、乃ち樹木の枯れたるもの、倒れたるもの

は、屏けて除き、灌木、柵木のある所は、之れを修め、之を平げ、樗木、栝木あるの地は、之
れを開拓して廣からしめ、際木、柘木の類は、之れを剪り除きて、民の居る所に充つ
るなり、天文王の明德に遷りて之れを顧る所以は、文王世々常道に習ふを以て、是
の大位に居ることを得るなり、天文爲めに賢女を生じ、之れを立て、妃と爲し、天
命を受け、玉璽の基を興すこと堅固なりと、天の周を助くること遠きよりして、今
に始まるに非ざるを言ふなり、

帝省其山。柞械斯拔。松柏斯兌。帝作邦作對。自大伯王季。維此王季。因
心則友。則友其兄。則篤其慶。載錫之光。受祿無喪。奄有四方。

兌は易直なり、すらくとしたりることなり、對は配なり、因は親なり、友は兄弟に善
きなり、慶は善なり、光は大なり、喪は亡なり、奄は大なり、言ふこゝろは、天の文王を
顧み思ふことの深き、徒に其の民人を養ふのみならずして、恩澤又草木に及び、其
の國の風雨を和し、其の國內の山を善くし、山に生ずる柞械の木をして、拔然とし
て茂盛ならしめ、松柏の樹をして、兌然として直からしむ、天の周を興し、又之れか
爲めに明君を生じて、其の配と爲すは、是れ大伯王季の時よりして、既に然り、大伯

は大王の長子、王季は大王の少子なれども、大伯は其の弟、王季の子に文王の聖人あるを以て、大王の國を王季に傳へて文王に及ぼさんとするを知り、大王の病あるに臨み、藥を探るに託して、國を去り、遂に王季に譲りたり、大王卒して王季立ち、王季卒して文王に及ぶなり、故に又王季の徳を説きて曰はく、此の王季、親を親むの心あり、復其の兄弟に善きの友行あり、尤も其の兄大伯に友なるを以て、天、篤く之れに善を與へ、之れに大位を錫ひ、其の文王をして天下を有たしむ、此の文王の天下を有つは、王季、天の福祿を受けて、喪ふ所なきが故に、其の子孫に至りて、大に四方を有つことを得るなりと。

維此王季。帝度其心。猶其德音。其德克明。克明克類。克長克君。王此大邦。克順克比。比于文王。其德靡悔。既受帝祉。施于孫子。

王季は左傳及び韓詩外傳に引きて文王に作るを以て是とすべし、度は事を度りて義を定むるを謂ふ、猶は靜なり、言ふこゝろは、上帝、文王の心を開き、之れをして事を度り、義を定むるの思ひあらしめ、又其の德音を靜かにして、之れを人に施せば、人皆其の徳に應じ、又能く是非を照らすの明あり、又能く勤め施すに私なきの

帝謂文王。無然畔援。無然歆羨。誕先登于岸。密人不恭。敢距大邦。侵阮徂共。王赫斯怒。爰整其旅。以按徂旅。以篤于周祜。以對于天下。

此の章、天の文王に命ずる詞を作り、密と崇とを伐つことの私に非ざることを明かにするなり、畔援は道に畔きて人の土地を援き取るなり、歆羨は貪り羨むなり、岸は高地なるを以て、高位に喩ふ、密は密須氏といふ國の名なり、阮共は周の地名なり、旅は師なり、按は止なり、徂旅の旅は地名なり、對は遂なり、遂の訓は進なり、言ふこゝろは、天帝、文王に告げて曰はく、道に畔きて人の國邑を援き取ることを勿れ、

人の土地を羨みて、貪り求むること勿れ、此くの如くなることなくして、大に高位に升るべしと、然るに密國の人、不恭にして方伯の命を拒み、終に軍を起し、阮を侵し、其の地を指して行く、是を以て文王其の群臣と與に赫然として盡く怒り、其の軍旅を整へて、密人の旅に徂きて寇せんとするを止めたり、此の密を伐つ所以のものは、此の軍功を以て、國家の福を篤くし、且天下の人民、周の興らんことを望むの心を進むるなりと、此の時、民心皆密を伐たんことを欲す、而して文王之れに従ふ、是れ上は天意に應じ、下は民心に順ふものにして、道に畔き土地を貪るに非ざるなり、

依其在京。侵自阮疆。陟我高岡。無矢我陵。我陵我阿。無飲我泉。我泉我池。度其鮮原。居岐之陽。在渭之將。万邦之方。下民之王。

京は大阜なり、矢は陳なり、阿は大陵なり、大山と小山と連ならざるを鮮と曰ふ、將は側なり、方は則なり、言ふこゝろは、文王既に密人旅に行かんとするの寇を止め、更に問罪の師を發するに當り、大阜に升りて、師衆を整へ、然る後阮の疆より侵入り、高き岡に陟りて、密人の兵を望むに、兵を我が周地の陵に陳ぬる者なし、此れ

乃ち我が周の陵、我が周の阿なり、又我が地の泉に飲む者なし、此れ乃ち我が周の泉、我が周の池なり、文王の師行きて之れを沮む者なし、密人既に平らぐの後、乃ち鮮山の旁、平原の地を度りて、國都を營めり、此の地、岐山の陽に居り、渭水の側に在り、山に背き、水に跨る、万邦の則る所と爲り、万民の歸往する所と爲るとなり、

帝謂文王。予懷明德。不大聲以色。不長夏以革。不識不知。順帝之則。帝謂文王。詢爾仇方。同爾兄弟。以爾鉤援。與爾臨衝。以伐崇墉。

懷は歸なり、革は更なり、仇は匹なり、鉤は鉤梯なり、かけはしを謂ふ、臨は臨車なり、敵陣を望む車なり、衝は衝車なり、敵陣を衝きくづす車なり、崇は國の名墉は城なり、言ふこゝろは、上帝文王に告げて曰はく、我れ親む所なし、明德ある者に歸す、因りて文王の徳を説きて云ふ、音聲を大にして以て顔色に見はし、威嚴を以て人を凌くことを爲さず、天下三分の二を有ち、長大なるを恃みて紛更する所あらず、問ふことを待たずして知り、學に由らずして自ら知る、其の動作する所、常に天の法則に順ふ、此を以ての故に、天之れに歸して崇を伐たしむ、上帝又文王に告げて曰はく、其の崇を伐つや、汝に匹仇するの臣に詢ひ謀り、汝の兄弟親族と一同し、君臣

既に合ひ、親戚和同し、乃ち汝の鈞援と、爾の臨衝の車とを以て、往きて彼の崇城を伐つべしとなり。

臨衝閑閑。崇墉言言。執訊連連。攸馘安安。是類是禡。是致是附。四方以無侮。臨衝蕤蕤。崇墉仡仡。是伐是肆。是絕是忽。四方以無拂。

閑々は動搖なり、言々は高大なり、連々は徐なり、攸は所なり、馘は服せざる者を殺して、其左耳を獻するなり、類は軍を出すとき、郊内に於て天を祭るなり、禡は郊外に於て軍神を祭るなり、致は其國の群神を致し來らすなり、附は其先祖宗廟を國に依附するなり、蕤蕤は疆盛なり、仡仡は猶言々のごとし、肆は疾なり、忽は滅なり、言ふこゝろは、文王の崇を伐つや、兵至れば則ち服す、其武を用ゐる所なし、其の臨衝の車は、閑々然として動搖するのみ、之れを用ゐて以て敵を攻めず、崇の城言々として高大なり、毀ち壞る所なきが如きも、既に之れを伐ちて、而して服すれば、其の罪を問ふべき者を執へ、連々と徐かに其の情を盡して追らず、其の従はざる者を殺して、左耳を斬り、安々として暴疾ならず、而して文王の此の行に於ける、直に民を弔し、罪を伐つのみならず、又能く明神に敬み事へ、兵を出すの時、是に於て、類

詩

毛

毛

詩

祭を爲し、征する所の地に至り、是に於て、禱祭を爲し、既に崇國に克ち、是に於て、其の社稷群神を運致して、更らに之れを祭り、又其の先祖宗廟を國に依附して、之れが爲めに後を立つ、故に四方其の德に服し、其の威を畏る、是れを以て、敢て文王を侮る者なし、又深く其の伐を美し、重ねて其の事を詳かにす、言ふこゝろは、文王の臨車衝車、蕤々然として疆盛なり、崇城仡々然として高大なり、是に於て、師を用ゐて之れを伐つ、是に於て、兵を合せて疾く往き、之れを殄ち滅ぼす、文王、德、民を撫するに足り、威、惡を除くに足る、四方德に服し、威を畏れ、敢て文王の志に違ひ拂る者なし、此れ天の文武を以て般に代ふる所以なりと、崇國の君、名は虎、紂をして無道の事を爲さしめ、西伯を惡み、之れを紂に讒す、紂、西伯を美里に囚ふ、西伯の諸臣、美女奇物良馬を以て紂に獻す、紂、是に於て西伯を赦し、又弓矢鉄鉞を與へて、征伐することを得せしむ、西伯國に歸りて三年、崇侯虎猶惡を爲して、悛めず、故に之れを征伐せしなり、

靈臺

經始靈臺。經之營之。庶民攻之。不日成之。經始勿亟。庶民子來。○王在

靈囿。麀鹿攸伏。麀鹿濯濯。白鳥翯翯。王在靈沼。於物魚躍。○虞業維樅。賁鼓維鏞。於論鼓鐘。於樂辟雍。○於論鼓鐘。於樂辟雍。鼗鼓逢逢。矇瞍奏公。

(八〇六)

此の詩、古序に民始附也とあり、文王天下三分の二を有ちて般に事ふ、諸侯は皆文王の徳を知りて、之れに従ひたれども、愚夫愚婦に至りては、未だ文王の徳を知らず、靈臺を作るの時に至りて、民始めて文王の徳を知りて親附することを言ふなり、

經始靈臺。經之營之。庶民攻之。不日成之。經始勿亟。庶民子來。

經始とは、地取りを爲し、目標を立て、繩を張りて杭を打ち、建て始めを爲すことなり、靈は善なり、鬼神靈異の謂ひに非ず、文王徳行の善を以て言ふなり、四方にして高きを臺と曰ふ、攻は作なり、不日とは期日を設けざるなり、言ふこゝろは、文王始めて靈臺を作るの地を定め、之れを造營するに、衆庶の民來り集り、競ひて之れを作る、初めより期日を定めざれども、日數を費さずして、此の臺を成就せり、文王は急速に作れとの命令なけれども、庶民は皆子の父に従ふが如く、悦び來りて、其の

事に従ひしなり、

王在靈囿。麀鹿攸伏。麀鹿濯濯。白鳥翯翯。王在靈沼。於物魚躍。

王は文王なり、靈囿は靈臺の下に在る囿の名、囿は鳥獸を養ふ所なり、麀鹿は牝鹿なり、濯々は娛み遊ぶなり、翯々は肥えて光澤あるなり、靈沼は池なり、於は嘆辭なり、物は滿なり、言ふこゝろは、文王靈囿に在ます、麀鹿安んじて伏し、馴れて驚かず、濯々として樂み遊び、白鳥は翯々と肥えて潤澤あり、文王靈沼に在ます、其の魚池中に充ちて皆躍る、鳥獸魚鼈と雖も、皆其所を得ざるなきなり、

虞業維樅。賁鼓維鏞。於論鼓鐘。於樂辟雍。

虞は木を兩旁に植て、樂器を懸くるものなり、其の上の横木を柶と曰ふ、業は柶の上に板を刻みて飾りと爲せしものなり、樅は又其の上の物を懸くる處に綠色にて飾りあるを謂ふ、又之れを崇牙と謂ふ、賁は大鼓の名、長さ八尺、徑四尺あり、鏞は大鐘の名、此の二つは柶虞に懸くるなり、樂器は是れのみならず、特も其の大なるものを擧ぐるなり、論は倫なり、辟雍は文王の學宮の名なり、此に於て射禮を行ひ、又音樂を習はすなり、此の學宮の周圍を圍き池となし、禮樂を觀る者を

(八〇七)

して近づくこと勿からしむ、文王已に靈臺を建て、民の歸附することを知り、又靈沼を作りて、鳥獸の其の所を得ることを知り、民の樂みに因りて之れを樂に寫す、樂徒らに作らず、蓋し四海の歡心を形容する所以なり、故に鼓鐘の音を論理して辟靡に樂するなり、

於論鼓鐘。於樂辟靡。鼙鼓逢逢。矇瞍奏公。

鼙は蜥蜴の如く、長さ六七尺、其の皮を以て張りたる大鼓を鼙鼓と曰ふ、逢々はその聲の和するなり、矇瞍は盲人なり、眸子ありて見えざるを矇と曰ひ、眸子なきを瞍と曰ふ、公は事なり、古へ瞽者を以て樂師と爲す、其の音聲に審かなるを以てなり、此の章、辟靡の學宮にて、音樂を奏するの狀を贊美するなり、

下武

下武維周。世有哲王。三后在天。王配于京。○王配于京。世德作求。永言配命。成王之孚。○成王之孚。下土之式。永言孝思。孝思維則。○媚茲一人。應侯順德。永言孝思。昭哉嗣服。○昭茲來許。繩其祖武。於萬斯年。受天之祜。○受天之祜。四方來賀。於萬斯年。不遐有佐。

此の詩、古序に繼、文也とあり、武王聖人の徳ありて天命を受け、文王の功業を成就して、天下を有ちたることを述ぶるなり、

下武維周。世有哲王。三后在天。王配于京。

下は後なり、武は繼なり、後世に在りて先祖の徳を繼ぐの義なり、哲は知なり、三后は大王王季文王なり、王は武王なり、言ふことゝるは、後人能く先祖に繼ぐものは維れ周家の最も大なるあり、然る所以のものは、世々明哲の王あればなり、大王王季文王の三后、皆忠厚にして徳を積み、今已に没したれども、其の神、天に在り、武王又能く徳を修めて、三后に忝ぶることなく、其の位を繼ぎ、三后に配して、鎬京に在るなりと、

王配于京。世德作求。永言配命。成王之孚。

作は爲なり、求は終なり、言は我なり、命は猶教令と曰ふがごとし、言ふことゝるは、武王鎬京に在りて、三后の道に配し、其の徳を行ふものは、先祖より世々徳を積み、武王に至りて、其の終りを爲ししなり、文王未だ紂を滅さず、是れ王事未だ終らず、武王紂を討ち、終に大功を成就せしなり、武王永く三后の教令に配し行ふものは、民

をして周家の王道を信ぜしめんが爲めなりと、下民信ぜざれば、王の徳成らざればなり、

成王之孚。下土之式。永言孝思。孝思維則。

式は法なり、言ふこゝろは、武王三后の教令に配し行ふところ、王者の大信と爲り、天下の人皆之れを以て法則と爲す、而して天下の人、武王を以て法則と爲すものは、武王の能く先人に則りて孝なるが故なりと、孝悌の至り、神明に通じ、四海に光る、民安んぞ之れに則らざることを得んや、

媚茲一人。應侯順德。永言孝思。昭哉嗣服。

媚は愛なり、茲は此なり、一人は武王を指して言ふ、應は當なり、侯は維なり、服は事なり、言ふこゝろは、天下の人皆武王の行ふ所、三后の順徳に當るを愛す、武王能く孝心の思ふ所を長くし、祖考の事を嗣ぎ行ひ、紂を討ちて天下を定む、豈明かならずやと、

昭茲來許。繩其祖武。於萬斯年。受天之祜。

許は進なり、繩は戒なり、祜は福なり、來許は猶後進といふがごとし、言ふこゝろは、

後進の武王能く其の先祖行ふ所の迹を戒め慎みて、之れを行ふが故に、天下人民の仰ぎ樂む所と爲り、皆武王をして万年の壽を得、且多く天の福祿を得せしめんことを願ふなりと、武王善を行ふが故に、民の之れを愛すること此くの如きを言ふなり、

受天之祜。四方來賀。於萬斯年。不遐有佐。

不は助語なり、遐は遠なり、言ふこゝろは、武王既に天の福を受く、故に四方諸侯の國皆貢獻して之れを賀し、又萬年の壽を得、遠方夷狄の國亦來りて之れを助くとなり、武王商に克ちて、道を九夷八蠻に通ずとあれば、當時四方の人來り賀せざる者なきや知るべし、

文王有聲

文王有聲。遙駿有聲。遙求厥寧。遙觀厥成。文王烝哉。○文王受命。有此武功。既伐于崇。作邑于豐。文王烝哉。○築城伊瀆。作豐伊匹。匪棘其欲。遙追來孝。王后烝哉。○王公伊濯。維豐之垣。四方攸同。王公維翰。王后烝哉。○豐水東注。維禹之績。四方攸同。皇王維辟。皇王烝哉。○鎬京辟

靡。自西自東。自南自北。無思不服。皇王烝哉。○考卜維王。宅是鎬京。維龜正之。武王成之。武王烝哉。○豐水有芑。武王豈不仕。詒厥孫謀。以燕翼子。武王烝哉。

此の詩古序に繼伐也とあり伐を繼ぐとは武王能く文王の崇を伐ちたるに繼ぎ、紂を伐ちて征伐の功を全くし卒はるを言ふなり。

文王有聲。遼駿有聲。遙求厥寧。遙觀厥成。文王烝哉。

淵は述なり駿は大なり求は終なり觀は多なり烝は君なり言ふこゝろは文王の善き聲譽あるものは大王王季令聞ある所の善聲を述べて之れを大にし又大王王季民を安んずるの道を述べ行ひて之れを終へ又大王王季民を成すの徳を述べ行ひて之れを多くす此を以ての故に周の徳益盛んなり文王誠に入君たるの道を得るものなりと終ふとは其の事の終らざるを終へ多くすとは其の事の少きを多くするを謂ふなり。

文王受命。有此武功。既伐于崇。作邑于豐。文王烝哉。

武功は密阮等の國及び崇を伐つ功を謂ふなり言ふこゝろは文王已に天命を受けて此の武功あり既に崇を伐ちて都を豊邑に遷し人民を安んじ天命に應ず、文王誠に入君たるの道を得るものなりと武功といふ中に崇を伐つことを兼ねたれども更に崇を伐つといふものは其の功の最も大なるを以てなり。

築城伊瀆。作豐伊匹。匪棘其欲。遙追來孝。王后烝哉。

瀆は城の壕なり十里四方を一成と曰ふ成の四界に溝あり之れを瀆と謂ふ廣さ深さ各八尺匹は配なり棘は急なり后は君なり言ふこゝろは文王城を豊邑に築くに瀆の廣さに視らへ敢て其の城を大にせず豊邑と相配して其の宜しきに適ふものなり而して文王の都を遷し城を築くこと急に其の欲する所を遂げんとするに非ず先祖民を安んずるの志を追ひて其の業を進めんが爲めなり文王誠に入君たるの道を得るものなりと王后と曰ふものは亦文王の君たる道を盡すことを美するなり。

王公維濯。維豐之垣。四方攸同。王后維翰。王后烝哉。

公は事なり濯は大なり翰は幹なり言ふこゝろは王事の大なること猶豊城の垣のごとし夫の垣を築くものは兩邊に板を束ね必ず立つる所の餘ありて牆と法

を爲す、亦猶四方の國同じく文王を待みて、之が楨幹と爲すがごとし、文王誠に入
君たるの道を得るものなりと、

豊水東注。維禹之績。四方攸同。皇王維辟。皇王烝哉。

績は業なり、皇は大なり、皇王といふものは、武王は諸侯に繼ぎて天子と爲ればな
り、言ふこゝろは豊水東に流れて、渭水に注ぎ河に入るものは、維れ大禹の功業な
り、大禹之れを決して水を治めし故に、其の傍に平地を成すことを得るなり、文王
豊邑を作るは、豊水の西に在り、武王鎬京を作るは、豊水の東に在り、蓋し豊の邑た
る、小にして天子の都と爲すに足らず、故に武王に至り、文王豊を作るの意を述べ
て、鎬京を作る、然る後能く四方の同く歸する所を受けて、之れを治む、武王の君道
を盡すことを美して、皇王維辟、皇王烝哉と云ふなり、

此の章、書の禹貢に、澧水攸同とあるを以て、鎬京の四方攸同を興し、禹績を以て、武
王の功業を興すなり、

鎬京辟廱。自西自東。自南自北。無思不服。皇王烝哉。

思は助辭なり、言ふこゝろは、武王既に鎬京を建て、乃ち辟廱を作りて、學校を興し、

武功を偃せて、文教を崇び、東西南北悦びて心服せざるなし、又武王の君道を盡す
とを美するなり、武王已に文王豊を作るの舉を述べて、鎬京を作り、四方の觀聽を
動かすも、雖も、未だ文王辟廱の教養を述べて、四方の心服を致すに、若かず、則ち學
校の國家に於ける、豈重からずや、

考卜維王。宅是鎬京。維龜正之。武王成之。武王烝哉。

言ふこゝろは、武王此の鎬京を作らんとするの時、龜を灼きて之れを卜ひ、吉兆を
出だせし故に、營作して此の都を成せしなり、基礎を定めて後人に遺すもの、苟も
する所に非ず、武王誠に入君たるの道を盡すものなりと、

豊水有芑。武王豈不仕。詒厥孫謀。以燕翼子。武王烝哉。

芑は草の名、仕は事なり、燕は安なり、翼は敬なり、言ふこゝろは、豊水の傍に芑菜あ
り、水は無情のものなれども、猶潤澤して芑を生ず、况や武王功業を以て事とせざ
らんや、澤の後人に及ぶを得んことを思ひ、其の天下の謀に順ふ所以のものを遺
し傳へ、以て事を敬するの子孫を安んずべし、武王誠に入君たるの道を盡すものな
りと、

古序下武の詩に於ては、繼文也と云ひ、此の詩に於ては、繼伐也と云ふ、蓋し文王の文徳に繼ぎて、後に文王の伐功を卒ふるなり、文王大王王季の業を述べて已に其の聲あり、武王従ひて之れを大にす、此れ文王有聲の作る所か、此の詩、前の四章は、文王の君たる所以を言ひ、後の四章は、武王の君たる所以を言ふ、文王未だ嘗て王たらずして、文王と曰ひ、王后と曰ふものは、天下之れを稱するの辭、其の君たるの道あるを以て、宜く吾が君たるべきを見はずなり、武王に至りては、即ち王業の大なるを以て、皇王と曰ひ、武王を以て之れを終ふ、文王の作るに方りてや、天下文王の君たらんことを欲すれども、得可らず、文王民を安んずるに心ありて、王業を成すに心なし、故に人に君たるの大徳ありと雖も、君に事ふるの小心を忘れず、天下の人皆其の君たらんことを欲して、之れを稱するを樂む、故に文王烝哉と曰ひ、又王后烝哉と曰ふ、之れを樂むの辭なり、周徳の宜く王たるべきこと久し、文王宜く王たるべくして王たらず、然れども文王諸れを其の身に逃れて、諸れを其の子に逃るゝこと能はず、武王一たび興るに至り、東征の士女皆厥の玄黃を籠に充て、之れを迎へ、曰はく是れ西伯の子なり、是れ吾が民の君なりと、吾が君の稱尤も人

民の口に籍々たり、則ち皇王烝哉、武王烝哉と曰ふ、亦之れを樂むの辭なり、文王を以て父と爲して、武王を以て子と爲す、父子兩聖にして、天下心を一にし、武王は文王の君たる所以の者を以て、天下に王たり、天下又文王を愛する所の者を以て、武王を愛す、此の詩八章皆烝哉の辭に出でず、文王武王の民心を得る所以、此に於て見るべきなり、

生民

厥初生民時維姜嫄。生民如何。克禋克祀。以弗無子。履帝武敏。歆攸介攸止。載震載夙。載生載育。時維后稷。○誕彌厥月。先生如達。不坼不副。無菑無害。以赫厥靈。上帝不寧。不康禋祀。居然生子。○誕寘之隘巷。牛羊腓字之。誕寘之平林。會伐平林。誕寘之寒冰。鳥覆翼之。鳥乃去矣。后稷呱矣。○實覃實訐。厥聲載路。誕實匍匐。克岐克嶷。以就口食。蓺之荏菽。荏菽旆旆。禾役穰穰。麻麥幪幪。瓜瓞嗒嗒。○誕后稷之穡。有相之道。茀厥豐草。種之黃茂。實方實苞。實種實稂。實發實秀。實堅實好。實穎實栗。即有邰家室。○誕降嘉種。維秬維秠。維糜維芑。恒之秬秠。是稷是畝。

恒之糜芑是任是負以歸肇祀。○誕我祀如何。或春或揄。或皦或蹂。釋之。叟叟烝之浮浮。載謀載惟。取蕭祭脂。取羝以軋。載燔載烈。以興嗣歲。○卬盛于豆。于豆于登。其香始升。上帝居歆。胡臭亶時。后稷肇祀。庶無罪悔。以迄于今。

此れより以下、板に至るまで十篇を生民之什と爲す、此の詩、古序に尊祖也とあり、文王天命を受け、武王殷の亂を平らげて、天下を定むるの功は、后稷より起るを以て、后稷を尊び、天に配して之れを祀るなり、

厥初生民。時維姜嫄。生民如何。克禋克祀。以弗無子。履帝武敏。歆攸介攸止。載震載夙。載生載育。時維后稷。

民は后稷を指す、民と曰ふものは、其の初めて生るゝとき、未だ位あらざればなり、姜は姓、嫄は名、姜嫄は炎帝神農氏の後にして、有邰氏の女なり、帝嚳高辛氏の妃と爲る、即ち后稷の母なり、禋は祭りの名なり、弗は去なり、履は踐なり、帝は高辛氏の帝なり、武は迹なり、敏は疾なり、歆は饗なり、震は動なり、夙は早なり、育は長なり、言ふことゝろは、厥の初め此の民を生む者は誰そや、是れ維の姜嫄なり、又問うて曰は

誕彌厥月。先生如達。不圻不副。無蓄無害。以赫厥靈。上帝不寧。不康禋祀。居然生子。

く、姜嫄の此の民を生む、如何して之れを生むや、姜嫄克く郊禘の神に禋祀して、子なきの疾を除き去り、而して之れを生むなり、禘は天子子を求むるの祭りにして、郊野に於て祭るなり、郊禘を祀るの時、姜嫄其の夫高辛氏に隨ひて行き、帝の迹を履みて、事を行ふこと、敬ひて敏疾なりしが故、神の納受する所と爲り、神既に其の祭りを饗け、愛して之れを佑け、大に福祿を止め、即ち懐妊することを得せしむ、姜嫄禋祀より歸りて、忽ち心動き、震撼することありて、身めるなり、既に生るれば、則ち之れを養ふ、其長ずるに及びて、舜に擧げ用ゐられ、百穀を播種して、下民を利益す、是れ則ち后稷なりと、

誕は大なり、歎美の詞なり、彌は終なり、達は生なり、圻副は皆裂なり、赫は顯なり、不寧は寧なり、不康は康なり、言ふことゝろは、大なるかな后稷生るゝの易き、姜嫄の後稷を孕むや、其の月を終へ、十月に満ちて之れを生めり、凡そ婦人の初めて子を産する難み多きものなれども、后稷の生るゝは、其の易きこと、再生三生の如く、また

母の胎内に在りても、母を疾ましむることなく、其の生るゝときも、産道を裂き破る等の事なく、其の母に災害なくして、其の神靈あることを顯はせり、上天の意、誠に福を降して之れを寧んずるなり、姜嫄亦禋祀に康んぜられ、祈れば則ち子あり、之れを生む又易し、故に居る處憐然として病ひなく、子を生むなりと、
誕寘之隘巷。牛羊腓字之。誕寘之平林。會伐平林。誕寘之寒冰。鳥覆翼之。鳥乃去矣。后稷呱矣。

誕は大なり、寘は置なり、腓は辟なり、字は愛なり、呱は泣く聲なり、上に后稷の生るゝことを言ひ、此の章、后稷の棄てらるゝことを言ふ、姜嫄禋祀より歸り、心動くの後、速かに懷孕せしを以て、疑懼することなきに非ず、故に后稷生るゝの後、特に之れを棄て、其の吉凶を試み、其の獸の之れを避け、鳥の覆ふに至り、然る後、上天の靈異あるを知り、之れを收め養ひて疑はざるなり、古の人情淳樸なる、皆理の常なり、又或は后稷の相貌、人に異なる所ありて、棄てらるゝか、毛傳に天生后稷、異之於人、欲以顯其靈也とあれば、必ずや其の説を受くる所あるべし、言ふことゝろは、大なるかな、此の后稷を狹隘なる巷に棄て置けば、牛羊共に之れを避けて踐まず、之れ

を愛するの意あり、牛羊の人を避くるは、理の常ならんと思ひ、又之れを平林の中に置けば、大なるかな、人の平林の木を伐るあり、見て之れを收め養はんと思ふ、夫の嬰兒の林中に在る、鳥獸に害せらるべきものなり、然るに人の收養に値ふは、美大の事と謂ふべきなり、然れども又人の之れを收むるは、常の事なりと爲し、復之れを寒冰の上に置けば、大なるかな、大鳥來り、一翼を以て之れに藉き、一翼を以て之れを覆ひたり、人類に非ざるものにして之れを覆ふは、最も美大すべきの事なり、是に於て其の神あるを知り、往きて之れを收め養ふ、鳥乃ち飛ひ去り、后稷呱呱として泣くととなり、此れ神靈あるの驗なり、

實覃實訐。厥聲載路。誕實匍匐。克岐克嶷。以就口食。蓺之荏菹。荏菹施施。禾役穰穰。麻麥幪幪。瓜瓞嗒嗒。

覃は長なり、訐は大なり、路は大なり、岐は知る意、嶷は議なり、荏菹は大豆なり、施々は成長する貌、從は列なり、穰々は苗の好美なるなり、幪々は茂り盛んなる貌、嗒々とは實のると多き貌なり、此の章、后稷長養の事を説く、言ふことゝろは、后稷漸く長じ、漸く大なり、是の時に於て、口より出す所の音聲甚だ大なり、復呱呱の時の如く

ならず大なるがな、實に這ひ行くの時より、已に意知る所ありて岐々然たり、又能く貌識るす所ありて、巖々然たり、漸く知慧ありて、自ら食物を取りて、口に就き之れを啖ふ、纒に能く食すれば、即ち種を播き、物を殖うるの志あり、大豆を殖うれば、旃々然として長大となり、禾を殖うれば、則ち其の苗列り、穰々然として美好なり、麻麥を殖うれば、則ち矍々然として茂り盛んなり、瓜瓞を殖うれば、則ち其の實は嘩々然として衆多なり、后稷幼年の時より遊戯して爲す所と雖ども、天性あるを以て、其の種殖するもの此くの如し、果して稷官と爲りて、天下其の徳を蒙りしなり。

誕后稷之穉。有相之道。弗厥豐草。種之黃茂。實方實苞。實種實稂。實發實秀。實堅實好。實穎實栗。即有邰家室。

相は助なり、莠は治なり、黃は嘉穀なり、黍稷を主として言ふ、其の色黄にして五穀の長なればなり、茂は美なり、方は田畝一面に生ずるを謂ふ、苞は本なり、種は雜種なり、種々生じて雜はらざるなり、稂は長なり、發は穂の盡く生ずるなり、秀は花さかずして實のなるなり、穎は穂の大にして垂るゝなり、栗は禾の成るなり、上に后稷

幼き時より種藝を好みしことを言ひ、此の章、稷官たりし後の事を言ふなり、言ふこゝろは大なるかな、后稷の農官となりて民に耕作を教ふるや、其の穀物の實のり盛んなること、人力の及ぶ所に非ず、神の助けあるが如し、其の盛んに長ずる草を治めて之れを去り、此の地に種うるに、黄色にして茂盛なる黍稷を以てす、此の穀既に生じて、田畝を極め、空缺する所なく、根本盡く均調して、稀疎なる處なく、其の苗肥大に、稂然として成長し、秋に至れば、皆穂を發し、粒を生ずる、皆秀で、其の粒堅くして好く、穂重くして垂れ、粟々として成熟す、故に收入尤も多ければ、帝堯其の功を善とし、之れに土地を賜ひ、之れを邰に封して君と爲し、有邰國の家室に就きて居らしむとなり、邰は姜嫄の國なり。

誕降嘉種。維秬維秠。維糜維芑。恒之秬秠。是稷是畝。恒之糜芑。是任是負。以歸肇祀。

秬は黑黍なり、秠は一つさやの中に米二つあるなり、糜は赤梁粟なり、芑は白梁粟なり、恒は徧なり、肇は始なり、上既に后稷功成りて國を受くることを云ふ、堯はた稷に命して天に事へしむ、此の章、其の天を祭る事を言ふなり、言ふこゝろは、大な

毛

るかな后稷の善く稼穡を爲すや、上天乃ち善き穀種を下して之れに與へ、此れを以て天を祭ることを得せしむ、其の嘉種といふものは、則ち黒黍の秬、及び黒黍二米の秠、是の赤苗の糜、是の白苗の芒なり、后稷既に此の善種を得、乃ち徧く之れに種うるに秬秠を以てし、其の熟するに至りては、則ち之れを刈り、之れを畝に置き、徧く之れに種うるに糜を以てし、芒を以てし、其の熟するに至りては、則ち之れを任ひ、之れを負うて歸り、此の秬秠糜芒の穀を以て、始めて上天を祀るなり、

誕我祀如何。或舂或揄。或簸或蹂。釋之叟叟。烝之浮浮。載謀載惟。取蕭祭脂。取羝以軋。載燔載烈。以興嗣歲。

舂は臼に入れて舂くとなり、揄は舂きたる黍を臼より出すなり、簸は糠をひるなり、蹂は履むなり、釋はとくなり、烝は炊くなり、叟々は滌ふ聲、浮々は氣の立ち升るなり、蕭は香草なり、脂は獸の脂なり、蕭に合せて之れを焼き、其氣を牆屋に達するなり、羝は牡羊なり、軋は道を行くときの祭なり、燔は肉を火にて炙るなり、烈は肉を申に貫きて炙るなり、此の章、天を祭る事を言ふ、言ふころは、大なるかな、我が后稷の天を祭る、其の禮如何ん、先づ得る所、秬秠糜芒の粟を以つて、或は人をして

毛

詩

之れを舂かしめ、或は之れを舂より出だし、其の糠を簸揚げ、或は人をして其の黍を蹂ましむ、其の事を執る、並に皆敏疾なり、既に蹂み舂きて米を得れば、乃ち之れを盆に浸し、之れを釋す、其の聲洩々然たり、又之れを甑に炊きて之れを蒸せば、其の氣浮々然として升る、既に酒食を作り、其の祭祀の事を謀り思ひ、其の謹まざる所なく、備はらざる所無きを欲するなり、祭りの日に至り、乃ち蕭の香と牲の脂とを取り、之れを焚き、其の馨香をして遠く聞えしめ、又羝羊を取りて、軋の祭りを爲す、其の軋を祭るや、祭る所の肉を取り、或は之れを燔し、或は之れを烈し、以て神に差め、乃ち此れよりして郊に往き、以て天を祭るなり、是れ來歲を興し、往歲に嗣ぎて、恒に豐年を得せしめんことを願ふなりと、

印盛于豆。于豆于登。其香始升。上帝居歆。胡臭亶時。后稷肇祀。庶無罪悔。以迄于今。

印は我なり、木にて作りたるを豆と曰ひ、瓦にて作りたるを登と曰ふ、豆は漬け物、ひしほの類を盛り、登は大羹を盛る、大羹は太古の羹、肉のみを煮たるなり、胡は何なり、亶は誠なり、迄は至なり、上に往きて天を祭らんとすることを言ひ、此の章、正

祭の事を言ふなり、言ふこゝろは、我が后稷、醴、大羹の屬を以て、之れを豆に盛り、之れを登に盛り、此れを以て薦め祭る、其の馨香の氣、升りて天に達し、上帝乃ち安んじて之れを饗し、何ぞ芳ばしき臭の誠、に其の時を得る、此くの若きものあらんや、此くの如く善なるものなきなり、上帝既に后稷の祭祀を享け、之れに福祿を降せり、又述べて之れを美して曰はく、后稷堯の命を受け、始めて上帝を郊に祀り、其の福乃ち天下の衆民に流れ、皆其の所を得、罪過ありて、人をして悔い恨みしむることなく、子孫其の餘福を蒙り、今に至りて之れに頼り、文王之れに由りて起り、以て太平を致す、故に祭りて天に配するなりと、

行 葦

敦彼行葦。牛羊勿踐履。方苞方體。維葉泥泥。○戚戚兄弟。莫遠具爾。或肆之筵。或授之几。○肆筵設席。授几有緝御。或獻或酢。洗爵奠饗。○醢醢以薦。或燔或炙。嘉穀脾臄。或歌或粿。○敦弓既堅。四鍤既鈞。舍矢既均。序賓以賢。○敦弓既句。既挾四鍤。四鍤如樹。序賓以不侮。○曾孫維主。酒醴維醕。酌以大斗。以祈黃耇。○黃耇台背。以引以翼。壽考維祺。以

介景福

此の詩、古序に忠厚也とあり、周家積世能く忠厚にして、其の仁恩草木に及び、其の仁愛の深きを以て、内は九族を睦しくし、外は老者を尊敬し、善言を乞ひて、政事の助けと爲し、以て王室の福を爲すことを美するなり、

敦彼行葦。牛羊勿踐履。方苞方體。維葉泥泥。

葦は聚まる貌なり、行は道なり、葦はあしなり、苞は弱き貌なり、體は形を成すなり、泥々は初めて生じ出づるに難める貌なり、言ふこゝろは、周の先王、忠厚の至り、敦々と聚まれる道旁の葦を見るも、乃ち牧者を禁じ、其の牧ふ所の牛羊をして、之れを踐み傷はしむること勿らしむ、何んとなれば、此の葦生じて、將に體を成さんとす、其の葉泥々として出づるに難めり、故に之れを愛で惜むなり、先王の愛、草木に及ぶ、况んや人に於けるをやとの意なり、

戚戚兄弟。莫遠具爾。或肆之筵。或授之几。

戚々は内心より相親めるなり、肆は陳なり、言ふこゝろは、先王此の仁愛の心を以て、誠心兄弟を親み、遠きとなく、近きとなく、之れを近づけ集めて、宴を設け、之れと

與に燕樂す、或は筵を陳ねて之れに坐せしむる者あり、或は几を老人に授けて、之れに凭らしむるものあり、能く親戚を親んずることを言ふなり、

肆筵設席。授几有緝御。或獻或酢。洗爵奠饗。

緝御は蹴踏の容と註し、歛め飾へて老人を敬ふの義と爲す、主人酒を酌みて客に進むるを獻と曰ひ、客之れに答ふるを酢と曰ふ、饗は爵なり、周にて爵と曰ひ、般にて學と曰ふなり、言ふこゝろは、已に筵を陳ね、又席を筵の上に加へ、又几を授けて、老人を肅敬し、而して献酬の禮を行ふとなり、

醢醢以薦。或燔或炙。嘉殽脾臄。或歌或嘏。

醢醢はししびしほなり、燔はやきものなり、肉を用ふ、炙はあぶりものなり、肝を用ふ、臄は唇の肉なり、歌は琴瑟に合せて歌ふなり、嘏は鼓のみを撃つなり、言ふこゝろは、已に献酬の禮を行ひ、之れに飲ましむること、至らざる所なし、又醢醢燔炙脾臄等の嘉肴を薦め、之れに食はしむること、至らざる所なし、飲食の具既に至り、又之れを樂ましむる所以を思ひ、或は琴瑟に和して歌ひ、或は鼓を撃つ、皆親を親むの誠、至らざるなきを見るなり、

敦弓既堅。四鍤既鈞。舍矢既均。序賓以賢。

敦弓は畫きて飾れる弓なり、鍤は根矢なり、鈞とは矢を三分して、根の方一分、羽の方二分にして、平均を得るを謂ふ、均とは四矢皆的に中るなり、此の章以下、養老の禮を説く、先王將に老を養はんとす、親ら射て士を擇む、則ち大射なり、言ふこゝろは、天子自ら射る所の敦弓、既に堅くして且勁し、其の四鍤の矢、輕重既に均しく、之れを放てば、四矢皆的に中る、王既に射て以て賓を擇む、賓客皆賢者に非ざるなし、賢者に非ざれば、此の席に列ること能はざればなり、

敦弓既句。既挾四鍤。四鍤如樹。序賓以不侮。

句は殼と同じく、弓を引き滿つるなり、言ふこゝろは、天子自ら射る所の敦弓、既に其の弦を挽きて、之れを滿て、既に四鍤の矢を挾みて、徧く之れを放つ、四鍤の矢皆的に中り、手を以て之れを樹つるが如し、王既に善射を爲し、賢者を擇みて賓と爲す、故に其の賓たる者、恭敬の賢人にして、人を侮る者あらざるなり、

曾孫維主。酒醴維醕。酌以大斗。以祈黃耇。

曾孫は成王なり、醕は厚なり、大斗は柄の長さ三尺あり、祈は報なり、言ふこゝろは、

曾孫成王主人と爲りて、賓客を享する、其酒醴皆醇厚にして、之れを酌むに大斗を以てし、以て黄者の人に報ず、蓋し従ひて善言を求め、之に報養するなり、

黄耆台背。以引以翼。壽考維祺。以介景福。

台は鮠と同じ鮠は魚の名、和名ふぐと曰ふ、老人の背色鮠の皮に似たり、台背は九十を謂ふ、祺は吉なり、介は大なり、言ふところは、成王の老人を養ふ、一時に止まるた非ず、此の黄耆台背の老人に在りては、人をして禮を以て之を引き、禮を以て之を翼けしむ、前に在るを引と曰ひ、旁に在るを翼と曰ふ、成王養老の禮を行ひ、善言を求めらるゝに由り、亦壽考にして吉なることを得、其大なる福を受くるなりと、

既 醉

既醉以酒。既飽以德。君子萬年。介爾景福。○既醉以酒。爾殺既將。君子萬年。介爾昭明。○昭明有融。高朗令終。令終有俶。公尸嘉告。○其告維何。籩豆靜嘉。朋友攸攝。攝以威儀。○威儀孔時。君子有孝子。孝子不匱。永錫爾類。○其類維何。室家之壺。君子萬年。永錫祚胤。○其胤維何。天被爾祿。君子萬年。景命有僕。○其僕維何。釐爾士女。釐爾士女。從以孫

子。

此の詩古序に大平也とあり、成王の宗廟を祭るに、群臣之れを助け、祭りの末に至りて、酒に酔はざる者なく、徳澤を被らざる者なく、人皆君子の行あり、故に之れを美するなり、

既醉以酒。既飽以德。君子萬年。介爾景福。

言ふところは、成王の宗廟を祭るに、群臣之れを助け、其の宗廟に供へたる酒を群臣に賜はり、後には爵を算ふることなく、飲むことゆゑ、終に皆酔ふに至る、而して酒を飲むの中、又之れに接するに禮樂を以てし、酒に酔うて亂に至らず、是れ徳に飽くなり、成王の徳此くの如くなるに由り、万年の壽を有ち、天より大福を與ふべしとなり、

既醉以酒。爾殺既將。君子萬年。介爾昭明。

將は行なり、さしげすむるなり、昭は光なり、言ふところは、成王既に群臣を酔はしむるに酒を以てし、宗廟に薦めたる俎の肉を進めらる、成王の臣下を待つこと此の如し、成王當に萬年の壽あるべく、天又成王を光大にして、之れに與ふるに昭

明の道を以てし、政教をして常に善からしめ、永く明君と爲すべしとなり、

昭明有融。高朗令終。令終有俶。公尸嘉告。

融は長なり、朗は明なり、言ふこゝろは、天既に成王を光大にするに昭明の道を以てして、甚だ長きことあり、故に王の徳高明にして、終りを善くす、禮は祭りより重きはなく、饗燕は禮の始にして、祭祀は禮の終りなり、終りを善くすとは、王の祭祀を善くするを謂ふなり、而して王の終りを善くする、又始めあり、王饗燕の禮に於ても、亦善く之れを爲す、故に祭りの時、諸侯の公、王の爲めに先祖の尸となり、善を以て王に告げ、福を受けしむるなり、

其告維何。籩豆靜嘉。朋友攸攝。攝以威儀。

言ふこゝろは、公尸王に善言を告げしことは何ぞといふに、籩豆に盛る所の品物の潔くして嘉きは、政事の平かなるに由り、天地の氣和順して豊年なればなり、又群臣の祭りを助くる者、威儀ありて、神の意に適するを以て、善言を告げらるゝとなり、朋友は群臣を謂ひ、人の畏るべきを威と曰ひ、人の法るべきを儀と曰ふなり、

威儀孔時。君子有孝子。孝子不匱。永錫爾類。

匱は竭なり、類は善なり、言ふこゝろは、成王の群臣、祭祀を助くる者、甚だ威儀ありて、其の時宜に適ひ、皆君子の人にして、孝子の行ひあり、而して此の孝子、竭き極まるの時あらず、孝道を以て天下に及ぼし、相教化すれば、則ち天永く王に賜ふに善道を以てすべしとなり、

其類維何。室家之壺。君子萬年。永錫祚胤。

壺は廣なり、言ふこゝろは、天より王に善道を賜ふものは何ぞといふに、此の善道を室家の中に施し、室家の善を以て、廣く天下に及ぼすなり、此くの如くなれば、則ち成王當に万年の壽あるべく、天又永く王に福祚を錫ひて、胤嗣の子孫に至り、福をして後世に及ぼしめんとなり、

其胤維何。天被爾祿。君子萬年。景命有僕。

祿は福なり、僕は附なり、言ふこゝろは、祚の後胤に及ぶとは何ぞといふに、天汝に被らしむるに福祿を以てし、之れをして長く王位を保ち、天下に臨ましむるなり、王既に祿を受くること此くの如くなれば、万年の壽ありて、天の大命附著する所あり、則ち之れを子孫に傳ふべきなり、

其僕維何。釐爾女士。釐爾士女。從以孫子。

釐は予なり、言ふこゝろは、其の大命附く所の事は何ぞといふに、汝に與ふるに女にして士の行ひある者を以てし、汝に釐へて配耦と爲さしめ、又賢智の子孫を生し、世々天下の主と爲さしめんとなり。

鳧 鷺

鳧鷺在涇。公尸來燕。來寧。爾酒既清。爾殺既馨。公尸燕飲。福祿來成。○
鳧鷺在沙。公尸來燕。來宜。爾酒既多。爾殺既嘉。公尸燕飲。福祿來爲。○
鳧鷺在渚。公尸來燕。來處。爾酒既滑。爾殺伊脯。公尸燕飲。福祿來下。○
鳧鷺在深。公尸來燕。來宗。既燕于宗。福祿攸降。公尸燕飲。福祿來崇。○
鳧鷺在臚。公尸來止。熏熏。旨酒欣欣。燔炙芬芬。公尸燕飲。無有後艱。

此の詩、古序に守成也とあり、成王能く盈つるを持ち、成るを守り、誠心を以て神祇祖考を祭る、故に神祇祖考、冥々の中に安んじ楽しむなり。

鳧鷺在涇。公尸來燕。來寧。爾酒既清。爾殺既馨。公尸燕飲。福祿來成。

鳧はまがも、鷺はかもめ、共に水鳥なり、涇は大水の中流、徑直の波ある處、爾は成王

を指す、言ふこゝろは成王の時、天下太平にして、萬物の生すること多く、各其の所得ざるものなく、鳧鷺の鳥も、從容として大水の中流に遊べり、古へ祭るとき必ず尸あり、尸は神に代るものなり、宗廟の祭り已に畢れば、明日禮を設けて、尸たりし者を迎へ、之れに飲ましむるなり、成王祭りの翌日、釋祭を爲し、然る後尸を賣として宴を設くるに、公尸の來り燕する、其の心至りて安寧なり、是れ王の誠心を以て之れを敬すればなり、而して王の之れを燕する、其の酒既に潔く、其の殺既に馨し、乃ち之れを用ゐて公尸を燕す、公尸樂みて之れを飲食すれば、則ち神の悦ぶ所と爲りて、福祿王の身に來り成らんとなり。

鳧鷺在沙。公尸來燕。來宜。爾酒既多。爾殺既嘉。公尸燕飲。福祿來爲。

沙は水の旁なり、宜とは自ら其の來るを以て宜しと爲し、臣たるの故を以て之れを嫌はざるなり、爲は福祿來りて厚く王の爲めにするを謂ふ、詩の意首章に同じ
鳧鷺在渚。公尸來燕。來處。爾酒既滑。爾殺伊脯。公尸燕飲。福祿來下。

渚は水中の高地なり、處は止なり、涇は濁りたる酒を茅にて漉し、糟を去りたるを謂ふ、脯は肉を切りて乾したるを謂ふ、詩の意首章に同じ。

鳧鷖在深。公尸來燕來宗。既燕子宗。福祿攸降。公尸燕飲。福祿來崇。

深は水の流れ合ふ處、小水の大水に入るを謂ふ、宗は尊なり、公尸來りて主人を尊ぶなり、燕、于宗の宗は宗廟なり、崇は重なり、詩の意、首章に同じ。

鳧鷖在。公尸來止熏熏。旨酒欣欣。燔炙芬芬。公尸燕飲。無有後艱。

鳧は山にて水を絶つなり、山横に水中に跨りて、水其の間を流るゝなり、熏々は和悦の貌、欣々は樂むなり、燔は肉のやきもの、炙は肉のあぶりものなり、芬々は香ばしきなり、無有、後艱とは、後日の艱難あることなしとの意にして、故らに福を望まざるを謂ふなり、詩の意、首章に同じ。

按ずるに六經の中、詩を講ずる最も難し、何んとなれば書なり、禮なり、易なり、春秋なり、一言一字、必ず微意あり、是を以て講ずる者理ありて、聽く者厭はず、惟詩は物に託して譬を取り、辭を互にして章を成す、四五章にして一意を出でざるものあり、譬を重ねて一物を離れざるものあり、若し章々句々にして異説を爲すときは、則ち譬に失して、詩人歌詠の意に非ず、若し直にして之れを解すれば、又説なきに近くして、詩人の工妙を發明するに足らず、今此の詩を以て之れを論ずるに、五章

毛

詩

毛

詩

の中、皆鳧鷖を説と爲し、公尸を以て義と爲し、福祿を以て美と爲す、一の鳧鷖にして、一は則ち涇に在りと云ひ、二は則ち沙に在りと云ひ、三は則ち渚に在りと云ひ、四は則ち深に在りと云ひ、五は則ち壘に在りと云ふ、一の公尸にして、一は則ち來寧と云ひ、二は則ち來宜と云ひ、三は則ち來處と云ひ、四は則ち來宗と云ひ、五は則ち來止熏々と云ふ、一の福祿にして、一は則ち來成と云ひ、二は則ち來爲と云ひ、三は則ち來下と云ひ、四は則ち來崇と云ひ、五は則ち無有後艱と云ふ、學者章に隨ひ、求めて異説を爲すものあり、心を用ゐること勤めたりと雖も、詩人の意と愈遠ければ、則ち亦未だ曲説たるを免れず、惟ふに詩人、成王の能く盈つるを持ち、成るを守り、神祇祖考を祭りて、神祇祖考の安樂するを見る、故に鳧鷖の水に安んじて其の所を得るを樂むに比し、成王孝心を以て天地宗廟を祭祀すれば、神明心を以て感ずるに况へ、神の安んじ、樂むことを知るべしと爲すなり、而して神の格る度る可らず、或は天に在り、或は廟に至り、或は上下に在り、或は左右に在り、此れ知るを得可らず、是を以て廣く之れを涇に在り、沙に在り、渚に在り、深に在り、壘に在るに託して、以て况へと爲し、神の至らざる所なきを見はすなり、祭りには必ず尸を立

つ、禮なり、尸既に安んじ樂みて、而して後神以て燕饗して、之れに福を降すことを得、故に來燕來宜來處來宗來止と曰ひ、皆公尸燕飲の樂みを形容するに非ざるなし、成王の盈つるを持ち、成るを守るを以て、神の安んじ樂むことを知るべく、公尸の燕饗を以て、神の福を降すことを知るべし、故に來成來爲來下來崇と曰ひ、神の福を吾が君に降すの厚きことを形容するに非ざるなし、是れ皆成王盈つるを持ち、成るを守るの致す所なり、夫の神祇祖考の安樂して福を降す所以、皆成王の心よりするものと爲せば、則ち詩人何ぞ盛んに其の酒殺の豐潔を述ぶるに暇あらんや、而して詩人必ず其の酒の清く、殺の香ばしく、酒の多く、殺の嘉く、酒の濁あり、殺の脯あり、旨酒の欣々として、燔炙の芬々たるを稱するものは、蓋し物以て誠を盡すに足らずして、而して誠實物に寓す、黍稷饗はしきに非ずして、黍稷に非ざれば、亦以て祭りを爲すこと能はず、詩人亦安んぞ之れを略することを得んや、詳かに此の詩を觀るに、初めより盈つるを持ち、成るを守るの說なし、而して序を作る者、守成の語を以て之れを發明す、其の意蓋し曰ふ、成王豈區々の物を以て神祇を享するに足ると爲さんや、而して神祇祖考、豈徒らに區々の物を享するを以て、遂

に之に福祿を降さんや、夫の神祇祖考安樂する所以の意を求めて、夫の成王福祿を致す所以の由を推せば、未だ盈つるを持ち、成るを守るに自りて、之れを得ざるあらず、神祇祖考の安樂は、奉祀の日に在らずして、平時固に已に之れを安樂す、福祿の來るは、神を享するの後に在らずして、平時固に已に之れを得るなり、詩人其の一時享祭の盛んなるを述べ、序を作る者、其の平日成るを守るの心を推す、詩に深き者に非ざれば、之れを能くせんや、學者皆紙上の語を守りて、詩人言意の外に得ること能はず、此に於て益、序を作る者の詩に深きことを嘆ずるなり、

假樂

假樂君子。顯顯令德。宜民宜人。受祿于天。保右命之。自天申之。○于祿百福。子孫千億。穆穆皇皇。宜君宜王。不愆不忘。率由舊章。○威儀抑抑。德音秩秩。無怨無惡。卒由群匹。受福無疆。四方之綱。○之綱之紀。燕及朋友。百群卿士。媚于天子。不解于位。民之攸暨。

此の詩、古序に嘉成王也とあり、成王の徳、嘉みすべきありて、詩人之れを嘉美するなり、

假樂君子。顯顯令德。宜民宜人。受祿于天。保右命之。自天申之。

假は嘉なり、君子は成王を指す、顯は光なり、申は重なり、言ふところは、上天嘉美して君子成王を愛樂す、其の故は成王光々然として明察の善徳あり、能く庶民を安んじ、能く人を知りて之れを官す、是れを以て天より福祿を受けたり、而して王の能く人を官するものは、群臣の保んじ右けて人を擧ぐるに由り、成王亦天意を用ゐ、重ねて之れを勅す、此れ官の其の宜しきを得る所以なりと。

千祿百福。子孫千億。穆穆皇皇。宜君宜王。不愆不忘。率由舊章。

千は求なり、億は十萬なり、穆々々天子の形容、皇々々諸侯の形容なり、愆は過なり、率は循なり、言ふところは、成王能く光々の善徳を行ひ、宜しく民を安んじ、人を官にし、以て天の祿を求むれば、則ち百種の福を得、其の子孫も亦善徳を勤め行ひ、以て天の祿を求むれば、則ち千億を得たり、故に穆々皇々として、宜しく諸侯の君たるべく、宜しく天子の王たるべく、常に人君と爲りて、其の邦國を保つべし、而して成王天の徳を蒙り、澤子孫に及ぶものは、其の周公の舊法に率ひ用ゐて、愆ることなく、怠り忘るゝことなきが故なりと。

毛 詩

威儀抑抑。德音秩秩。無怨無惡。率由群匹。受福無疆。四方之綱。

抑々は美なり、秩々は常あるなり、言ふところは成王の朝廷に立つ、其の威儀抑々然として美なり、其の德音秩々然として常あり、此れを以ての故に、天下の人、之れを愛し、之れを樂みて、之れを咎め、之れを惡む者なく、又能く群臣の己れの志に匹耦する者の謀慮に率ひて、之れを用ふ、故に天より福を受くること疆りなく、天下四方の大綱となりて、民を總ぶるとなり。

之綱之紀。燕及朋友。百辟卿士。媚于天子。不解于位。民之攸暨。

朋友は群臣なり、百辟は畿内の諸侯なり、卿士は卿にして事を執る者なり、暨は休息なり、言ふところは成王天下の綱紀と爲り、法度を立て、天下を治むるに、其の燕飲すること、宗族と與にするのみに非ず、群臣にまで及ぶ、成王の恩惠、此くの如くなるが故に、群臣も亦其の君を愛じ、諸侯卿士、各其の職位に懈らず、萬民をして休息せしむるは、實に是れに由るなりと。

公 劉

篤公劉。匪居匪康。迺場迺疆。迺積迺倉。迺裹餼糧。于橐于囊。思輯用光。

毛 詩

弓矢斯張。干戈戚揚。爰方啓行。○篤公劉。于胥斯原。既庶既繁。既順既
 宣。而無永嘆。陟則在嶽。復降在原。何以舟之。維玉及瑤。鞞琫容刀。○篤
 公劉。逝彼百泉。瞻彼溇原。迺陟南岡。乃覲于京。京師之野。于時處處。于
 時廬旅。于時言言。于時語語。○篤公劉。于京斯依。踰濟濟。俾筵俾几。
 既登乃依。乃造其曹。執豕于牢。酌之用匏。食之飲之。君之宗之。○篤公
 劉。既溥既長。既景迺岡。相其陰陽。觀其流泉。其軍三單。度其隰原。徹田
 爲糧。度其夕陽。幽居允荒。○篤公劉。于幽斯館。涉渭爲亂。取厲取鍛。止
 基廼理。爰衆爰有。夾其皇澗。迺其過澗。止旅乃密。芮鞠之即。

此の詩古序に召康公戒成王也とあり、公劉は后稷の曾孫なり、后稷部に封せらる、
 夏の衰ふるに及び、逐ひ黜けられて幽に遷りたる人なり、成王幼少なるを以て、七
 年の間、周公王に代りて政を攝せられしが、周公政を王に還し、王親ら政事を行は
 るゝに洩み、召公王の尙幼にして、心を民事に留められざらんことを恐れ、此の詩
 を作り、古昔公劉の民事に厚きことを美して、成王に獻じ、戒めを寓せしなり、

篤公劉。匪居匪康。迺場迺疆。迺積迺倉。迺裏餼糧。于橐于囊。思輯用光。

弓矢斯張。干戈戚揚。爰方啓行。

場は田の小界、疆は田の大界なり、共に畔と曰ふ、積はあらはして積みたるなり、倉
 は米廩なり、餼はほしいひ、糧はかての米なり、橐は小なる袋、囊は大なる袋なり、輯
 は和なり、光は顯なり、戚は斧なり、揚は鉞なり、斧は小にして、鉞は大なり、此の章、公
 劉幽に遷るの始を言ふ、言ふことゝるは、民事に篤きかな、夫の公劉の君たるや、乃ち、
 能く居る所を以て居とするに非ず、安んずる所を以て安しとするに非ず、己れの
 安居を顧みず、唯民を利することを以て意と爲す、其の部國に在るや、乃ち畛場あ
 り、疆界ありて、其の田疇の業あり、乃ち積む所の穀あり、乃ち倉廩に貯ふる所の米
 あり、田あり、食あり、安居すべしと雖も、今追ひ黜けらるゝに當り、其の民人を闘は
 しむるに忍びざるの故を以て、遂に此の疆場積倉を棄て、乃ち此の餼糧を囊橐の
 中に裏み、其餘を委て去る、公劉が此の事を爲す所以のものは、民人をして相
 與に輯睦せしめ、己れの徳を光顯にせんことを思ひ、戰鬪して之れを殺傷するこ
 とを欲せざるなり、故に民の爲めにして物を惜まず、其の部國を發するの時、弓矢
 を張り、又其の干戈戚揚の兵器を乗り、其の軍旅を整へて出で、士卒に告げて曰は

く、我れ汝が爲めに方に道路を開きて、其の民を行る、乃ち徙りて幽に至れど、是れ其の民を愛するの厚きこと見るべし、王今當に此の公劉の民に厚きことを思ひ、意を留めて民を治むべきなりと、

篤公劉。于胥斯原。既庶既繁。既順迺宣。而無永嘆。陟則在嶺。復降在原。何以舟之。維玉及瑤。鞞琫容刀。

胥は相なり、宣は徧なり、嶺は小山の大山に別なるものなり、舟は帶ぶるなり、瑤は玉の別名、鞞は刀の鞘、琫は鞘の口の飾りなり、言ふことゝろは、公劉既に幽國に至り、先づ此の平原の地を相して、其の民を居らしむ、民既に多くして、既に其の事に順ふ、乃ち又之れをして徧く其の田を耕さしむ、是に於て民皆其の業を樂み、今の居に安んじ、悔恨して永嘆し、其の舊時を思ふ者なし、又原を相するの事を説きて曰はく、公劉の地を相する、升りては、則ち嶺山の上に在りて、其の形勢を觀、復下りては原に在りて、其の處所を察し、心を用ゐて民を重んずること、此くの如し、此の故に亦民の爲めに愛せらる、其の時の民皆曰はく、我れ今何物ありて公劉に帶ばしむべき、維れ美玉と瑤とあり、又鞞琫容飾の刀あり、以て之れが佩びものと爲さしむべきのみと、公劉の民に厚き、其の民の爲めにする所以の心、至らざる所なし、故に能く家國を保全し、澤子孫に及ぶ、王豈之れを念ひて、意を治民に留めざることを得んや、

篤公劉。逝彼百泉。瞻彼溥原。迺陟南岡。乃覲于京。京師之野。于時處處。于時廬旅。于時言言。于時語語。

溥は大なり、覲は見なり、廬は寄なり、直言を言と曰ひ、論難を語と曰ふ、言ふことゝろは、篤きかな公劉の君たるや、彼の百泉の間、即ち谷あひの卑き所等に往きて、廣原を望み、居るべきの處を見、乃ち又彼の南山の岡に陟りて、其の居て都邑と爲すべきものを京の地に見る、此の京の地は、乃ち是れ大衆宜しく居るべき所の野なり、是に於て其の當に處るべき所の者を處き、是に於て又館舍を作りて、四方の賓客を合し、既に都邑を立て、乃ち號令を施し、政事を議せしなり、公劉の心を用ふること、此くの如し、王亦當に意を治民に留むべきなりと、

篤公劉。于京斯依。踰踰濟濟。俾筵俾几。既登乃依。乃造其曹。執豕于牢。酌之用匏。食之飲之。君之宗之。

毛

詩

毛

詩

陰々濟々は士大夫の威儀なり、曹は牛羊豕の群類を分ちて置く處の牧なり、匏はひさごなり、言ふこゝろは、篤きかな公劉の君たるや、既に邑を京に作りて、宮室を築き、宮室既に成れば、則ち群臣を集めて之れを饗す、其の威儀陰々の士及び濟々の大夫將に君の所に來らんとす、公劉乃ち之れが爲めに、筵を設け、几を設けしむ、賓來りて、席に登り、几に依る、公劉乃ち人をして牛羊豕の群牧に適き、豕を牢より執らへ、酒を飲むの禮と爲さしむ、而して其の酒を飲むに、匏を用ゐて之を酌む、匏を用ふるは、其の新たに國を爲し、節儉にして質素を尙ふなり、公劉の群臣に於ける饌を設けて之れに食はしめ、酒を設けて之れに飲ましめ、己れが身之れと君と爲り、之れと太宗と爲る、公劉の群臣に厚きこと此くの如し、成王の之れに效はんことを欲するなり。

篤公劉。既溥既長。既景廻岡。相其陰陽。觀其流泉。其軍三單。度其隰原。徹田爲糧。度其夕陽。豳居允荒。

景は日景を度りて其の經界を定むるなり、三單は三軍なり、單は一なり、兵役に服する者、家ごとに一人に過ぐるなきを謂ふ、傳に相襲也と言ふは、相代ると言ふが

如し、三軍の中、更代の法あるなり、徹は治なり、夕陽は山西なり、荒は大なり、言ふこゝろは、篤きかな公劉の君たるや、初め豳に至る、既に其の土地の東西を廣くし、既に其の境界の南北を長くし、既に日影を度りて、其の經界を定め、乃ち復彼の高き岡に登りて、其の陰陽寒暖の宜しき所を視、流水の便り、浸潤の及ぶ所を考へ、天氣の穀物に宜しきを知り、地利の物を生ずるに足るを見、然る後民を譬て之れに居らしむ、又三軍を爲り、家ごとに一人を役し、未だ宅舎あらざれば、隰の卑き處、原の高き處を度り、其の豳國の田を治めて、食糧を徹し、山の西夕陽の地を得て、之れに居る、此の豳國の居、信に寛大なりと、其の民の所を得、境土の廣大なるを美し、成王のこれに倣はんことを欲するなり。

篤公劉。于豳斯館。涉渭爲亂。取厲取鍛。止基廻理。爰衆爰有。夾其皇澗。遡其過澗。止旅乃密。芮鞠之即。

館は舎なり、宮室の名なり、其の中に止舎するを以て舎と注せり、渭は水の名、流れを横ぎりて渉るを亂と曰ふ、厲は石なり、鍛も亦石なり、皇過共に澗の名なり、密は安なり、芮は水内、鞠は水外なり、言ふこゝろは、篤きかな公劉の君たるや、國邑既に

成りて、民の新たに附く者多し、乃ち幽に於て館を作り、之れを居く、人をして横に渡るの舟を作り、以て往來を通せしめ、石を取りて礪と爲し、鍛と爲し、斧斤を磨き、器用を利し、材木を伐り、宮室を作るの用に供し、既に止り居る處の基を定め、其の新たに授くる田畝を分ち、其の男女の人員を見るに、相續ぎて來る者愈多く、愈有り、其の居る所は、或は皇水の中に夾みて、兩岸に在り、又過水の upstream に向ひて居る者あり、止り居る所の人、日に密にして、水の内外に至るまで、田畝を開きて耕作に従へりと、公劉の民を愛すること、此くの如し、成王の之れに倣はんことを欲するなり、

案ずるに、貧困の説を富人の前に進め、愁嘆の説を樂者の前に進むるときは、之れを説く者、醇々として言ふと雖も、之れを聽く者、惘として聞くこと、なきが如し、是れ聽く者の孚あらざるに非ずして、説く者の術を得ざるなり、蓋し身の歷る所、人の告ぐるを待たずして、諭り、目の見る所、人の言を待たずして知る、夫の身未だ嘗て歷ざる所、目未だ嘗て見ざる所、卒然として之れを説き、我れをして強て之れに従はしめんとし、其の富有を忘れて、貧者の情を知り、其の逸樂を忘れて、愁嘆する

者の恤ふべきを知らしめんとす、此れ人情の難き所なり、然れども苟も其の道を得れば、此れ進め難からず、彼れ受け難からず、人情の難き所にして、吾れ能く欣然として以て我れに従はしむ、召公の成王を戒むる、蓋し其の道を得たり、成王文武の後太平の治を享け、幼にして政に蒞む、未だ萬幾の繁きを知らず、未だ小民の依ることを知らず、而して召公遽かに小民の事を以て之れを戒めんとせば、誠に人情の難き所なり、故に召公民事を以て成王を戒めず、公劉を以て成王に望む、一篇の中、一語の以て成王を戒むるなく、公劉の民に篤き所以を美すること、此くの如し、此れ召公、戒めを進むるの微權なり、夫の人の情、上世を論ずれば、則ち以て迂と爲し、他人を言へば、則ち以て異と爲す、惟乃祖乃父は、是れ人情の素より信ずる所なり、召公謂ふに、民事を以て成王を戒むれば、成王未だ必ず聽かず、惟公劉の民に厚きを美し、言は美するに存し、意は戒めを存す、言は公劉に在り、意は成王に在り、公劉の尊ぶべきを知れば、則ち民事の重んずべきを知り、公劉の信ずべきを知れば、則ち召公の言忘る可らざるを知る、召公成王の我が言を信ずるを必すること、能はずして、能く成王の公劉を信ずるを必す、是れ善く戒めを進むる者と謂ふべ

きなり、

澗 酌

澗酌彼行潦。挹彼注茲。可以饒饋。豈弟君子。民之父母。○澗酌彼行潦。挹彼注茲。可以濯鬢。豈弟君子。民之攸歸。○澗酌彼行潦。挹彼注茲。可以濯漑。豈弟君子。民之攸暨。

此の詩古序に召康公戒成王也とあり天道は誰れと定めて親愛するものに非ず、唯徳ある者を親愛するものなれば王の徳を修め道を行はんことを欲するなり、

澗酌彼行潦。挹彼注茲。可以饒饋。豈弟君子。民之父母。

澗は遠なり行潦は雨水の流れて道に溜りたるを謂ふ、饒は酒食を作る米を蒸すに、一たび蒸し、又水を注ぎて二たび蒸すなり、饋は其の酒食となりたるを謂ふ、言ふこゝろは、人をして遠く往きて彼の道上の流潦の水を酌み取らしめ、之れを大なる器に置きて、其の清めるを待ち、此の水を挹みて小なる器に注ぎ、以て米に沃ぎ酒食を作るべし、此れを以て祭祀すれば、則ち天之れを饗く、此の薄き物と雖も、皇天の之れを饗くるものは、豈弟の君子、能く道徳ありて、民の父母たるが故に、上

詩

毛

毛

詩

天其の誠信を愛すればなり、然らば則ち人の君たる者、安んぞ道徳を行ひて、民の父母たらざるべけんやとなり、左傳隠公三年に雅有行葦澗酌昭忠信也とあり、言ふこゝろは、行潦は薄物なれども、忠信あるが故に、神を祭るべしとなり、忠信は誠なり、蓋し神を祀るも此の誠、民の父母たるも亦此の誠なり、豈にして之れを教へ、弟にして之れを安んず、若し一段の精誠なければ、即ち豈弟も亦名のみ、安んぞ民の父母たることを得ん、故に忠信の二字、此の篇の主眼なり、

澗酌彼行潦。挹彼注茲。可以濯鬢。豈弟君子。民之攸歸。

鬢は酒を容るゝ器なり、詩の意、前の章に同じ、

澗酌彼行潦。挹彼注茲。可以濯漑。豈弟君子。民之攸暨。

濯漑は洗ひ清むるなり、暨は息吹り、詩の意、前の章に同じ、

此の詩三章、饒饋と曰ひ、濯鬢と曰ひ、濯漑と曰ふ、祭祀を指すこと明かなり、成王の祭祀に奉ずること、其の誠を盡すと雖も、其の民に於ける、恐くは未だ神に事ふるが如きの誠敬に至らず、故に康公祭祀に依りて、之れを告ぐるなり、所謂る使民如、

承大祭の意にして、民心従ひて、天心格るなり、

卷 阿

毛 詩

有卷者阿。飄風自南。豈弟君子。來游來歌。以矢其音。○伴奭爾游矣。優游爾休矣。豈弟君子。俾爾彌爾性。似先公曾矣。○爾土宇。亦孔之厚矣。豈弟君子。俾爾彌爾性。百神爾主矣。○爾受命長矣。菲祿爾康矣。豈弟君子。俾爾彌爾性。純嘏爾常矣。○有馮有翼。有孝有德。以引以翼。豈弟君子。四方爲則。○顒顒卬卬。如圭如璋。令聞令望。豈弟君子。四方爲綱。○鳳凰于飛。翾翾其羽。亦集爰止。藹藹王多吉士。維君子使。媚于天子。○鳳凰于飛。翾翾其羽。亦傳于天。藹藹王多吉人。維君子命。媚于庶人。○鳳凰鳴矣。于彼高岡。梧桐生矣。于彼朝陽。萋萋萋萋。離離喈喈。○君子之車。既庶且多。君子之馬。既閑且馳。矢詩不多。維以遂歌。

此の詩、古序に召康公戒成王也とあり、十章、皆賢者を求め、善士を用ふることを言ふなり、

有卷者阿。飄風自南。豈弟君子。來游來歌。以矢其音。

毛

詩

卷は曲るなり、飄風はつち風なり、阿は大なる岡なり、矢は陳なり、言ふこゝろは、卷りたる阿あれば、飄風旋りて南より入り來り、消散せざることなし、惡人ありと雖も、王の德に化せられ、其の惡を消すれば、則ち賢人の道長ず、是に於て豈弟の君子皆來りて、王に就きて遊ひ、王に就きて歌ひ、其の聲音を陳べ、將に以て王を樂ましめんとすと、是れ賢者朝に立ちて、告ぐるに善道を以てすることを言ふなり、

伴奭爾游矣。優游爾休矣。豈弟君子。俾爾彌爾性。似先公曾矣。

伴奭は廣大にして文章あるなり、規模制度の大に備はるを謂ふ、彌は終なり、似は嗣なり、曾は終なり、言ふこゝろは、王若し能く周道を用ゐ、其の德廣大にして文章あらば、天下太平にして、爾ち王遊ひ娛むことを得べし、從容として休息することを得べし、王又豈弟の君子を用ゐて、輔佐と爲さば、爾をして爾の性命を終へ、困み病むの憂なく、其の先君の功を嗣ぐことを得べきなりと、是れ賢人を得れば、則ち以て己れの性命を保全すべく、又終に先君の功を成すべきが故に、王の賢人を求めざる可らざることを戒むるなり、

爾土宇。亦孔之厚矣。豈弟君子。俾爾彌爾性。百神爾主矣。

販は大なり、章は著なり、言ふこゝろは、成王文武の後を承け、其の土宇大にして且著る、天下の民皆其の徳を蒙り、王者の恩を受く、王の恩惠又甚厚しと言ふべし、能く豈弟の君子を求め、之れを用ゐて、其の徳性を成さば、百神皆爾を以て主と爲さんと、其の王を親愛して之れを祐くるを言ふなり。

爾受命長矣。弗祿爾康矣。豈弟君子。俾爾彌爾性。純嘏爾常矣。

弗は小なり、嘏は大なり、福の大なるは壽に過ぐるものなし、故に壽を大福と爲し、其の他の福祿を弗祿と曰ふなり、言ふこゝろは、周の命を受くること長し、徒に大なる福の王を助くるのみならず、其の細小の福祿も、亦爾の身に於て、之れを安んぜん、能く豈弟の君子を得て、之れを用ゐば、其の徳性を成して、常に大徳を保つべしとなり。

有馮有翼。有孝有德。以引以翼。豈弟君子。四方爲則。

有馮有翼とは、依りて輔翼と爲す可きを謂ふ、引は長なり、翼は敬なり、言ふこゝろは、賢人の善行ありて馮り頼むべき者あり、藝能ありて輔翼と爲すべき者あり、至孝にして人を感化すべき者あり、大徳ありて人の教訓と爲すべき者あり、王當に

長く之れを尊び、恒に之れを敬ひ、此の四等豈弟の君子を得て、位に在らしめば、則ち以て四方の法則たるべきなり、故に此の賢者を求めざる可らずとなり。

顒顒卬卬。如圭如璋。令聞令望。豈弟君子。四方爲綱。

顒々は温和の貌、卬々は志氣の盛んなる貌なり、如圭如璋とは、相切瑳するの意なり、言ふこゝろは、王能く賢人を得、禮義を以て之れと相切瑳すれば、則ち王の體貌をして、顒々然と温和ならしめ、其の志氣をして、卬々然と充満せしめ、玉の器を成す、圭の如く、璋の如く、善き譽れありて、人の聞き知る所と爲り、善き威儀ありて、人の觀望する所と爲り、此の君子、實に王に益あるのみならず、四方の綱として、之れを頼みとするならん、王宜く此の賢人を求むべきなりと。

鳳凰于飛。翯翯其羽。亦集爰止。藹藹王多吉士。維君子使。媚于天子。

鳳凰は靈鳥なり、雄を鳳と曰ひ、雌を凰と曰ふ、翯々は衆多なり、藹々は臣の力を盡すを謂ふ、媚は愛なり、鳳凰の鳥、太平の世に非ざれば出でず、成王の時、鳳凰の瑞あり、召公以て賢者を用ふもの致す所と爲す、故に之れを陳べて、成王を戒む、言ふこゝろは、鳳凰の往き飛ぶときは、衆多の鳥ありて、亦其の止るべき所に集る、今此の

瑞を致す所以は、萬々然として、王朝の上、善士多きを以てなり、此の善士等は、維れ君子大賢の命じ使ひ、率いて之れを化し、天子を親愛して、職を奉じ、力を盡さしむる所なりと。

毛

鳳凰于飛。翾翾其羽。亦傳于天。藹々王多吉人。維君子命。媚于庶人。

傳は辰なり、詩の意、前の章に同じ、前に媚于天子、此の章媚于庶人と云ふものは、君を愛するは、民を愛する所以なり、庶人を媚むは、天子を媚む所以なり、民の爲めにするは、君の爲めにする所以なり、君を媚むことを知りて、民を媚むことを知らざるは、君を愛するの賊に非ざればなり。

鳳凰鳴矣。于彼高岡。梧桐生矣。于彼朝陽。萋萋翼翼。雝雝喈喈。

山東を朝陽と曰ふ、言ふこゝろは、鳳凰彼の高岡の上に鳴けば、梧桐は彼の朝陽の地に生ず、梧桐の生ずるは、則ち萋々翼翼として茂り盛んなり、鳳凰の鳴くは、則ち雝々喈々として和協せりと、鳳凰を以て賢者に比し、梧桐を以て明君に比し、賢者の將に仕へんとする、必ず明君の出づるを待ち、仁聖の治世に於て、往きて之れに仕ふ、君徳盛んにして、臣民皆和協するに比するなり。

詩

君子之車。既庶且多。君子之馬。既閑且馳。矢詩不多。維以遂歌。

不は助辭なり、言ふこゝろは、王實に能く吉士を用ひ、已に太平を致す、王賢者に賜ふに車馬を以てす、其の車既に多く、其の馬既に威儀に習ひ、又能く馳す、乃ち此の賢人吉士をして、詩を獻じ志を陳べしめ、遂に樂人の歌ふ所と爲し、永く鑒戒と爲さしむとなり、此の章、矢詩、首章の矢音と同意にして、首尾相應ず、不多は多なり、賢人多くして、戒めを陳ぶること亦多きなり。

毛

民勞

民亦勞止。汙可小康。惠此中國。以綏四方。無縱詭隨。以謹無良。式遏寇虐。憯不畏明。柔遠能邇。以定我王。○民亦勞止。汙可小休。惠此中國。以爲民逖。無縱詭隨。以謹惛恠。式遏寇虐。無俾民憂。無棄爾勞。以爲王休。○民亦勞止。汙可小息。惠此京師。以綏四國。無縱詭隨。以謹罔極。式遏寇虐。無俾作慝。敬慎威儀。以近有德。○民亦勞止。汙可小愒。惠此中國。俾民憂泄。無縱詭隨。以謹醜厲。式遏寇虐。無俾正敗。戎雖小子。而式弘大。○民亦勞止。汙可小安。惠此中國。國無有殘。無縱詭隨。以謹繡繡。式

詩

遏寇虐。無俾正反。王欲玉女。是用大諫。

此の詩、古序に召穆公刺厲王也とあり、召穆公は召康公十六世の孫、厲王は成王七世の孫なり、但成王孝王を加へず、當時の民、厲王の虐政に苦めるを以て、之れを刺りしなり。

民亦勞止。汙可小康。惠此中國。以綏四方。無縱詭隨。以謹無良。式遏寇虐。憯不畏明。柔遠能邇。以定我王。

汙は危なり、康綏皆安なり、惠は愛なり、詭隨とは、人の善に拂りて、妄りに人の惡に隨ふなり、憯は曾なり、柔は安なり、召穆公厲王を諫めて曰はく、今周の民亦皆疲勞せり、而して又危く亡ぶるに近ければ、王少しく賦役を省きて、之れを安んずべし、此の中國即ち京師の人を愛し、惠みて、廣く四方諸夏の國を綏んぜよ、人の善に拂り、人の惡に隨ふ者を縱すことなくして、罪ある者を察し、之れを糺すべし、而して善を爲すことなき人を正し、愼ましめ、亦此の法を用ゐて、彼の寇虐の行ひを爲し、明白の刑罰を畏れざる者を止むべしと、時に此くの如き人あれば、王の刑罰を用ゐて之れを禁止し、民をして勞すること勿らしめんを欲するなり、又王の先づ京

毛

詩

師を愛して、四方に及ばんことを欲するものは、王の政に於ける、遠方の國を安んぜんと欲せば、先づ近き者を順はしめ、此れを以て我が周王の功を定むべきが故なり。

民亦勞止。汙可小休。惠此中國。以爲民逯。無縱詭隨。以謹憯慝。式遏寇虐。無俾民憂。無棄爾勞。以爲王休。

休は定なり、逯は合なり、憯慝は巧言利口を嘘しくして、君の聽を惑はす者なり、言ふことゝろは、今民疲勞して、又危く死亡に近し、王宜しく小しく之れを安んじ定むべし、當に此の京師の民を愛し、諸夏の民をして、聚り合ふことを得せしむべし、王若し善政を施さば、常に罪ある者を察し、此の詭隨の者を縱すことなく、憯慝する者を愼ましめ、又寇虐を爲す者を遏め、民をして此の憂に遭はしむることなかるべし、王始め功勞あり、今之れを棄つることなくして、王政の美を爲すべしとなり、民亦勞止。汙可小息。惠此京師。以綏四國。無縱詭隨。以謹罔極。式遏寇虐。無俾作慝。敬慎威儀。以近有德。

罔極は中正ならざるなり、慝は惡なり、詩の意、前章に同じく、末の二句は、我が威儀

毛

詩

を敬慎して、徳ある人に近づき親しむべしと云ふなり。

民亦勞止。汙可小憫。惠此中國。俾民憂泄。無縱詭隨。以謹醜厲。式遏寇
虐。無俾正敗。戎雖小子。而式弘大。

愒は息なり。泄は去なり。醜は衆なり。厲は危なり。危殆の行ひを爲す者を謂ふ。無俾
正敗とは先王の正道をして敗れしむる勿れとの義なり。戎は汝なり。末の二句言
ふこゝろは、王の大位に在る者、小子と雖も、事を用ふる甚だ大なれば、慎まざる可
らざるを言ふ、其の他前の章に同む。

民亦勞止。汙可小安。惠此中國。國無有殘。無縱詭隨。以謹繾綣。式遏寇
虐。無俾正反。王欲玉女。是用大諫。

殘は賊なり。害の深きを謂ふ。繾綣は猶反側のごとし。善惡の辭に非ず。善に施せば
善となり。惡に施せば惡となるを謂ふ。末の二句言ふこゝろは、我れ女をして玉の
如くならしめんと欲す。故に是の詩を作り、用ゐて大に女を諫め正すととなり。此れ
召穆公至忠の言なり。

板

上帝板板。下民卒瘁。出話不然。爲猶不遠。靡聖管管。不實於亶。猶之未
遠。是用大諫。○天之方難。無然憲憲。天之方蹶。無然泄泄。辭之輯矣。民
之洽矣。辭之懌矣。民之莫矣。○我雖異事。及爾同僚。我即爾謀。聽我
囂囂。我言維服。勿以爲笑。先民有言。詢于芻蕘。○天之方虐。無然謔謔。老
夫灌灌。小子躑躑。匪我言耄。爾用憂譖。多將熇熇。不可救藥。○天之方
憊。無爲夸毗。威儀卒迷。善人載尸。民之方殿。屎則莫我敢葵。喪亂蔑資。
曾莫惠我師。○天之厲民。如殫如筮。如璋如圭。如取如攜。攜無曰益。牖
民孔易。民之多辟。無自立辟。○价人維藩。大師維垣。大邦維屏。大宗維
翰。懷德維寧。宗子維城。無俾城壞。無獨斯畏。○敬天之怒。無敢戲豫。敬
天之渝。無敢馳驅。昊天曰明。及爾出王。昊天曰旦。及爾游衍。

此の詩古序に凡伯刺厲王也とあり。凡伯は周公の後胤にして、王朝の卿士と爲り
し人なり。

上帝板板。下民卒瘁。出話不然。爲猶不遠。靡聖管管。不實於亶。猶之未
遠。是用大諫。

板々は反なり、瘡は病なり、話は善言なり、猶は道なり、管々は依り繋る所なき意なり、豈は誠なり、猶は圖なり、言ふことろは、此の上帝の王者、其の政教を爲すこと、反して又反し、已に先王に反し、又天道に反す、此の故に天下の民、其の悪政を被むりて、盡く皆困み病めり、假令ひ善言を出だすも、背て是として之を行はず、此くの如くなれば、則ち王の爲す所の道、永遠なると能はず、唯淺近にのみ趨り、禍の將に至らんとするを知らざるなり、又王の爲す所、聖人の法を重んずることなく、管々然心を以て自ら恣まゝにし、依り繋る所なく、誠信の言を實とし用るず、既に聖人の法に依らず、又誠信の言を用るず、此れを以て事を圖るときは、遠きに至ること能はず、王の將に禍難あらんとするを恐れ、是を以て大に諫むるなりと、

天の方難。無然憲憲。天の方蹶。無然泄泄。辭之輯矣。民之洽矣。辭之懌矣。民之莫矣。

憲々は欣々と云ふが如し、蹶は動なり、泄々は競ひ進むの意、輯は和なり、洽は合なり、懌は説なり、莫は定なり、言ふことろは、天方に災を降せり、王之れを懼れざる可らず、然るに暴虐の政を行ひ、以て庶民を困ましむ、之れが臣たる者、此くの如く欣

々として喜び樂むこと勿かるべし、天方に王を警め動かさんとす、然るに王何ぞ先王の道を變亂して、邪僻の政を爲さんとす、之れが臣たる者、此くの如く、管々と競ひ進みて、王を助け、法度を制作して、王の意を達せしむること勿るべし、王者の教令を出だす、其の辭氣和順なれば、別ち下民の心、相與に聚合し、其の辭氣悦ばしければ、下民の心、皆安んじ定まるなり、民の聚合すると、安定すると、教令の如何に在り、臣たる者、王の爲めに虐政を制して、下民を亂ることを得ざれとなり、

我雖異事。及爾同僚。我即爾謀。聽我囂囂。我言維服。勿以爲笑。先民有言。詢于芻蕘。

僚は官なり、囂々は聽かざる貌なり、服は事なり、芻蕘は薪を采る者なり、此の章、大臣を責むるなり、言ふことろは、我れ汝と其の職事を異にすと雖も、汝と官を同じくし、與に卿士たれば、互に其の言を用ふべきなり、然るに我れ今汝に就きて謀り、告ぐるに善道を以てすと雖も、汝我が言を聽き、囂々として受け用ゐざるは何ぞや、我が言ふ所は、當今の急事なれば、非と爲して之れを笑ふこと勿れ、古の賢者の詞にも、芻蕘の賤しき者にも詢ひ謀れと云へることあり、况や我れと爾と同僚な

れば、其の言を棄つべからざるなりと。

天_二之方虐_一。無_レ然_レ諛_レ諛_レ。老夫_レ灌_レ灌_レ。小子_レ蹻_レ蹻_レ。匪_レ我_レ言_レ耄_レ。爾_レ用_レ憂_レ諛_レ。多_レ將_レ熇_レ熇_レ。不可_レ救_レ藥_一。

諛諛は喜樂の貌、灌々は猶欸々のごとし、至誠を以て之れに告ぐるなり、蹻々は驕りたかぶる貌なり、八十を耄と曰ふ、多は祇なり、將は行なり、熇々は火の熾んなるなり、此の章、亦大臣を責むるなり、言ふこゝろは、天の方に虐して國家を滅さんとする、王何ぞ酷虐の政を爲し、將に民を害せんとするや、汝等大臣諛々ど其の爲る所を喜びて、王の惡政を助くること勿れ、我が老夫汝を教へ諫むる、灌々として情至り意盡く、然るに汝小子、反りて驕々として自ら驕り、我が言を聽き用ゐず、豈我れを以て老いたりと爲すか、我れ老耄して失誤するあるに非ず、乃ち爾に愛ふべきの事を告ぐれども、汝反りて戯れと爲して、我れを慢る、汝既に我が言を用ゐず、王を助けて惡を爲し、熇々として火の熾んなるが如く、救ひ止めて之れを藥治す可らずとなり

天_二之方憐_一。無_レ爲_レ夸_レ毗_レ。威_レ儀_レ卒_レ迷_レ。善_レ人_レ載_レ尸_レ。民_二之方殿_一屎_レ。則_レ莫_レ我_レ敢_レ葵_レ。喪

亂_レ蔑_レ資_レ。曾_レ莫_レ惠_レ我_レ師_一。

憐は怒なり、夸毗とは己れを屈し、身を卑くし、人に得られんことを求むる者を謂ふ、殿屎は呻吟、即ち愁ひ苦むの聲なり、蔑は無なり、資は財なり、此の章、群臣を責むるなり、言ふこゝろは、天方に震怒せり、王何ぞ自立なること能はざる、汝臣等、此の夸毗足恭を爲し、却て君の爲す所に従ふと勿れ、君既に惡を爲し、臣又之れに従ふときは、則ち上下の威儀盡く迷亂し、善人は尸の如くにして、一語を發すると能はず、故に天下の民、今方に愁ひ苦みて呻吟すれども、汝君臣忽然として忘れたるが如く、我が民を察して、其の情を揆り知る者なし、此の民、又虐政の喪禍に遭ひ、稅欸の重きが爲めに、室家空虚にして、貨財なければども、汝等君臣、曾て我が衆人に惠み施さんとする者なしと、人民貧困の甚しきに至るも、恩恤なきを以て、之れを刺るなり、

天_二之臚_一民_レ。如_レ攄_レ如_レ箎_レ。如_レ璋_レ如_レ圭_レ。如_レ取_レ如_レ攜_レ。攜_レ無_レ日_レ益_レ。臚_レ民_レ孔_レ易_レ。民_二之多_一辟_レ。無_レ自_レ立_レ辟_一。

臚は道なり、攄箎は樂器なり、其の聲の相和するを以て、民の君命に應ずるに喩ふ、

毛

璋は半圭なり、璋を合すれば圭と爲るを以て、民の君心に合するに喩ふ、辟は法なり、上章皆政の悪しくして、民困むを言ふ、此の章、之れに反して、善ならしむべきを言ふ、言ふこゝろは、天の理に順ひて民を導くや、璫の如く、民の君命に應ずる、璫の相和するが如し、天の理に順ひて民を導くや、璋の如く、圭の如し、民の君心に同くすること、圭璋の相合ふが如し、又往きて物を取るが如く、手に物を携ふるが如く、必ず君の化に随ふなり、民の己れに随ふこと、手の物を携ふるが如く、なれば、王携ふるも益なしと曰ふこと勿れ、王者の民を導くこと甚だ易し、上善政を爲せば、民必ず善を爲す、是れ甚だ易し、汝當に善を行ひて之れを化すべし、今民の行ふ所、皆邪僻の事、多し、是れ汝君臣の過ちなり、汝自ら立つる所を以て法と爲すことなく、更に行ひを改めて、民を化し、此の悪政を行ふ可らざるなりと、

价人維藩。大師維垣。大邦維屏。大宗維翰。懷德維寧。宗子維城。無俾城壞。無獨斯畏。

价は善なり、藩は屏なり、大宗は王者を指す、翰は幹なり、懷は和なり、此の章、法を立つるの事を言ふ、言ふこゝろは、王當に善人を用ゐて、官を授け、君の藩鄣となし、又

毛

三公の大師を用ゐて、君の垣墉と爲し、又大邦の諸侯を用ゐて、屏蔽と爲し、王は天下の大宗と爲り、政事を施して、之れが楨幹たるべし、又汝の徳を和けて、酷虐の政を行ふことなく、汝の門を安んずべし、但汝の國を安んずるのみならず、亦汝の宗子を以て城と爲し、以て身を蔽ふべく、又子を蔽ふことを得べし、王必ず常に此の徳を行ひ、宗子の城をして壞れしむること勿れ、又藩屏の人を疏遠にして、獨り居て畏るゝこと勿れとなり、

敬天之怒。無敢戲豫。敬天之渝。無敢馳驅。昊天曰明。及爾出王。昊天曰旦。及爾游衍。

戲豫は戯れて樂み遊ぶなり、馳驅は車を馳するが如く、恣まゝなるなり、王は往なり、且は明なり、游は行なり、衍は溢なり、上章徳を和げ國を安んずべきことを言ひ、此の章、當に上天を畏敬すべきことを言ふ、言ふこゝろは、天の怒りを敬み畏れて、自ら戒め、敢て怠慢して戲豫すること勿れ、又天の災變を敬み畏れて、馳驅自ら恣まゝにすること勿れ、昊天に在り、人皆之れを仰ぐ、皆之れを明かなりと謂ふ、常に爾と往來出入し、汝と共に游溢相従ふ、天の照監至て明かにして、人の善惡見ざ

詩

る所なし、敬まざる可らずとなり、

蕩

蕩蕩上帝。下民之辟。疾威上帝。其命多辟。天生烝民。其命匪諶。靡不有初。鮮克有終。○文王曰。咨。咨汝殷商。曾是疆禦。曾是培克。曾是在位。曾是在服。天降滔德。女興是力。○文王曰。咨。咨女殷商。而秉義類。疆禦多愆。流言以對。寇攘式內。侯作侯祝。靡届靡究。○文王曰。咨。咨女殷商。無咎于中國。歛怨以爲德。不明爾德。時無背無側。爾德不明。以無陪無卿。○文王曰。咨。咨女殷商。天不湏爾。以酒不義。從式既愆。爾止靡明。靡晦。式號式呼。俾晝作夜。○文王曰。咨。咨女殷商。如蜩如蟬。如沸如羹。小大近喪。人尙乎由行。內爨于中國。覃及鬼方。○文王曰。咨。咨女殷商。匪上帝不時。殷不用舊。雖無老成人。尙有典刑。曾是莫聽。大命以傾。○文王曰。咨。咨女殷商。人亦有言。顛沛之揭。枝葉未有害。本實先撥。殷鑒不遠。在夏后之世。

是れより以下、召晏に至るまで十一篇を蕩之什と曰ふ、此詩古序に召穆公傷周室

毛

大壞也とあり、傷むと云ふものは、其の恨む所、刺るよりも深し、厲王以前、周道未だ缺けず、厲王に至りて、人君の道なくして、其の惡政を行ひ、反て先王の政を亂り、法度を廢滅し、復綱紀文章あること莫らしむ、是れ周室の大に壞るゝなり、故に穆公是の詩を作りて之れを傷むなり、

蕩蕩上帝。下民之辟。疾威上帝。其命多辟。天生烝民。其命匪諶。靡不有初。鮮克有終。

蕩々は廣大の貌、上帝は君王に託して言ふなり、辟は君なり、疾は人を病ましむるなり、威は人を罪するなり、諶は誠なり、言ふこゝろは、蕩々として廣大なるものは上帝にして、此の下民の君たり、此の上帝、稅斂を重くし、法度を嚴にして、人を病ましめ、人を罪し、其の政教を下す、甚だ邪僻の事多し、元天の衆民を生ずるや、之れを教へ、之れを導びき、誠信を以て忠厚ならしむるに非ずや、今則ち然らずして、民の初め善道に近き者、後ち王の惡俗に化して、惡を爲す者多く、其の初心を變ぜざる者鮮しと、是れ天の民を生じ、教へを立つるの意に違へるを傷むなり、

文王曰咨。咨女殷商。曾是疆禦。曾是培克。曾是在位。曾是在服。天降滔

德。女興是力。

咨は嘆く聲なり、疆禦は力強くして衆人を禦き、惡を爲すを謂ひ、培克は自ら伐りて、人に勝たんことを求むるを謂ふ、服は政事に服するなり、天は君なり、滔は慢なり、召穆公王の惡を傷み、又直ちに王の惡を指して言はず、昔し文王紂の政の亂れしを嘆かれたることあるを以て、假りに之れが辭を爲りて、厲王を責むるなり、言ふころは、文王紂を恨み、嗟嘆して曰はく、咨汝殷商の君、汝人君たらば、當に賢者を任用すべし、然るに何そ是の疆禦の人、是の培克の人を任用し、之れをして位に在りて、職事を執り行はしむるや、又其の臣、君を助けて惡を爲すを責めて曰はく、王既に驕り慢る所の德を降して、民を病ましむるに、汝羣臣、又是の氣力を起して、之れを助け、其の惡を成して、大に壞るゝに至らしむるやと、

文王曰咨。咨女殷商。而秉義類。疆禦多懟。流言以對。寇攘式內。侯作侯祝。靡屆靡究。

義は宜なり、類は善なり、懟は狼戾なり、對は遂なり、作は祝詛なり、屆は極なり、究は窮なり、言ふころは、女殷商の君、女が政事を執るの臣は、宜しく義類ある善人を

文王曰咨。咨女殷商。女怙然于中國。斂怨以爲德。不明爾德。時無背無側。爾德不明。以無陪無卿。

怙然は咆哮の假借、咆哮は虎の聲なり、其の勢強くして、虎狼の如きに喩ふ、言ふころは、女既に賢人を用るず、徒に自ら氣健にして中國に在りと爲し、好みて怨み作すの人を聚めて、德ある者と爲し、之れを任用す、故に女の德を明かにすること能はず、是れ女の背後に良臣なく、側に賢人なきを以てなり、女の德の明かならざるは、身に陪する所の三公なく、身に貳する所の六卿なきが故なり、王何ぞ小人を聚め、之れをして事を用るしむるやとなり、

文王曰咨。咨女殷商。天不洎爾以酒。不義從式。既愆爾止。靡明靡晦。式

號式呼。傳畫作夜。

酒とは酒を飲み、顔色齊一なるを謂ふ、義は宜なり、式は法なり、言ふこゝろは、女君
臣、何ぞ酒に耽るの甚しきや、天より女を沈湎するに酒を以てせず、女自ら此の酒
に耽り、顔色をして同じからしむるのみ、此れ過誤の事なれば、従ひ法るに宜しか
らず、女酔うて既に其の容を怨り亂り、又明かきときとなく、晦きときとなく、酒を
飲みて息まず、其の醉へるに及びては、叫び號び、晝をして夜の如くならしめ、嘗て
政事を見ざれば、是を以て大に壞るとなり、

文王曰。咨。咨女殷商。如蜎如蠙。如沸如羹。小大近喪。人尙乎由行。内爨。

于中國。覃及鬼方。
蜎蠙皆蟬なり、蜎は怒なり、醉はずして怒るを謂ふ、鬼方は遠方なり、言ふ心は、女君
臣、酒を飲みて號び呼ぶ聲、蜎の聲の如く、蠙の鳴くが如く、其笑ひ語ること、湯の沸
くが如く、羹の熱するが如く、差別あることなし、夫の王者の行ふ所、小となく、大と
なく、皆國を亡ぼすの道に近からざるなし、然るに此れを以て人の上に居り、猶下
民の此の道を行はんことを欲す、王始め醉はずして怒り、中國に在りしも、人皆之

詩

毛

れに倣ひ、其の惡の行はるゝ、延きて鬼方の遠方にまで及ぶとなり、

文王曰。咨。咨女殷商。匪上帝不時。殷不用舊。雖無老成人。尙有典刑。曾
是莫聽。大命以傾。

言ふこゝろは、女殷商の將に滅亡に至らんとする所以のものは、上帝の之れを生
ずる、其の時を得ざらしむるに非ず、乃ち女殷紂自ら先王の舊法を用ゐざるに由
りて致す所のみ、今や年老いたる成徳の人なしと雖も、尙先王の常事故法として
用ゐるべきものあり、然るに女君臣、此の典刑を用ゐず、己れの喜怒に任せて政を
行ひ、常事故法に聽くことなきが故に、女の大命傾き覆へりて、終に滅亡すべきな
り、王何ぞ紂を以て戒めと爲さざるやとなり、

文王曰。咨。咨女殷商。人亦有言。顛沛之揭。枝葉未有害。本實先撥。殷鑒
不遠。在夏后之世。

顛は仆るゝなり、沛は抜くなり、掲は根を見はす貌なり、撥は猶絶のごとし、言ふこ
ゝろは、古へ賢哲の人亦言へることあり、大樹の忽然として顛仆し、傾き抜けんご
するの時、其の根掲然として見はれ、此の時枝葉未だ折傷の害あらずして、根本は

毛

詩

實に斷絶せり、根本既に絶ゆれば、枝葉も亦之れに従ひて絶ゆべし、王位將に傾き
 亡びんとするの時、其の勢微弱にして危しと雖も、群臣未だ死亡の害あらずして、
 王の身先つ誅滅せらるべし、王の身既に滅ぶれば、群臣亦之れに隨ひて滅ぶ、女若
 し信ぜざれば、則ち殷の璽みとする所遠からず、近く夏后の世に在り、夏の桀無道
 にして、成湯の爲めに誅せらるゝを見れば、紂も亦周人の爲めに殺さるべしと、此
 の意、厲王をして、紂を以て璽と爲し、徳教を改め、脩めしめんことを欲するなり、

(八七四)

抑

抑抑威儀。維徳之隅。人亦有言。靡哲不愚。庶人之愚。亦職維疾。哲人之
 愚。亦維斯戾。○無競維人。四方其訓之。有覺徳行。四國順之。訶謔定命。
 遠猶辰告。敬慎威儀。維民之則。○其在于今。興迷亂于政。顛覆厥徳。荒
 湛于酒。女雖湛樂從。弗念厥紹。罔敷求先王。克共明刑。○肆皇天弗尙。
 如彼泉流。無淪胥以亡。夙興夜寐。洒掃庭內。維民之章。脩爾車馬。弓矢
 戎兵。用戒戎作用。邊蠻方。○質爾人民。謹爾侯度。用戒不虞。慎爾出話。
 敬爾威儀。無不柔嘉。白圭之玷。尙可磨也。斯言之玷。不可爲也。○無易

由言。無曰苟矣。莫捫朕舌。言不可逝矣。無言不讎。無徳不報。惠于朋友。
 庶民小子。子孫繩繩。萬民靡不承。○視爾友君子。輯柔爾顔。不遐有愆。
 相在爾室。尙不愧于屋漏。無曰不顯。莫予云觀。神之格思。不可度思。矧
 可射思。○辟爾爲徳。俾臧俾嘉。淑慎爾止。不愆于儀。不僭不賊。鮮不爲
 則。投我以桃。報之以李。彼童而角。實虹小子。○荏染柔木。言緝之絲。溫
 溫恭人。維徳之基。其維哲人。告之話言。順徳之行。其維愚人。覆謂我僭。
 民各有心。○於乎小子。未知臧否。匪手攜之。言示之事。匪面命之。言提
 其耳。借曰未知。亦既抱子。民之靡盈。誰夙知而莫成。○昊天孔昭。我生
 靡樂。視爾夢夢。我心慘慘。誨爾諄諄。聽我藐藐。匪爲用教。覆用爲虐。借
 曰未知。亦聿既耄。○於乎小子。告爾舊止。聽用我謀。庶無大悔。天方艱
 難。曰喪厥國。取譬不遠。昊天不忒。回遹其德。俾民大棘。

此の詩、古序に、衛武公刺厲王亦以自警也とあり、

抑抑威儀。維徳之隅。人亦有言。靡哲不愚。庶人之愚。亦職維疾。哲人之
 愚。亦維斯戾。

(八七五)

抑々は密なり、隅は廉なり、職は主なり、戻は罪なり、言ふこゝろは、人此の抑々とし
て審密なる威儀あるは、維れ徳の廉隅なり、蓋し内に其の徳あれば、威儀の外に見
けるゝなり、古の賢人亦言へることあり、國道なきときは、哲人として愚ならざる
者なしと、是れ賢哲の人故らに威儀を毀ひ、伴りて愚人と爲るなり、而して衆人の
愚なるは、亦主として此の愚なる疾あるに由る、今哲人の愚を爲すは、亦維れ其の
罪せられんことを恐れてなり、性の然るに非ずと、厲王暴虐にして、濫りに無罪の
人を刑するを刺るなり、

無競維人。四方其訓之。有覺德行。四國順之。訶謨定命。遠猶辰告。敬慎
威儀。維民之則。

無競は競なり、訓は教なり、覺は直なり、訶は大なり、謨は謀なり、猶は道なり、辰は時
なり、言ふこゝろは、人君の政を爲すに、賢人を得るに強きことなからんや、賢人を
得れば、則ち之れをして四方風俗の善からざる者を教化せしむべく、此の賢人、直
大の徳行あれば、則ち四方の國之れに従ひて時かず、又教令を施すの法、當に豫め
其の計謀を大にし、其の教令を定め、長遠の道と爲し、時節を以て民に告げ、之れを

王の朝廷に施すべく、又當に其の舉動を敬慎し、威儀を示して、下民の法則と爲す
べきなりと、

其在于今。興迷亂于政。顛覆厥徳。荒湛于酒。女雖湛樂從。弗念厥紹。罔
敷求先王。克共明刑。

紹は維なり、共は執なり、刑は法なり、上章賢人を用ゐ、四方をして順従せしむべき
ことを言ひ、此の章、今の然る能はざることを言ふなり、言ふこゝろは、今の厲王に
在りては、賢者を用ゐる能はざるが故に、小人を尊び、政教を迷亂し、其の功徳を敗
り、其の政事を廢せしむ、又飲酒に耽り樂む、汝耽樂を好み、酒を嗜みて相従ひ、假令
ひ今に慙ぢずと雖も、何ぞ其の汝に繼ぐの人を念はず、子孫の之れに倣はんと思
るを慮らざるや、汝何ぞ廣く先王の道を索め、及び能く法度を明かにするの賢人
を執りて、之れを用ゐんと欲するに心なきやと、其の賢者を用ゐずして、小人と共
に樂むことを責むるなり、三

肆皇天弗尙。如彼泉流。無淪胥以亡。夙興夜寐。洒掃庭內。維民之章。綏
爾車馬。弓矢戎兵。用戒戎作。用邊蠻方。

肆は故今なり。酒は灑なり。章は表なり。邊は遠なり。言ふことろは故に。今皇天王の爲す所を尙ばずして。此の災異を下せり。是れ天の王を棄つるに非ず。王自ら天に絶ち棄てらるるなり。彼の流るゝ泉の竭きはつるが如く。今王將に滅亡に至らんとすれば。之れに與する者相率ゐて共に亡ぶること勿るべし。又群臣に告げ戒めて曰はく。汝宜しく王に教へて善を行はしめ。早く起き。晚く寝。室内の庭を掃ひ清め。政事を勤め行ひ。人民の表章と爲るべし。又將帥の臣に告げ戒めて曰はく。汝當に汝が征伐する所の車馬。及び弓矢と戎兵との器用を脩め。戎兵の動作するに戒備し。又之れを用ゐて。蠻方の來り侵す者を遠ざけ。之れをして來り侵すことを得ざらしむべしとなり。

質爾人民。謹爾侯度。用戒不虞。慎爾出話。敬爾威儀。無不柔嘉。白圭之玷。尙可磨也。斯言之玷。不可爲也。

質は成なり。不虞を戒むとは。常ならざる寇盜等の爲めに備ふるを謂ふ。侯度は君たるの法度なり。話は善言なり。即ち教令を謂ふ。柔は安なり。嘉は善なり。玷は缺なり。此の章。又郷邑の大夫。及び邦國の君を戒むるなり。言ふことろは。汝等常に人民の政事を成し。君たるの法度を謹むべし。且以て將來非常の事を戒め。豫め之れを防ぐの備へを爲すべしと。既に臣の事を戒め。又王を諫めて曰はく。當に爾が出す所の教令を謹み。又爾が朝廷に在るの威儀を敬み。教令威儀をして安善ならざるものなからしむべし。而して其の教令は。尤も須く謹慎すべし。夫の白玉の圭の玷けたるは。磨きても尙平かならしむべし。此の政教言語の缺失あるは。復改む可からず。王者の安危は。政令の如何に在れば。宜しく慎むべしとなり。

無易由言。無曰苟矣。莫捫朕舌。言不可逝矣。無言不讎。無德不報。惠于朋友。庶民小子。子孫繩繩。萬民靡不承。

捫は持なり。讐は用なり。惠は順なり。繩々は戒なり。言ふことろは。王此の言語の教令を以て。かりそめの事と爲し。輕易に言ひ出だすことなかるべし。假令ひ人の吾が舌を執へ持つ者なしとも。口より出づるに任せて。かりそめの言を出だし。之れをして天下に逝かしむ可らず。往けば則ち復改む可らざるなり。王の出す所は。善惡共に一言として人の用ゐざるものなく。恩徳あれば。下民之れに報答せざるものなし。王善あれば。人必ず王に報ずべし。故に王宜く順道を朋友に施し行ふべし。

毛

即ち諸侯卿大夫、下庶民の子弟小子に及ぶまで、教ふるに善道を以てせば、民皆之れを行ひ、王の子孫も能く細細と戒め慎みて、王の教令を行はば、即ち天下の衆民、承順して之れを行はざる者なからんとなり、是れ王に勤むるに、教令を慎みて下民の法と爲すべきを以てするなり、

視爾友君子。韓柔爾顔。不遐有愆。相在爾室。尙不愧于屋漏。無曰不顯。莫予云覲。神之格思。不可度思。矧可射思。

韓は和なり、柔は安なり、遐は遠なり、屋漏は室の西北隅なり、覲は見なり、格は至なり、思は助辭なり、矧は况なり、射は厭なり、此の章、王の朋友の不忠なることを言ふ、言ふことゝろは、我れ今王の友とする所の諸侯、及び卿大夫の君子を見るに、皆忠正ならず、唯巧言令色を以て、王の顔色を和らげ安んぜんことを求め、王を匡し諫むる者なし、是れ正道に於て罪過あるに近し、此の臣、但王に諂ふのみならず、又讒事に怠慢なり、其の王の祭りを助くるを見るに、宗廟に在りて、肅敬の心なし、屋漏は幽闇不明の處なれども、神の之れを見るに、慙ぢざらんや、汝屋漏を以て我れを見る者なしと、謂ふことなかれ、神の來る、度り知る可らず、况や祭りの末に於て厭ひ倦むことを得可けんや、神の來ることを知らざれば、又神の去ることをも知る能はざるが故なり、

毛

辟爾爲德。俾臧爾嘉。淑慎爾止。不愆于儀。不僭不賊。鮮不爲則。投我以桃。報之以李。彼童而角。實虹小子。

止は至なり、童は羊の角なきものを謂ふ、虹は潰なり、言ふことゝろは、王當に其の徳を脩めて、法度を正しくし、民をして之れに法り、王の爲る所を臧しとし嘉みせしむべし、王善を爲せば、則ち民善を爲すなり、又能く汝が心の至る所を慎み、常に仁信に止まり、汝の威儀に於て愆ることなく、其の行ふ所、道に差ふことなく、人を賊ふことなければ、人の之れを以て法則と爲さざる者鮮からん、夫の人を愛する者は、人亦之れを愛し、人を惡む者は、人亦之れを惡む、人我れに投ずるに桃を以てするあれば、我れ必ず之れに報ゆるに李を以てす、王若し善を以て人に施せば、人必ず善を以て之れに報ゆべし、彼の事を用ゐるの臣、無知にして自ら用ゐる者あり、將に王室を壞らんとす、是れ童羊の角なくして、自ら角ありと謂ひ、自ら用ゐて人に觸るゝが如く、能なくして能ありと爲す、此の輩、實に小子の政を潰亂する者宜し

詩

く之れを遠ざくべしとなり、此の詩、武公の作る所、殆んど座右銘の如きもの也。託して人より我れを戒むるの辭を爲す、故に爾小子と稱し、用ゐて自ら警め、且王を諷するなり。

荏染柔木。言緝之絲。溫溫恭人。維德之基。其維哲人。告之話言。順德之行。其維愚人。覆謂我僭。民各有心。

荏染は柔かなる貌、緝は綸なり、温々は寛柔の意なり、話言は古の善言なり、覆は反なり、僭は不信なり、此の章、王の教ふ可らざるを言ふ、言ふこゝろは、荏染として柔忍なるの木は、弓の幹と爲すべし、我れ乃ち絲を以て之れに緝すれば、則ち弦ありて弓と爲すべし、亦猶温々たる寛柔の人は、徳の基にして、我れ之れに教ふるに學を以てすれば、則ち能ありて徳を成すがごとし、但人の性同じからず、教ふ可き者と、教ふ可らざる者とあり、維の賢哲の人は、之れに告ぐるに善言を以てすれば、則ち其の道德の行ひに順ひて、之れを行ひ、夫の愚昧の人は、之れに告ぐるに善言を以てすれば、則ち反りて我が言を信ならずと謂ひて、之れを拒む、民の賢愚、各其の本心ありと云ふ、是れ王の本性を以て、教ふ可らざるを謂ふなり。

毛

詩

於乎小子。未知臧否。匪手攜之。言示之事。匪面命之。言提其耳。借曰未知。亦既抱子。民之靡盈。誰夙知而莫成。

借は假なり、莫は晩なり、此の章、亦王の教ふ可らざるを言ふ、言ふこゝろは、於乎此の小子の厲王、其の心、未だ善惡を識別すること能はず、我れ唯手を携へて其の従ふ處を指し示すのみならず、又親しく示すに其の事の是非を以てし、其の之れを見て悟らんことを庶ふなり、我れ又面命して之れを語るのみに非ず、又親く其の耳を提げて之れに聞かしめ、其の永く識るして忘れざらんことを庶ふ、之れに教ふることを熟すと雖も、之れを啓き悟す可らず、假令ひ人ありて、王尙幼少にして、未だ知る所あらずと云ふとも、王亦既に子を抱きて人の父と爲れば、復幼少と謂ふ可らず、今萬民王を以て才智褊小なめとし、其意に満足せず、王の更に才智を益さんことを望む、然れども誰れか復早く知る所ありて、晩く成る者あらん、早く知れば、則ち早く成り、晩く知れば、則ち晩くなること明かなり、今王晩くして、知ることなし、是れ終に成る所なきなりと。

毛

詩

昊天孔昭。我生靡樂。視爾夢夢。我心慘慘。誨爾諄諄。聽我藐藐。匪爲用

教。覆用爲虐。借曰未知。亦聿既耄。

夢々は亂なり、慘々は愛ふるなり、諄々は告げさとするの貌、藐々は人の言を容れざるの貌なり、此の章、父兄師保に託して、自ら其の愛勸の意を述ぶ、三の我の字、誨ふる者、自ら言ふなり、言ふこゝろは、昊天孔だ明かなれば、我が生の樂みなきことを察せらるゝならん、王の意を見るに、夢々として開悟せず、故に我が心慘々として愛ひて樂まず、爾に誨ふること諄々と告げ諭すと雖も、爾の我が言を聽くや、藐々として容れ用ゐず、我が言ふ所を用ゐて教へと爲すに非ずして、反りて之れを以て事に妨げありと爲し、忠言を受けず、人或は王を以て未だ事理を知らざれども、更に長進の時あるべしと曰ふ者ありと雖も、王亦將に此れよりして昏聩せんとす、復知識を長ずるの時なからんとなり、

於乎小子。告爾舊止。聽用我謀。庶無大悔。天方艱難。曰喪厥國。取譬不遠。昊天不弔。回遹其德。俾民大棘。

止は助辭なり、言ふこゝろは、於乎歎き傷むべきものは、小子にして無知なる我が王なり、我れ今汝に告ぐるに久故往昔の道を以てす、我が陳ぶる所は、皆先世の舊

毛

詩

毛

章なり、汝若し我が計謀を容れ用ゐば、幸に大なる後悔なからんとす、天方に玉が悪を爲すの故を以て、艱難の事を下し、之れをして災異あり兵寇あらしめ、將に其の國を滅さんとす、我れ王の將に滅ひんとするを憂ふ、故に王の爲めに謀りて、譬へを取ることを深遠にして知り難きを爲さず、唯淺近の言を以てするのみ、王の政を爲す、當に昊天の徳の如く、寒暑常ありて忒はざるに倣ふべし、王何ぞ反りて常なくして、其の行ひを邪僻にし、民に取ること貪暴にして、民の資財をして皆盡き、甚だしく困急せしむるや、我れ是を以て王を諫むるなりと、

桑柔

菀彼桑柔。其下侯甸。捋采其劉。瘼此下民。不殄心憂。倉兄填兮。俾彼昊天。寧不我矜。○四牡騤騤。旃旒有翩。亂生不夷。靡國不泯。民靡有黎。具禍以燼。於乎有哀。國步斯頻。○國步蔑資。天不我將。靡所止疑。云徂何往。君子實維。秉心無競。誰生厲階。至今爲梗。○憂心慙慙。念我土宇。我生不辰。逢天俾怒。自西徂東。靡所定處。多我覯瘡。孔棘我圉。○告爾憂恤。誨爾序爵。誰能執執。逝不以濯。其何能淑。載胥及溺。○如彼遼風。亦

恐之僂。民有肅心。蔣云不逮。好是稼穡。力民代食。稼穡維寶。代食維好。
 ○天降喪亂。滅我立王。降此蝥賊。稼穡卒痒。哀恫中國。具贅卒荒。靡有
 旅力。以念穹蒼。○維此惠君。民人所瞻。秉心宣猶。考慎其相。維彼不順。
 自濁俾臧。自有肺腸。俾民卒狂。○瞻彼中林。甡甡其鹿。朋友已譖。不胥
 以穀。人亦有言。進退維谷。○維此聖人。瞻言百里。維彼愚人。覆狂以喜。
 匪言不能。胡斯畏忌。○維此良人。弗求弗迪。維彼忍心。是顧是復。民之
 貪亂。寧爲荼毒。○大風有隧。有空大谷。維此良人。作爲式穀。維彼不順。
 征以中垢。○大風有隧。貪人敗類。聽言則對。誦言如醉。匪用其良。覆俾
 我悖。○嗟爾朋友。予豈不知。而作如彼。飛蟲時亦弋獲。旣之陰女。反予
 來赫。○民之罔極。職涼善背。爲民不利。如云不克。民之回遘。職競用力。
 ○民之未戾。職盜爲寇。涼曰不可。覆背善詈。雖曰匪予。旣作爾歌。
 此の詩、古序に苻伯刺厲王也とあり、苻伯は畿内の諸侯にして、王の卿士なり、字を
 良夫と曰ふ、厲王の暴虐にして民を困むることを刺るなり、
 蒺彼桑柔。其下侯甸。捋采其劉。瘳此下民。不殄心憂。倉兄填兮。俾彼吳

天。寧不我矜。

蒺は茂る貌、旬は蔭の偏きを謂ふ、劉は葉のまばらなるなり、瘳は病なり、倉は喪な
 り、兄は滋なり、填は久なり、俾は大に、明かなる貌なり、言ふことゝるは、茫然として茂
 るものは彼の桑にして、其の葉稚く柔かなり、人其下に休息して、均しく庇蔭を得、
 皆暑熱の患なし、然れども其の葉を捋り采るの後は、劉然として葉の疎なるが故
 に、復炎日を蔭ふこと能はず、其の下に息ふ所の民を病ましむ、猶王の明德あれば、
 天下の民、均しく其恩澤を蒙るも、群臣放恣にして、王の徳を損することあれば、天
 下の民を困苦せしむるがごとし、今王の臣皆放恣にして、王の徳を損し、民をして
 心中の憂を絶つこと能はざらしめ、喪亡するの道益久し、俾然として明大なる吳
 天の王者、民の上に居りて、民の父母たり、寧んぞ我れを憐まらずして、此の喪亡の政
 を行ふやと、

四牡騤騤。旗旐有翩。亂生不夷。靡國不泯。民靡有黎。具禍以燼。於乎有
 哀。國步斯頻。

騤々は息はざるなり、旗は鳥隼を畫ける旗、旐は龜蛇を畫きたる旗なり、夷は平な

若

り、涙は滅なり、黎は齊なり、歩は行なり、頻は急なり、此の章、憂ふべきの事を言ふ、言ふこゝろは、厲王無道にして、妄りに征伐を行ひ、四牡の馬に駕し、駭々として息はず、旗旄の旂を建て、翻々と道路に在りて、常に止むときなし、王の兵を用ふる、本亂を除かんと欲す、然るに亂日に生じて、之れを平らぐること能はず、諸侯自ら相攻め、一國として涙ばされざる國なし、民悉く兵禍に罹り、或は死し、或は生き、能く齊一なる者なし、假令ひ存する者あるも、俱に禍災に遭ひ、餘燼と爲るのみ、國家此の危急を民に行ふこと、痛むべきなりと、

國步蔑資。天不我將。靡所止疑。云徂何往。君子實維。秉心無競。誰生厲階。至今爲梗。

蔑は猶輕のごとし、將は猶養のごとし、疑は定なり、徂は行なり、競は疆なり、厲は惡なり、梗は病なり、言ふこゝろは、國家政を爲すに、民の資用を輕蔑す、是れ天我れを養はざるなり、我れ兵役に従ひて止息する時なし、今復此に往く、又何くに往かん、諸侯卿大夫の君子、其の心を執り守ること善に疆からず、只力を以て争はんことを欲す、誰れか始めて此の禍の階を生せしものぞ、今日に至り、病ましきことを爲して止まずとなり、

憂心慙慙。念我土宇。我生不辰。逢天憚怒。自西徂東。靡所定處。多我覯瘠。孔棘我圍。

宇は居なり、憚は厚なり、辰は時なり、瘠は病なり、圍は國の四邊なり、此の章、士卒軍に従ひて邊陲を守り、勞苦して土著の甚だ、安きを念ふ、土宇と我圍と相對して言ふなり、言ふこゝろは、憂ふる心慙々と深く、我が居宅を顧み念ふ、而して既に歸ることを得ず、故に自ら我か生るゝの時節を得ずして、天の厚く怒るに逢ふことを傷む、我れ西よりして東に往き、安んじ定りて居る所なし、我が困病に遭ふこと多くして、我が邊陲に居り、勞苦すること甚だ急なりと、邊陲に居りて、定處する所なしと云ふものは、一處に居るに非ずして、更番互成等の事あればなり、

爲謀爲恚。亂况斯削。告爾憂恤。誨爾序爵。誰能執熱。逝不以濯。其何能淑。載胥及溺。

恚は愼なり、逝は猶去のごとし、淑は善なり、胥は相なり、及は與なり、此の章、王に賢臣の輔けなきを以て、賢者を用ふべきことを教ふるなり、言ふこゝろは、王の寡族

詩

毛

詩

の謀を爲すを觀るに、兵事を慎み重んずと雖も、謀慮長からず、亂亡をして致く甚
だしからしむ、日に國を侵し削らるゝに至る、是れ皆任ずる所賢者に非ず、之れを
行ふこと理を失へるに由るなり、故に今汝に告ぐるに、天下の憂を憂ふることを
以てし、汝に誨ふるに賢否を識別して、爵位を次第することを以てすべし、但能く
賢人を用ゐれば、則ち憂ひなし、然る所以のものは、誰れか能く熱に苦むの時、去り
て其の身體を濯ひ、以て涼快を求めざる者あらんや、國を治むるの道、當に賢者を
用ふべきなり、汝の政事を見るに、何ぞ能く善しと謂はんや、君臣相與に禍難に陷
りて溺るべしとなり、

如彼遡風。亦恐之僂。民有肅心。葍云不逮。好是稼穡。力民代食。稼穡維
寶。代食維好。

遡は郷なり、僂は喟なり、葍は使なり、此の章、王の賢者に任せずして、政教の暴虐な
るを傷むなり、言ふこゝろは、王の政を爲すを見るに、彼の疾き風に嚮ふ者の喟然
として、氣を傷り、息すること能はざらしむるが如し、其の人心に逆ふや甚だし、民
善に進むの心あらば、之れを任用すべきに、却りて之れを退け、門に遠ふことを得

ずと云はしむ、甚だ傷むべし、又人を用ふるは、此の稼穡の艱難を知り、民に功ある
の人をして、功なき者に代り、天祿を食ましむべし、此の如くなれば、則ち政事善く
して、民心之れを樂む、然る所以の者は、稼穡の事を知る者は國の寶なり、能者をし
て不能者に代りて祿を食ましむるは、政の好きなりと、是れ民の利する所に因り
て之れを利し、民の好む所を好むものなり、

天降喪亂。滅我立王。降此蝻賊。稼穡卒痒。哀恫中國。具贅卒荒。靡有旅
力。以念穹蒼。

蝻は苗の根を食ふ蟲、賊は苗の節を食ふの蟲なり、耕し種うるを稼と曰ひ、收め取
るを穡と曰ふ、卒は盡なり、痒は病なり、恫は痛なり、贅は屬なり、荒は虚なり、穹蒼は
蒼天なり、言ふこゝろは、王の政を爲すこと暴虐なるが故に、天より此の喪亂の災
を下し、我がたのみて立つる所の王を滅ぼし、又此の蝻賊、苗を害するの蟲を降し
て、穀物皆其の病害を被らざるなし、天災此くの如くにして、加ふるに兵亂を以て
す、哀み痛むべきかな、今中國の人、俱に兵役に繫屬せられ、家々盡く空虚なり、羣臣
の群臣、旅力を同じくして、共に王を諫め、此の上天下す所の災害を止めんことを

欲する者なきやとなり。

維此惠君。民人所瞻。秉心宣猶。考慎其相。維彼不順。自獨俾臧。自有肺腸。俾民卒狂。

惠は順なり。宣は徧なり。猶は謀なり。相は質なり。臧は善なり。言ふことろは、此の至徳にして民に順ふの君は、百姓民人の仰ぎ瞻る所たり。乃ち其の心を執ること正しくして、徧く衆人に謀り、又之れを考ふることを慎み、賢明にして美質ある者を用ゐるなり。彼の順道を民に施さざるの君は、自ら獨り己れの心を用ゐ、己れの用ふる所の臣を以て、皆善人と爲し、復詳かに善惡を考へ、更に賢者を求むることを爲さず、己れが肺腸あるを以て、心の欲する所を行ひ、衆人に謀らず、惡人を任用し、下民をして之れに化せしめ、狂人の如くすとたり。

詩

毛

瞻彼中林。甡甡其鹿。朋友已譖。不胥以穀。人亦有言。進退維谷。

甡々は衆多の貌。譖は不信なり。胥は相なり。以は猶與のごとし。穀は善なり。谷は窮なり。此の章、臣下相信せずして、百姓をして困窮せしむるを責むるなり。言ふことろは、彼の中林を見れば、群がれる鹿の甡々として多きを見る、鹿は走獸なれども、

毛

詩

維此聖人。瞻言百里。維彼愚人。覆狂以喜。匪言不能。胡斯畏忌。

猶其の類と共にして行く、朝廷の群臣、亦當に善を以て相與にし、共に官位に處るべし。然るに汝群臣朋友皆相信せず、相告ぐるに善道を以てせざるは、是れ鹿にも如かざる也。古の賢人言ふことあり、無道の世、其の民前に明君なく、退きては罪役に迫り、進むと退くと、皆困窮すと、今の時、實に然るなりと。

維此良人。弗求弗迪。維彼忍心。是顧是復。民之貪亂。寧爲荼毒。

迪は進なり。荼は苦きものなり。毒は人を刺す蟲なり。言ふことろは、國に善人おれども、王之れを求めず、之れを進めず、彼の忍びて惡を爲す心ある者を顧み、既に之

れを任用し、復重ねて之れを進む、其の賢者を疎んじて、小人を愛すること、此くの如し、故に天下の民、王の虐政に苦み、已むことを得ずして、亂亡を欲し、互に力を以て悪を爲し、安んじて茶毒の行ひを爲すに至ると、此れ民の本性に非ず、王の虐政に由りて然ることを言ふなり。

大風有隧。有空大谷。維此良人。作爲式穀。維彼不順。征以中垢。

隧は道なり、作は起なり、式は用なり、征は行なり、中垢は隠れて聞き義なり、行ふ所塵垢の中に在るが如きを謂ふ、上章、王の悪人を用ゐることを言ひ、此の章、悪の本性ありて變ず可らざるを言ふ、言ふこゝろは、大風の従ひて來る所、自ら其の道あり、乃ち彼の空して大谷の、中よりして來るなり、賢愚の爲す所、亦自ら其の本ありに驗ふ、然れば人の善を爲すも、惡を爲すも、各其の天性に依るなり、此の善徳ありて道に順ふの人は、其の起し爲す所の事、皆善道を用ゐて、昭明の徳を行へども、彼の道に反きて順はざるの人は、其の行ふ所、皆闇昧の事なり、其の性改め移す可らず、王何ぞ此の移す可らざるの悪人を用ゐ、政を行ひ、民を亂らしむるやとなり。

大風有隧。貪人敗類。聽言則對。誦言如醉。匪用其良。覆俾我悖。

類は善なり、覆は反なり、言ふこゝろは、大風の來る、道ありて違はず、貪欲の人は、此の悪しき行ひありて善道を敗るなり、夫の道に聽きたることの如きは、能く之れに應答すれども、詩書に記したる正しき言を誦するを聽けば、則ち眠り臥して醉へるが如し、上位に在る者にして、此くの如きの行ひを爲すが故に、善人を用ゐず、反りて我れをして、善道に悖らしむるに至ると、其の類を敗るの驗を言ふなり。

嗟爾朋友。予豈不知。而作如彼飛蟲。時亦弋獲。旣之陰女。反予來赫。

赫は炙なり、飛蟲は蟲に非ず、鳥を指して言ふなり、羽蟲三百六十、鳳爲之、長の古語あれば、鳥を指して蟲と曰ふなり、言ふこゝろは、嗟、汝朋友、朝廷に在る所の者、我れ豈汝の行ふ所、惡しきことを知らざらんや、惡を爲して已まざれば、時ありて亦誅せらるべし、例へば、夫の飛鳥の如き、其の羽翼を待み、東西南北、自由に翔り飛ぶと雖も、時ありて亦弋者の爲めに獲らるゝに非ずや、我れ汝が禍に罹らんことを恐れ、既に善言を以て、往きて汝を覆ひ、告ぐるに、患難を以てし、之れをして過ちを改めしめんとすれば、汝反りて我れを赫炙して、之れを拒ぎ、我が忠告を受けざるな

りと赫の字陰の字と對す我れ方に女を陰ふに涼を以てすれば汝反りて我れを
炙るに熱を以てするの意なり故に赫を訓じし炙と爲す

(八九六)

民之罔極。職涼善背。爲民不利。如云不克。民之回遘。職競用力。

涼は薄なり回遘は邪僻の義なり競は逐なり言ふころは上の政善ならざれば
民の俗亦隨て敗れ民の行ひ極りなく主として浮薄を事とし唯相欺き背くの事
を善しとす是れ上の惡政を行ふに由るものにして上の政を爲すに民の不利を
爲すもの其の人に勝たざるを畏るゝものゝ如し然れども上虐政を以て下に臨
めば下は則ち姦偽にして責めを逃る民の行ひの邪僻なるは上より主として競
ひ逐ひ強力を以て相尙ふに由るなりと

民之未戾。職盜爲寇。涼曰不可。覆背善背。雖曰匪我。既作爾歌。

戾は定なり言ふころは今民皆主として盜賊を作し寇害を相爲すは其の心未
だ安んじ定らざるなり故に我れ其の薄俗の不可なることを言ひて王を諫むれ
ば反りて我れに背きて大に罵るなり汝此の惡政は我が爲る所に非ずと云ふと
雖も我れ實に汝の爲す所たるを知る故に既に汝の爲めに歌を作り汝の過ちを

歌ふ汝當に受けて之れを改むべしとなり

雲 漢

倬彼雲漢。昭回于天。王曰於乎何辜。今之人。天降喪亂。饑饉薦臻。靡神
不舉。靡愛斯牲。圭璧既卒。寧莫我聽。○早既太甚。蘊隆蟲蟲。不殄禋祀。
自郊徂宮。上下奠瘞。靡神不宗。后稷不克。上帝不臨。耗斁下土。寧丁我
躬。○早既太甚。則不可推。兢兢業業。如霆如雷。周餘黎民。靡有子遺。昊
天上帝。則不我遺。胡不相畏。先祖于摧。○早既太甚。則不可沮。赫赫炎
炎。云我無所。大命近止。靡瞻靡顧。群公先正。則不我助。父母先祖。胡寧
忍予。○早既太甚。滌滌山川。早魃爲虐。如憐如焚。我心憚暑。憂心如熏。
羣公先正。則不我聞。昊天上帝。寧俾我遯。○早既太甚。匪勉畏去。胡寧
瘝我。以早。愴不知其故。祈年孔夙。方社不莫。昊天上帝。則不我虞。敬恭
明神。宜無悔怒。○早既太甚。散無友紀。鞠哉庶正。疚哉冢宰。趣馬師氏。
膳夫左右。靡人不周。無不能止。瞻印昊天。云如何里。○瞻印昊天。云
其星。大夫君子。昭假無贏。大命近止。無棄爾成。何求爲我。以戾庶正。瞻

(八九七)

印昊天。曷惠其寧。

此の時、古序に仍叔美宣王也とあり、仍叔は周の大夫なり、宣王其の父厲王が暴政を行ひ國を亂りしの後を承け、亂を治むるの志あり、然るに早歲に遇ひて益愛ひ、身を居くこと安からずして、専ら徳行を修め、善政を以て其の災を去らんことを欲す、天下の民、王化の又行はれて、王の爲めに憐れまるべきを喜ぶ、故に仍叔此の時を作りて、之れを美するなり。

倬彼雲漢。昭回于天。王曰於乎何辜。今之人。天降喪亂。饑饉薦臻。靡神不舉。靡愛斯牲。圭璧既卒。寧莫我聽。

倬は明かなる貌、雲漢は天河なり、薦は重なり、臻は至なり、靡は莫なり、言ふこゝろは、時に早既に甚だし、王、下民を憂念し、夜仰きて天象を見て、雨ふらんことを望み、倬然として明かなる者は彼の雲漢にして、其の水氣精光天上に回轉するは、未だ雨あらざるの徴なり、乃ち言て曰はく、於乎嘆く可きかな、今の人何の罪ありて、天の爲めに罰せられ、此の喪亂の災を下し、饑饉の害をして、頻りに重ね至らしむるや、我れ此の早の爲めに、天地山川の神に祈禱し、神として祭りを擧げざるものな

詩

毛

し、又其の神を祭るに、牛羊豕の三牲を惜まざして、又神を禮するの圭璧も既に盡きたり、諸神何ぞ我か精誠を聽きて祐助を加ふる者なきやとなり、

早既太甚。蘊隆蟲蟲。不殄禋祀。自郊徂宮。上下奠瘞。靡神不宗。后稷不克。上帝不臨。耗斁下土。寧丁我躬。

蘊は暑氣の甚だしきなり、隆は雷聲の絶えざるなり、蟲々は熱氣人を蒸すの貌なり、言ふこゝろは、早の勢ひ己に甚だし、其の暑氣蘊々として、雷聲隆々たり、熱氣蟲々として酷烈なること、此くの如く、復雨ふることあらず、故に我れ祈禱を絶たず、既に天を郊に祭り、又郊よりして往きて宗廟の宮に至り、上は天を祭り、下は地に祭り、天には則ち之れを地に奠き、地には則ち之れを地に瘞め、是によりて百神に至るまで、神として之れを宗ひざるなし、我か精誠此くの如くにして、雨澤の降らざるものは、是れ先祖后稷も此の早災に勝つこと能はざるなり、皇天上帝も臨みて我か祀を饗けざるなり、若し后稷にして能く我れを祐け、天意我れに臨まば、則ち應に我れを助くるに福を以てすべし、何の故に此の早災を以て、天下の土地を耗し、敗り、我が身に當りて此の大旱あらしめんやとなり、

詩

毛

早既太甚。則不可推。兢兢業業。如霆如雷。周餘黎民靡。有子遺。昊天上
帝。則不我遺。胡不相畏。先祖于摧。

推は去なり。兢兢は恐なり。業々は危なり。子は孤獨の貌なり。摧は至なり。言ふこと
るは、旱熱甚だし、之れをして移り去らしむ可らず。天下の民、饑饉に苦み、兢兢ともし
て恐れ、業々として危ぶみ、其の狀雷霆の上に發するが如し。故に周の民多く死亡
し、其の死せずして遺りたる者も、子然として餓え病まざる者なし。此くの如くな
れば、則ち昊天上帝の意盡く我が民を殺して遺さざるを欲するか、先祖の神、天の
此くの如きを見て、何ぞ我れを助け、此の旱災を畏れて來り格らざるやとなり、

早既太甚。則不可沮。赫赫炎炎。云我無所。大命近止。靡瞻靡顧。羣公先
正。則不我助。父母先祖。胡寧忍予。

沮は止なり。赫赫は旱の氣なり。炎炎は熱の氣なり。正は長なり。先正は百辟卿士な
り。言ふこと、るは、旱の勢既に甚だしければ、則ち之れを止め、卻く可らず。赫赫炎炎を
として、其の熱の盛んなる、之れに堪ふること能はず。皆云ふ之れを避くるに所な
しと、衆民の命、將に死亡に近からんとす。然るに上天曾て之れを顧み、察すること

なく、又廣く明神に訴ると雖も、古へ有徳の群公及び先世の長官百辟卿士等曾て
我が民に於て之れを助け、天をして雨を降さしめず。先祖文王武王の神聖、民の父
母たる者、何ぞ曾て我れに忍び、天をして雨ふらしめざるやとなり、

早既太甚。滌滌山川。旱魃爲虐。如惓如焚。我心憚暑。憂心如熏。羣公先
正。則不我聞。昊天上帝。寧俾我遯。

滌々は旱の氣なり。魃は旱の神なり。惓は燎なり。憚は勞なり。熏は灼なり。言ふこと、
るは、旱の勢既に甚だし、滌々然として、害山川に及び、山に草木なく、川に水なから
しむ。又熱氣の積み聚るより、此の旱魃の神を生じ、其の虐害を爲すや、草木を枯ら
すこと、火の物を焚くが如し。我が王の心、又暑熱の氣に勞れ、其の憂ひ、火の爲めに
熏せらるゝが如し。是を以て神明に告げ訴ふるも、群公先正、我れに於て聞く所あ
らざるか。天をして遂に雨ふらしめざるなり。昊天上帝、何ぞ我が心をして避れ、遯
れて天下に漸ぢしむることを爲すやとなり、

早既太甚。暵勉畏去。胡寧瀆我。以旱。愴不知其故。祈年孔夙。方社不莫。
昊天上帝。則不我虞。敬恭明神。宜無悔怒。

瘼は病なり、黽勉は雨ごひの祈りを急にするなり、悔は恨なり、言ふこゝろは、早既に甚だし、雨を乞ふの祈りを急に於て、早魃の神を去らしめんことを思へども、其の去らざることを畏る、天何ぞ我れを病ましむるに早を以てするぞ、若し政事の悪しきを以て、此の害を致すとならば、政事の失は何に在るか、曾て其の故を知らざるなり、我れ又豊年を祈ること甚だ早く、四方と社とを祭ること、亦晚からず、昊天上帝、曾て我が心を度り知らず、我が明神に肅み事ふること、此くの如くなれば、宜しく明神の爲めに恨み怒らるゝことなかるべきなり、我れ何に由りて此の早災に遇ふことぞとなり、

早既太甚。散無友紀。鞠哉庶正。疚哉冢宰。趣馬師氏。膳夫左右。靡人不周。無不能止。瞻卬昊天。云如何里。

鞠は究なり、疚は病なり、周は救なり、里は憂なり、言ふこゝろは、早既に甚だしく、歳の凶なること、此くの如くなれば、汝群臣早を救ふの急なるが爲めに、其の職事を廢し、之れを整理するに暇あらず、離散して復朋友の綱紀あることなし、五穀登らずして群臣に賜ふ所の祿米も乏しければ、庶官の長たる者も、是に於て窮し、冢宰

の職も、是に於て病めるなり、又趣馬の馬官も、師氏膳夫左右の百官をも困窮せしむるに至る、汝等諸臣、一人として百姓の困窮を救はざるなく、救ふこと能はど爲して止まる者なし、此の貧きに分ち寡きを恤むが故に、汝等をして益困ましむ、仰ぎて昊天を望み見て、之れに訴へて曰はく、如何ぞ我れをして憂ひしむること、此くの如きぞとなり、

瞻卬昊天。有嘽其星。大夫君子。昭假無贏。大命近止。無棄爾成。何求爲我。以戾庶正。瞻卬昊天。曷惠其寧。

嘽は衆星の貌なり、假は至なり、戾は定なり、曷は何なり、言ふこゝろは、王仰ぎて昊天を見れば、唯嘽然光明の衆星あるを見る、天象此くの如くなれば、未だ雨ふるの微あらず、因りて言ひて曰はく、汝卿大夫の君子、同じく恤ふる所の者、當に其の至誠を天下に明かにし、敢て私の願餘ありて、散せざること勿るべし、然る所以のものは、衆人の命皆死亡に近し、汝當に救ひて之れを全くすべし、願餘ありて救はず、以て汝の成功を棄つること勿れ、又曰はく、汝をして之れを救はしむるものは、何ぞ唯我が民を存することを求むるが爲めならんや、乃ち汝が衆官の長たるを以

て、之れを安んじ定めんと欲するなり、又昊天を仰ぎ望みて、之れに訴へて曰はく、
昊天何れの時か、當に我が求むる所に順ひ、雨を降して、我が心を安からしむべき
やとなり、

夫れ一人の誠意、掩ふ可らず、天下の民心、欺く可らず、此の意一たひ誠なれば、紀綱
未だ振ふに及ばず、法度未だ修むるに及ばず、内難未だ熄むに及ばず、外患未だ平
かなるに及ばずと雖も、天下の民、已に治平の境に在るが如し、宣王厲王の後を承
け、天下の亂極まる、治を望むの情、啻に飢者の食を念ひ、渴者の飲を思ふのみなら
ず、宣王位に即き、未だ民の望みを慰むるの事あるを見ずして、天下治を喜ぶの情、
已に災に遇ふの日に決す、宣王先づ民心を得て、民心宣王の心に決することある
を信ずるなり、蓋し内志既に立てば、其の誠心實意、寓する所に隨ひて顯る、所謂る
災に遇ひ行ひを修むるもの、固より非を飾り譽れを求め、徒らに故事を行ふもの
に比に非ず、其の神を祀り、早に禱り、己れを罪し、民を矜み、荒を救ひ、奉を薄くする
を觀るに、後世人君、未だ嘗てなきにあらざる所と雖も、其の誠意形迹の外に出づ
る者あり、事を以て論すへきに非ず、茲れ天下其の王化の復行はるゝを喜ぶ所以

にして、仍叔の之を美する所以なり、然らざれば、民を移し、粟を移し、勤めざるに非
ずと雖も、其の民多きを加へず、是れ賊に天下の欺く可らざるを見るべきなり、

崧 高

崧高維嶽、駿極于天。維嶽降神，生甫及申。維申及甫，維周之翰。四國于
蕃，四方于宣。○壹壹申伯，王纘之事。于邑于謝，南國是式。王命召伯，定
申伯之宅。登是南邦，世執其功。○王命申伯，式是南邦。因是謝人，以作
爾庸。王命召伯，徹申伯土田。王命傅御，遷其私人。○申伯之功，召伯是
營。有俶其城，寢廟既成。既成藐藐，王錫申伯。四牡騶騶，鈞膺濯濯。○王
遣申伯，路車乘馬。我圖爾居，莫如南土。錫爾介圭，以作爾寶。往近王舅。
南土是保。○申伯信邁，王餞于郟。申伯還南，謝于誠歸。王命召伯，徹申
伯土疆。以峙其糧，式遄其行。○申伯番番，既入于謝。徒御嘽嘽，周邦咸
喜。戎有良翰，不顯申伯。王之元舅，文武是憲。○申伯之德，柔惠且直。揉
此萬邦，聞于四國。吉甫作誦，其詩孔碩。其風肆好，以贈申伯。

此の詩、古序に尹吉甫美宣王也とあり、厲王政を亂りてより、天下安からず、宣王再

ひ先王の功を興し、天下の民をして平定することを得せしめ、邦國を建て、諸侯を親愛し、申伯を褒賞すること、其の宜しきを得たり、故に卿士尹吉甫、此の詩を作りて之れを美せしなり。

崧高維嶽。駿極于天。維嶽降神。生甫及申。維申及甫。維周之翰。四國于蕃。四方于宣。

崧は山の大きにして高きを謂ふ、嶽は四嶽なり、東嶽を岱と曰ひ、南嶽を衡と曰ひ、西嶽を華と曰ひ、北嶽を恒と曰ふ、駿は大なり、極は至なり、翰は幹なり、申甫皆國の名なり、堯の時姜氏四岳の祀を掌り、天子巡狩して其の下に至り、諸侯の功徳を考へて、之れを黜陟す、申甫は乃ち四岳の後裔なり、言ふこゝろは、崧然として高きものは、維れ四岳の山なり、其の山高大にして、上天に至る、維れ此の天に至るの大嶽、其の神靈の和氣を降して、以て四岳の後に福し、甫申二國に於て、賢智の人を生じ、周室の卿士楨幹の臣と爲る、四方の國患難あれば、往きて之れを禦ぎ、國の藩屏となり、四方の地恩澤至らざれば、往きて之れを宣へ、王化に霑はしむとなり、申甫は先世の人を指して言ふなり。

詩

毛

豐豐申伯。王績之事。于邑于謝。南國是式。王命召伯。定申伯之宅。登是南邦。世執其功。

豐々は勉なり、績は繼なり、上の于は往なり、謝は周の南國なり、式は法なり、召伯は召公なり、登は成なり、功は事なり、言ふこゝろは、豐々として徳を勉め、之れを行ひて倦まざる者は申伯なり、故に入りて王の卿士と爲る、王之れをして先世申伯の事を繼がしむ、乃ち往きて邑を謝の地に作り、南國の諸侯として、其の法制を施し、南方の國を統理せしむ、然れども申伯は忠臣にして、王室を離るゝことを欲せざるが故に、王、又召穆公に命じ、先づ謝邑を營み作り、申伯の往きて居るべきの處を定め、申伯をして之れに居りて、法度を南方の邦に施し、世々國を承け繼ぎて、其の政事を行ひ、之れを子孫に傳へしむとなり。

王命申伯。式是南邦。因是謝人。以作爾庸。王命召伯。徹申伯土田。王命傅御。遷其私人。

庸は城なり、徹は治なり、御は事を治むるの官なり、私人は家臣なり、言ふこゝろは、王既に召伯に命じて、申伯の居る所を定めしめ、又申伯に告ぐるに、申伯を謝邑に

毛

詩

封するの意を以てするなり、乃ち申伯に命じて曰はく、我れ汝をして法度を南方の國に施さしめんとす、故に謝邑の人に因りて、汝の國城を改め作らしむ、又召公に命じて曰はく、汝ち謝邑に往き、徒に申伯の居宅を營築するのみに非ず、又當に申伯國內の土田を治め、界畔を定め、賦税を正しくすべし、王、又事を治むる傅御の臣に命じて、申伯私家の臣、京師に在る者に命じ、申伯に従ひ、共に其の國に歸らしむとなり、是の時、召公未だ發せずして、京師に在りしなり、

申伯之功。召伯是營。有俶其城。寢廟既成。既成藐藐。王錫申伯。四牡躡躡。鈞膺濯濯。

俶は作なり、藐々は美なる貌、躡々は壯なる貌、鈞膺は馬のむながひなり、濯々は光明の貌なり、言ふことろは、申伯謝に居るの事は、召伯其事を營みて、謝邑の城郭を作り、又其の寢廟を作る、寢廟既に成りて、其の形藐々然として美麗なり、王、其の美なるを知り、將に申伯を遣らんとす、乃ち賜ふに四牡の馬を以てす、四牡の馬、躡々として強壯なり、又鈞膺を以て之れに賜ふ、鈞膺濯々として光明なり、

王遣申伯。路車乘馬。我圖爾居。莫如南土。錫爾介圭。以作爾寶。往近王

舅。南土是保。

乘馬は四馬なり、介圭は常の圭よりも大なり、近は語辭なり、王舅とは、申伯は宣王の舅なればなり、言ふことろは、王是に於て申伯を遣りて、國に就かしむ、故に大路の車、及び四馬を以て之れに賜ひ、且告げて曰はく、我れ汝の居る所を謀るに、南土謝邑の最も善きに如くはなし、汝宜しく往きて之れに居るべし、又特に汝に大圭を賜ふ、是れ宜しく汝の寶と爲すべし、既に其の物を賜ひ、又歎じて之れを送りて曰はく、往き去らんのみ、王の舅、當に南方の土を保ちて、之れに安居すべしとなり、

申伯信邁。王饒于郿。申伯還南。謝于誠歸。王命召伯。徹申伯土疆。以時其糗。式遄其行。

邁は行なり、饒は行くを送りて酒を飲ましむるなり、郿は地名なり、糗は糧なり、式は用なり、邁は速なり、言ふことろは、申伯初め王室を離るゝことを欲せず、然るに王より再三の命ありしを以て、心も開き解けて、信實に行かんとせしに由り、王、則ち酒を具へて之れを郿に送る、申伯則ち王命を受けて南に還り、誠實に謝邑に歸り、復京師を顧み慕はず、王、又是れより先きに召伯に命じ、申伯國土の疆内に就き、

其の國中より出す所の糧食を集めて、豫め申伯行旅の用に備へ、道に在りて不足なからしめ、申伯の行くことを速かならしむと、是れ王の申伯を優待するなり、

申伯番番。既入于謝。徒御嘽嘽。周邦咸喜。戎有良翰。不顯申伯。王之元舅。文武是憲。

番々は勇武の貌、嘽々は喜び樂むなり、周は徧なり、戎は汝なり、翰は幹なり、此の章申伯國に至るの事を言ふ、言ふこゝろは、申伯番々と勇武の貌ありて、既に謝邑に入る、其の徒歩する者、又車を御する者、皆嘽々と喜び樂む、謝邑の人、其の儀貌を見て、賢君なることを知り、國中徧く喜悅して、相賀して曰はく、汝今よりして大良事に幹たるの善き君を得たりと、申伯既に封邑を受けて、人民に悅ばるゝこと、此くの如し、實に光顯なりと謂ふべし、又申伯を歎美して曰はく、此れ王の長具なり、文人武人皆之れを以て表式として之れに法とり倣ふなりと、

申伯之德。柔惠且直。採此萬邦。聞于四國。吉甫作誦。其詩孔碩。其風肆好。以贈申伯。

吉甫は尹吉甫なり、肆は長なり、贈は増なり、此の章、申伯の事を美し、且詩を作るの

意を言ふ、言ふこゝろは、申伯の德、安順にして且正直なり、此の順直の德を以て、此の万邦不順の國を採服し、之れをして皆其の善に順はしむ、故に申伯の聲譽、四方の國に聞ゆ、申伯の德、實に大にして美なり、今吉甫是の誦を作り、樂人に命じて、之れを歌はしむ、其の詩の意、美大にして、其の風、亦極めて長く好し、申伯をして人の己れを美するを聞き、更に自ら強めて息まず、以て、其の徳行を増さしむとなり、按ずるに、此の章、誦と言ひ、又詩と言ひ、風と言ふ、三者別あり、誦とは歌ふべきの名、詩は則ち其の本篇の辭、風は則ち其の詞中の意なり、其風肆好とは、意思の深長なるを謂ふなり、

烝民

天生烝民。有物有則。民之秉彝。好是懿德。天監有周。昭假于下。保茲天子。生仲山甫。○仲山甫之德。柔嘉維則。令儀令色。小心翼翼。古訓是式。威儀是力。天子是若。明命使賦。○王命仲山甫。式是百辟。績戎祖考。王躬是保。出納王命。王之喉舌。賦政于外。四方爰發。○肅肅王命。仲山甫將之。邦國若否。仲山甫明之。既明且哲。以保其身。夙夜匪懈。以事一人。

○人亦有言柔則茹之剛則吐之維仲山甫柔亦不茹剛亦不吐不侮矜寡不畏彊禦○人亦有言德輶如毛民鮮克舉之我儀圖之維仲山甫舉之愛莫助之袞職有闕維仲山甫補之○仲山甫出祖四牡業業征夫捷捷每懷靡及四牡彭彭八鸞鏘鏘王命仲山甫城彼東方○四牡騤騤八鸞喈喈仲山甫徂齊式遄其歸吉甫作誦穆如清風仲山甫永懷以慰其心

此の詩古序に尹吉甫美宣王也とあり宣王能く賢徳の士に任じ伎能の人を使ひ賢能官職に在りて政事脩理し周室の中興するを美するなり

天生烝民有物有則民之秉彜好是懿徳天監有周昭假于下保茲天子生仲山甫

烝は衆なり物は事なり則は法なり彜は常なり懿は美なり仲山甫は樊國の君なり此の章仲山甫の生るゝことを言ふ言ふこゝろは天の衆民を生ずるや其の心性に事物の象あり情志に去就の法あらしむ既に此の靈明の氣を得て依る所あり故に民の執り持つ所常の道ありて美徳あるの人を好まざるとなし民の好む

所此くの如くなれば則ち天も亦民の好む所に従ふなり天乃ち周王政教の善惡を監るに其の政教の光明なると下民に施し至る天乃ち此天子宣王を愛し之を保んぜんが爲めに樊侯仲山甫大賢の人を生じ佐けて之を興さしむと也

仲山甫之徳柔嘉維則令儀令色小心翼翼古訓是式威儀是力天子是若明命使賦
嘉は美なり令は善なり訓は道なり若は順なり賦は布なり此の章仲山甫の徳を言ふ言ふこゝろは仲山甫の徳たる柔和にして美善維れ以て法則と爲すべし又其の動止の威儀を善くし其の容貌の顔色を善くし又慎みて其の心を小にし翼翼として恭敬なり其の性行既に此くの如し臣たるに至りては古言の善きものを以て法則となし朝廷に在りては爲る所の威儀を勉め官職に怠らず天子の善を爲す所に隨ひ其の善事を行ひ明王の政教を廣く天下に明かにし群臣をして之れを下に敷き施さしむとなり

王命仲山甫式是百辟績戎祖考王躬是保出納王命王之喉舌賦政于外四方爰發

毛

百辟は諸侯を指して言ふ、戎は大なり、喉舌とは冢宰を謂ふ、此の章、仲山甫の職を言ふ、言ふこゝろは、王、仲山甫に命して曰はく、汝長官と爲りて、其の法度を天下の諸侯に施すべし、是に於て諸侯繼ぎて汝の祖考を光大にし、又汝が王の身を奉承して安寧ならしむべしと、仲山甫既に命を受けて官と爲り、乃ち其の職事を施し行ふ、是に於て王の教命を出納し、王の言ふ所あれば、出でて之れを宣へ、下、爲ること有らんとすれば、納れて之れを陳し、王の咽喉口舌と爲りて、其の政教を議外の國に布き、政教明美にして、爲す所法度に合ひ、四方の諸侯、其の政令を被り、皆命のまゝに發して之れに應ずとなり、

肅肅王命。仲山甫將之。邦國若否。仲山甫明之。既明且哲。以保其身。夙夜匪解。以事一人。

肅々ば敬なり、將は行なり、若は順なり、若否とは猶臧否といふがごとし、善惡を謂ふなり、言ふこゝろは、肅々として尊嚴に畏敬すべき王の教命は、仲山甫能く之れを奉行し、邦國の諸侯に善惡あれば、仲山甫能く明かに之れを知る、王の教命は行ひ難く、諸侯の臧否は遠くして知り難し、而して之れを行ひ、之れを知る、是れ仲山

毛

詩

人亦有言。柔則茹之。剛則吐之。維仲山甫。柔亦不茹。剛亦不吐。不侮矜寡。不畏疆禦。

茹は食ふなり、此の章、人の常情を擧げて、仲山甫の常人に異なることを言ふ、言ふこゝろは、人亦俗に言へること有り、凡そ人の情、柔弱なる者に遇へば、侮りて之れを食ひ、堅剛なる者に遇へば、擲りて之れを吐き出だすと、維れ仲山甫は然らず、柔弱と雖も亦食はず、堅剛と雖も亦吐かず、矜寡孤獨の人を欺き侮らず、疆梁にして善を禦ぐの人をも畏れずとなり、

人亦有言。德輶如毛。民鮮克舉之。我儀圖之。維仲山甫舉之。愛莫助之。袞職有闕。維仲山甫補之。

輶は輕なり、儀は宜なり、愛は隱なり、袞は君の上服なり、袞職は即ち王職、王と言はずして、袞と言ふものは、王を指して言はず、猶天子を指して乘輿と曰ふがごとし、

言ふことろは、人亦俗に言へることあり、徳の微なること毛の如くにして、輕しと雖も擧げ難し、故に民能く之れを擧げ行ふこと鮮しと、我れ此の言を宜しとし、是れを圖り謀る、誰れか徳を行ふ者あらんと、唯仲山甫のみ、獨り能く此の徳を擧げて之れを行ふ、然れども其の徳義深遠にして隠れ、能く助けて之れを行ふ者なし、仲山甫既に人の助けなくして、獨り之れを行ふ、故に衰冕を服するの人に、其の職事廢缺することあれば、仲山甫能く之れを補ひ助くべしとなり、

仲山甫出祖。四牡業業。征夫捷捷。每懷靡及。四牡彭彭。八鸞鏘鏘。王命

仲山甫。城彼東方。

祖は出發するに臨み、道祖神を祀ることなり、業々は動くことの大なるなり、捷々は疾く速かなるなり、彭々は行く貌、鸞は馬の鈴なり、鏘々は鈴の音なり、言ふことろは、仲山甫既に王命を受けて、將に齊に適かんとし、國門を出で、祖道の祭りを爲し、正に車馬を陳ぬ、觀る者、其の四牡の業々と動きて高大なると、從ふ所の衆人捷々と敏にして事を樂むを見る、仲山甫は則ち其の從へる者を戒めて曰はく、爾等已に君命を受けたれば、須らく速に行くべし、若し人ごとに私を懷ひて相留ま

四牡騤騤。八鸞喈喈。仲山甫徂齊。式遄其歸。吉甫作誦。穆如清風。仲山甫永懷。以慰其心。

騤々は猶彭々のごとし、喈々は猶鏘々のごとし、遄は疾なり、穆は和なり、清風は清微の風にして、万物を養ふものなり、此の章、周人仲山甫の速かに歸らんことを欲し、并せて詩を作るの意を説く、言ふことろは、仲山甫、王命の四馬に乗り、騤々として壯健に、八鸞の聲、喈々として鳴る、仲山甫、此の車馬に乗りて、齊に往く、周人は仲山甫が此の壯健の車馬を用ゐて速かに歸らんことを望むなり、故に我れ吉甫此の詩を作り、其の人の性情を調和すること、清微の風、万物を養ふが如く、之れをして日に長益することあらしめんとす、仲山甫の遠く行きて、思ふ所多からんが爲めに、天意、王命盛徳大業を述べて、其の心を安んむ慰むとなり、

韓奕

奕奕梁山。維萬甸之。有倬其道。韓侯受命。王親命之。續我祖考。無廢朕命。夙夜匪解。虔共爾位。朕命不易。榦不庭方。以佐戎辟。○四牡奕奕。孔脩且張。韓侯入覲。以其介圭。入覲于王。王錫韓侯。淑旂綬章。簞茀錯衡。玄衮赤舄。鉤膺鏤錫。韞鞞淺幟。條革金厄。○韓侯出祖。出宿于屠。顯父餞之。清酒百壺。其殺維何。魚鼈鮮魚。其藪維何。維筍及蒲。其贈維何。乘馬路車。邊豆有且。侯氏燕胥。○韓侯取妻。汾王之甥。蹶父之子。韓侯迎止。于蹶之里。百兩彭彭。八鸞鏘鏘。不顯其光。諸娣從之。祁祁如雲。韓侯顧之。爛其盈門。○蹶父孔武。靡國不到。爲韓媾相。攸莫如韓。樂孔樂韓。土川澤訃。訃魴鰕甫甫。麀鹿嘯嘯。有熊有羆。有貓有虎。慶既令居。韓媾燕譽。○溥彼韓城。燕師所完。以先祖受命。因時百蠻。王錫韓侯。其追其貊。奄受北國。因其伯。實墉實壑。實畝實藉。獻其貔皮。赤豹黃羆。

此の詩古序に尹吉甫美宣王也とあり宣王能く韓侯を賞し命じて侯伯と爲す尹吉甫之れを美して此の詩を作りしなり

毛

詩

奕奕梁山。維萬甸之。有倬其道。韓侯受命。王親命之。續我祖考。無廢朕命。夙夜匪解。虔共爾位。朕命不易。榦不庭方。以佐戎辟。

奕々は大なり、甸は治なり、倬は明かなる貌、韓は國の名、戎は大なり、虔は固なり、共は執なり、庭は直なり、戎辟は汝の君といふことなり、言ふこゝろは、此の奕々として高大なる梁山、其の旁の野は堯の時洪水の災あり、大禹之れを治め、水災を除き、平田と爲したる處にして、貢賦を天子に奉れり、今其の地に大禹の功を復し、倬然として其の徳を著明にする者は韓侯なり、韓侯此の明德を以て、天子の命を受け、侯伯と爲る、王親ら之れに命じて曰はく、汝當に其の祖考の舊職を繼ぎて、之れを大にすべし、今復侯伯と爲りて、以て先祖に繼ぐ、朕が敎命を廢て、用ゐざることもなく、其の職に在るや、當に蚤に起き、夜はに臥して、少しくも懈らず、心を用ゐること堅固にして、侯伯たるの職位を執りて失ふこと勿るべし、又朕が命ずる所を改め易ふ可らず、不直にして法度に違ふ者あらば、楨榦として之れを正し、此れを以て汝が大君の天子を輔佐すべしとなり、汝が君とは、王自ら言ふなり、

四牡奕奕。孔脩且張。韓侯入覲。以其介圭。入覲于王。王錫韓侯。淑旂綬章。

毛

詩

章。簞。菲。錯。衡。支。袞。赤。舄。鉤。膺。鏤。錫。鞞。鞞。淺。幘。條。革。金。厄。

脩は長なり、張は大なり、覬は見なり、淑は善なり、旂は交龍を畫きたる旗なり、綏章は鳥の羽或は旄牛の尾等を以て、旂竿の首につけ、表章とするものなり、簞、菲はぬりあじろの車のかきなり、錯、衡は文飾を爲したる馬のくびき、玄、袞は黒地に袞龍を畫きたる服なり、赤、舄は赤色の屨なり、鉤、膺は馬のむながひなり、鏤、錫は金にほりて馬の額に當つるものなり、鞞、鞞は革にて作り、車中にて依りかゝるものなり、淺は虎の皮なり、淺、幘は虎の皮を以て賦を覆ふものなり、鞞、革はたづななり、たづなの端に金環を附け、其の形、蓋の如し、之れを金厄と謂ふ、言ふこゝろは、四牡の馬奕々として、其の形甚だ長く、且高大なり、韓侯之れに乗り、將に入りて天子に朝覬せんとす、既に行きて京師に到る、乃ち其の執る所の大圭を以て、入りて覬禮を行ひて、王に見ゆ、王是に於て淑、旂、綏、章以下の諸物を韓侯に賜ひたりとなり、
韓侯出祖。出宿于屠。顯父餞之。清酒百盃。其殺維何。魚鼈鮮魚。其歎維何。維筍及蒲。其贈維何。乘馬路車。籩豆有且。侯氏燕胥。
祖は將に去らんとして道祖神を祭ることなり、屠は地名なり、顯父は顯徳ある者

毛

詩

毛

詩

を指して言ふ、魚鼈は煮たる鼈、菹は菜茹の總名、蒲はがまのわかばなり、侯氏は諸侯を指す、且は多き貌なり、胥は皆なり、此の章、韓侯天子の賜ものを受けて將に歸らんとし、道に在りて之れを送ることを言ふ、言ふこゝろは、韓侯京師の門を出で、祖道の祭りを爲し、祭り訖りて、將に出で、屠に宿せんとす、祖道の時、王、卿士の顯徳ある人に命じ、酒を以て之れを送らしむ、其の清美の酒多きこと、百盃に至る、韓侯を愛して、酒を送るの多きなり、此の時、送別の燕に於て、其の殺は何物ありやと云へば、則ち魚鼈と鮮魚の膾にして、其の菹菜の物は、竹筍と蒲のわかばあり、但酒を以て之れを送るのみならず、又物を以て之れに贈る、乃ち乗る所の四馬と、駕する所の路車とあり、王、厚意を以て、特に之れを贈るなり、其の時盛る所、脯醢の籩豆、且然として多く、其の京師に在りて、未だ去らざるの諸侯、是に於て飲燕し、皆韓侯を愛し、共に來りて之れを送るとなり、
韓侯取妻。汾王之甥。蹶父之子。韓侯迎止。于蹶之里。百兩彭彭。八鸞鏘鏘。不顯其光。諸娣從之。祁祁如雲。韓侯顧之。爛其盈門。
汾は大なり、蹶父は卿士なり、里は邑なり、不顯は顯なり、諸娣は衆妾なり、祁々は徐

かに行く親如雲は衆きを謂ふなり、願之とは親迎して既に妻の父母より女を受け、門を出で、車に升り、綏を授くるときに願み道びくの禮あるを謂ふ、此の章、韓侯の妻を娶ることを言ふ、言ふころは、韓侯の妻を娶るや、尊大なる天王の外甥、乃ち卿士、厥父の子女を娶り、韓侯自ら之れを彼の厥父の邑里に迎ふ、其の迎ふるの時、則ち百兩の車ありて、彭々然として行き、車ごとく皆八鸞の聲ありて、鑿々然として、鳴れり、車馬の盛んなる、禮の備ること、此くの如し、其の禮の光榮あること、顯かなりと謂ふべし、其の妻、厥父の門より出づ、諸娣之れに従ふもの、其の行くこと、徐々として、雲の衆多なるが如し、韓侯車に上り、女に綏を授け、禮を以て願みて、之れを道びく、其の鮮明燦爛として、厥父の門に滿つるを見るとなり、

厥父孔武。靡國不到。爲韓姑相收。莫如韓樂。孔樂韓土。川澤訶訶。魴鱖

甫甫。麀鹿嘒嘒。有熊有羆。有貓有虎。慶既令居。韓姑燕譽。

姑は厥父の姓なり、訂々は、大なり、甫々は、大なり、嘒々は、衆多なる貌なり、言ふころは、厥父の人と爲り、甚だ武健にして、王の爲めに天下に使ひし、國として到らざる所なし、其の女、韓侯の夫人、姑氏の爲めに居るべき伎を擇み見るに、韓國の最も

樂しく、土地饒かに物産多きに如くものなし、甚だ樂しきかな、韓の土地たるや、川澤は寛大にして、魴鱖の魚の大なるあり、麀鹿多く、其の他熊羆貓虎等の諸獸を産す、厥父既に韓の國土を善しとし、韓姑をして嫁して之れに居らしむ、韓姑則ち之れに安んじ、其の婦道を盡して顯かなる譽れありとなり、

溥彼韓城。燕師所完。以先祖受命。因時百蠻。王錫韓侯。其追其貊。奄受

北國。因其伯。實墉實壑。實畝實籍。猷其緄皮。赤豹黃羆。

溥は大なり、燕は安なり、師は衆なり、追貊は戎狄の國なり、奄は撫なり、籍は税なり、緄は猛獸なり、此の章、韓侯既に賜ものを受け、國に歸りて政を行ふことを言ふなり、言ふころは、大いなる彼の韓國の城は、乃ち古昔平安なりし時、天下衆民の築き完くする所、之れを有すること已に久し、此の韓侯の先祖、嘗て王命を受けて、一州の侯伯と爲り、既に州内の國を治め、又時を以て、百蠻の國より朝貢せしめ、貢獻往來等に常度あらしめたりしを以て、故に宣王、今又韓侯に北方の地、追貊の夷狄を賜はり、先祖の舊職を復して、夷狄を撫安せしむ、韓侯是に於て、其の州内絶え滅びし國を興し、更に高く其の城を築き、深く其の壑を掘り、田畝を正し、税籍を定め、皆

故の如くならしめ、又百蠻追豹の國をして、貔獸の皮及び赤豹黃熊の皮を献せしむ、韓侯舊法に依りて、總べて之れを領すとたり、

江漢

江漢浮浮。武夫滔滔。匪安匪遊。淮夷來求。既出我車。既設我旗。匪安匪舒。淮夷來鋪。○江漢湯湯。武夫泱泱。經營四方。告成于王。四方既平。王國庶定。時靡有爭。王心載寧。○江漢之滄。王命召虎。式辟四方。徹我疆土。匪疚匪棘。王國來極。于疆于理。至于南海。○王命召虎。來旬來宣。文武受命。召公維翰。無曰予小子。召公是似。肇敏戎公。用錫爾祉。○釐爾圭瓚。秬鬯一卣。告于文人。錫山土田。于周受命。自召祖命。虎拜稽首。天子萬年。○虎拜稽首。對揚王休。作召公考。天子萬壽。明明天子。令聞不已。矢其文德。洽此四國。

此の詩、古序に尹吉甫美宣王也とあり、宣王は厲王衰亂の後を承け、能く衰へたるを興し、亂れたるを治め、召公に命じて、淮夷の王命に従はざるを伐ち平らげしむ、故に尹吉甫、此の詩を作りて、之れを美するなり、

江漢浮浮。武夫滔滔。匪安匪遊。淮夷來求。既出我車。既設我旗。匪安匪舒。淮夷來鋪。

浮々は衆くして強大なる貌なり、滔々は廣大の貌なり、淮夷は東國淮水の涯りに在りて、東夷の行ひを爲す者なり、來は助辭なり、鋪は病なり、言ふこゝろは、宣王の時、淮夷皆叛す、王是に於て、江漢の水、浮々として合流するの處に至り、親ら其の將帥勇武の夫、滔々として廣大なる者に命じ、此の東流に順ひて、以て行きて之れを征伐せしむ、武夫既に王命を受けて、急に其の事に趨く、敢て須臾も安んぜず、須臾も遊ばず、然る所以のものは、淮夷を求めて之れを討伐せんが爲めなり、既に淮夷の境に至れば、期日を定めて、將に戦はんとす、其の期に至れば、已に我が征伐の戎車を出だし、既に我が將帥の旗幟を設け、又敢て自ら安んぜず、敢て寛舒せず、然る所以のものは、淮夷を討ちて、之れを病ましめんが爲めなり、

江漢湯湯。武夫泱泱。經營四方。告成于王。四方既平。王國庶定。時靡有爭。王心載寧。

湯々のは水盛んなる貌、泱々のは武き貌なり、此の章、戦に勝つゝの事を言ふ言ふこゝろ、

ろは、王始め江漢の水湯々として盛んに流るゝ處に於て、此の勇武なる將帥の夫、洗々として壯武なる者に命じ、之れをして淮夷を征伐せしむ、今既に伐ちて之れに克ち、又戰勝の威を以て、四方の國を經營し、服せざるものあれば、則ち從ひて之れを伐ち、克つ所あるごとに、車馬を以て、急使を發し、其の成功を宣王に告げしむ、召公既に人をして告げしめ、又自ら其の事を言ひて曰はく、今四方既に平服し、王國の内幸に安定なるに庶く、時に王命に戻りて争ふ者あるなければ、我が王の心、是に於て則ち安寧ならんと、王、四方の服せざるを以ての故に、己れを遣りて征伐せしむ、今王の國既に定まる、冀はくは王の心永く安からんとの意にして、召公自ら其の志を述べしなり、

江漢之滸。王命召虎。式辟四方。徹我疆土。匪疚匪棘。王國來極。于疆于理。至于南海。

召虎は召穆公なり、滸は水涯なり、式は法なり、疚は病なり、棘は急なり、極は中なり、于疆于理の于は往なり、言ふことろは、王、江漢の水涯に在りて、親ら召虎に命じて曰はく、汝當に王法を以て四方の國を開闢し、叛く者あらば、皆之れを征して服せ

王命召虎。來旬來宣。文武受命。召公維翰。無曰予小子。召公是似。肇敏戎公。用錫爾祉。

旬は徧なり、召公は召康公なり、似は嗣なり、肇は謀なり、敏は疾なり、戎は大なり、公は事なり、王、召公の功成りしを以て、將に之れを賞せんとす、此れ其の之れに命ずるの言を陳ぶるなり、言ふことろは、王、召虎に命じて曰はく、汝徧く四方を服するに勞し、王命を宣揚するに勤む、其の功の實に大なる、我れ悉く之れを知れり、因て又之れを勸めて曰はく、昔し我が先王文王武王命を受くるの時、汝の先君召康公、

維れ王室の楨幹と爲り、以て天下を匡正したり、汝も亦當に康公の業を繼ぎ、勞を
憚る可らず、汝予が小子なるを以て、文武の業を繼ぐに足らずと言ふこと勿れ、汝
も當に勉めて乃祖康公の功を嗣ぐべきなり、我れ汝が敏大の功あるを圖る、是を
以ての故に、汝に福祚を賜ふとなり、

釐爾圭瓚。秬鬯一卣。告于文人。錫山土田。于周受命。自召祖命。虎拜稽
首。天子萬年。

釐は賜なり、圭瓚は圭柄の玉瓚なり、鬯鬯の酒を酌む杓なり、秬は黑黍なり、鬯は香
草なり、黑黍の酒に和して芬香あるを鬯鬯と曰ふ、卣は器なり、文人は文徳あるの
人なり、言ふこゝろは、王、召虎に命じて曰はく、今爾に圭柄の玉瓚、及び秬米の酒、芬
香あるもの一卣を賜ふ、汝當に之れを受けて、以て汝の先祖文徳あるの人に告げ
祭るべしと、此の時に於て、又之に賜ふに山川土田を以てし、故時より大ならしむ、
召虎是に於て岐周の地に往き、王の此の命を受く、王乃ち召虎の祖康公命を受く
るの禮を用ゐて之れに命ず、虎既に命を受け、拜して稽首す、曰はく、臣、君の恩を受
くること多しと雖も、以て之れに報ずることなし、願はくは君をして萬年の壽を

得せしめんとなり、

虎拜稽首。對揚王休。作召公考。天子萬壽。明明天子。令聞不已。矢其文
德。洽此四國。

對は遂なり、考は成なり、明々は勉むるなり、矢は施なり、言ふこゝろは、召虎既に王
の賜ものを受け、今復之れを謝す、乃ち拜して稽首し、遂に王の徳の美なるを稱揚
し、先祖召康公、王命に對して事を成すの辭を作りて曰はく、天子をして萬年の壽
を得せしめん、又此の明々と勉むる所の天子をして、永く善き聲聞ありて、已むと
きあらざらしめ、又其の天地を經緯するの文徳を布き施して、洽く此の天下、四方
の國を治めしめんとなり、

常武

赫赫明明。王命卿士。南仲大祖。大師皇父。整我六師。以修我戎。既敬既
戒。惠此南國。○王謂尹氏。命程伯休父。左右陳行。戒我師旅。率彼淮浦。
省此徐土。不留不處。三事就緒。○赫赫業業。有嚴天子。王舒保作。匪紹
匪遊。徐方繹騷。震驚徐方。如雷如霆。徐方震驚。○王奮厥武。如震如怒。

進厥虎臣。闕如虓虎。鋪敦淮濱。仍執醜虜。截彼淮浦。王師之所。○王族
暉暉如飛。如翰如江。如漢如山。之苞如川。之流。縣縣翼翼。不測不克。濯
征徐國。○王猶允塞。徐方既來。徐方既同。天子之功。四方既平。徐方來
庭。徐方不同。王曰還歸。

此の詩古序に召穆公美先王也とあり宣王の時淮北の徐夷起りて淮南の地を亂
る宣王六軍に將として之れを伐ち平らぐ召穆公因て此の詩を作りて宣王を美
するなり常武の字詩中に見えず小序に有常德以立武事と云ひて武の常にす可
らざるの義を以て之れを解せり

赫赫明明。王命卿士。南仲大祖。大師皇父。整我六師。以修我戎。既敬既
戒。惠此南國。

赫々は盛んなるなり明々は察なり言ふことろは赫々として顯盛に明々として
昭察する者は宣王なり宣王を以て盛察とするものは王今大祖の廟に於て卿士
南仲に命じ之れをして元帥たらしめ又皇父に命じて大師たらしめ之れをして
六軍の衆を監督し我が甲兵の事を修めしむ既に敬して事々に心を用ゐ既に戒

めて慢り縱まゝなることなく戰に臨むとも意を留めて此の南方の民を惠み憐
むべしとなり

王謂尹氏。命程伯休父。左右陳行。戒我師旅。率彼淮浦。省此徐土。不留
不處。三事就緒。

尹氏は尹吉甫なり命とは策書を以て命ずるを謂ふ程は畿内の邑伯は爵なり休
父は字なり三事は國の三卿なり言ふことろは王其の内史大夫尹氏に謂ふ汝當
に策書を爲り此の程國の伯字は休父といふ者に命じ之れをして大司馬の卿た
らしむべし即ち命ずる所の意を言て曰はく今軍を出だすの時此の司馬をして
陳行に左右して士衆を戒め命を用ゐざる者は斬りて之れを徇へ往きて彼の淮
の浦涯に循ひ此の徐の國土を省察し叛逆する者あれば從ひて之れを討じ又豫
め徐土の人に告ぐるに我が兵の來ることを以てすべし且云へ我が軍久しく此
に留り居らず直ちに叛逆の君を誅し汝が爲めに三有事の臣即ち國の三卿を立
て其の事業に就かしめ速に大衆を還すが故に驚怖すること勿れとなり

赫赫業業。有嚴天子。王舒保作。匪紹匪遊。徐方繹騷。震驚徐方。如雷如

震。徐方震驚。

赫々は盛なり、業々は動なり、舒は徐なり、保は安なり、繹は陳なり、騷は動なり、言ふことろは、王の軍進み行く、赫々として盛んに、業々として動く、嚴然として威武なるの天子あり、此れを以て往きて徐國の君を征伐す、乃ち徐々として安行し、急疾の行を爲さず、徐行すと雖も、又敢て之れに繼ぐに敖遊の事を以てするに非ず、而して王師の將に至らんとするを見るや、徐方の險を守る者、之れを畏れ、陳り騒ぎて逃る、王師是に於て其の擾動に乗じて、之れを震驚せしむるに、雷の聲を發するが如く、震の奮ひ撃つが如きの威を以てす、徐方の國、遂に其の震驚に勝へずして、將に罪に服せんとすとなり、

王奮厥武。如震如怒。進厥虎臣。闕如虓虎。鋪敦淮濱。仍執醜虜。截彼淮浦。王師之所。

闕は奮ひ怒る貌、虓は虎の怒りなり、鋪は兵を布きて陳列するなり、敦は屯なり、濱は涯なり、仍は就なり、截は治なり、言ふことろは、王既に徐に至り、其の威武を奮ふこと、其の狀天の震雷の如く、其の聲人の怒るが如く、即ち進みて其の虎臣の將を

前め、闕然として愾怒する虎の如く、淮水の濱りに陣を布き、兵を屯し、敵に臨みて降服する所の虜を執らへ、既に其の根本を敗り、又其の枝葉を窮め、因て復人をして彼の淮浦の旁、有罪の國を治め、皆執らへて之れを送り、王師の所に就きて、誓言を聽かしめ、悉く、其の黨類を得ることなり、

王旅暉暉。如飛如翰。如江如漢。如山之苞。如川之流。縣縣翼翼。不測不克。濯征徐國。

暉々は盛なり、翰は飛ぶこと、疾きなり、苞は本なり、縣々は靜なり、翼翼は敬なり、濯は大なり、言ふことろは、王の師旅已に淮夷を経ると雖も、其の盛んなること、暉々然として餘力あり、其の行くこと、疾きは、鳥の飛ぶが如く、其の敵に赴くの速かなるは、鷺鳥の翰つが如く、其の軍の衆多なるは、江の廣きが如く、漢の大なるが如く、其の固く守りて動かす可らざるは、山の基本の如く、其の往き戦ふに至りては、禦く可らざること、川の流れ逝くが如く、其の行くや縣々として靜かに、暴掠を行はず、翼翼として敬み、各其の事を司とる、其の形勢測る可らず、克つ可らず、此の嚴威の武力を以て、將に大に往きて此の徐國を征せんとすと、其の盛んにして當

る可らざるを謂ふなり。

王猶允塞。徐方既來。徐方既同。天子之功。四方既平。徐方來庭。徐方不
同。王曰還歸。

猶は謀なり、來庭は王庭に來るなり、回は違なり、言ふころは、王師の盛んなるこ
と、既に此くの如し、而して又王の謀慮、信にして誠實、兵を用ゐると常あり、故に兵
未だ戰はずして、徐方既に自ら來り、其の罪に服す、又他國の徐方と同じく來り服
するものは、是れ天子の功、之れをして然らしむるなり、又四方既に平定し、徐方亦
來りて王庭に在れば、則ち是れ天下治平にして、須らく武を用ゐるべからず、徐方
の先きに叛く者、已に敢て命に違はざれば、則ち復事あることなし、王乃ち之れに
告げて曰はく、以て還歸すべしと、是れ武事の成れるを述べて之れを美するなり、

瞻 卬

瞻卬昊天。則不我惠。孔填不寧。降此大厲。邦靡有定。士民其瘵。蠹賊蠹
疾。靡有夷屆。罪罟不收。靡有夷瘳。○人有土田。女反有之。人有民人。女
覆奪之。此宜無罪。女反收之。彼宜有罪。女覆說之。哲夫成城。哲婦傾城。

○懿厥哲婦。爲梟爲鷂。婦有長舌。維厲之階。亂匪降自天。生自婦人。匪
教匪誨。時維婦寺。○鞠人忮忒。諧始竟背。豈曰不極。伊胡爲慝。如賈三
倍。君子是識。婦無公事。休其蠶織。○天何以刺。何神不富。舍爾介狄。維
予胥忌。不弔不祥。威儀不類。人之云亡。邦國殄瘁。○天之降罔。維其優
矣。人之云亡。心之憂矣。天之降罔。維其幾矣。人之云亡。心之悲矣。○瞻
沸檻泉。維其深矣。心之憂矣。寧自今矣。不自我。先不自我。後藐藐昊天。
無不克鞏。無忝皇祖。式救爾後。

此の詩古序に凡伯刺幽王大壞也とあり、此の詩と、召曼の詩とを、幽王の變大雅と
曰ふ、此の詩は、幽王褒姒を寵し、奄人を用ゐて亂を致せるを刺るなり、

瞻卬昊天。則不我惠。孔填不寧。降此大厲。邦靡有定。士民其瘵。蠹賊蠹
疾。靡有夷屆。罪罟不收。靡有夷瘳。

首を擧げて視るを瞻と曰ひ、首を傾けて望むを卬と曰ふ、昊天は王を指して言ふ、
昊天とは、元氣昊然として廣大なるを謂ふなり、惠は愛なり、填は久なり、厲は惡也
り、瘵は病なり、蠹賊は穀物を害する蟲、蠹疾は蟲害の狀なり、夷は常なり、罪罟は故

らに罪を設けて罟を作り、人をして犯し易からしめ、網を設けて鳥獸を待つが如きを謂ふ、瘡は愈なり、言ふこゝろは、仰ぎて此の昊天王者の政を爲すを視るに、曾て恩惠を我が民に施さず、若し我が民を愛せば、當に善政を以て之れを安んずべきに、天下の安からざること已に久し、此の大惡の政を降して、之れを敗り亂る、又其の惡政の狀を説きて曰はく、王の政事暴虐にして、天下騷擾し、邦定まり安んずるものなし、士卒と民と皆病み勞れ、政事の殘酷なること、蝨賊の蟲、禾稼を害するが如くなれば、邦の亂窮り止むことなく、其の民を殺害するは、則ち刑罪を施して、天下を網羅し、一般に罟を設けて之れを收むることあらず、故に土民の病む者瘳ゆることなきなりと。

人有土田。女反有之。人有民人。女覆奪之。此宜無罪。女反收之。彼宜有罪。女覆說之。哲夫成城。哲婦傾城。

覆は反なり、收は拘ふるなり、説は赦なり、哲は知なり、城は猶國といふがごとし、言ふこゝろは、小人寵を待みて、惡を恣まゝにし、諸侯卿大夫等、天子より賜はりたる土田あれば、汝反りて之れを削り、以て己れが有と爲す、又民人は諸侯卿大夫の有

ちて治を爲すものなるに、汝反りて之れを奪ふ、且罪なき者を執らへて、之れを罪し、罪あるべき者をば、反りて之れを赦す、即ち前章に謂ふ所の蝨賊罪罟なり、而して其の此れを致すものは、首として婦人に由るのみ、男子の知ある者は、能く國を守り、城を成すと雖も、婦人の知多き者、國家の政事に預るときは、國を破り、城を傾くるとなり、此の哲婦は、褒姒を指して言ふなり。

懿厥哲婦。爲梟爲鴟。婦有長舌。維厲之階。亂匪降自天。生自婦人。匪教匪誨。時維婦寺。

懿は痛傷する所あるの聲なり、懿と噫と字異なれども、音義同じ、噫は心に平かならざる所ありて聲を爲すなり、梟はふくろう、不孝の鳥なり、鴟はみづく、其の頭猫の如く、夜中飛びて其の聲呼ぶが如く、笑ふが如し、寺は侍なり、王の傍に侍し近づく者を謂ふ、言ふこゝろは、傷ましいかな哲婦、梟鴟の如く、其の言善なるものなし、婦人の長舌にして、言語の多きは、禍亂の階にして、例へば道の絶えたる所へ、階梯を作りて登るが如し、此の亂を生ずること、天より降るに非ず、婦人より生ずるなり、又別に王に教へて亂を爲さしむる者あるに非ず、唯褒姒を近づけて其の言

を用ゐるが故なりと。

鞠人伎忒。諧始竟背。豈曰不極。伊胡爲慝。如賈三倍。君子是識。婦無公事。休其蠶織。

鞠は窮なり、伎は害なり、忒は變なり、諧は愬なり、竟は終なり、胡は何なり、慝は惡なり、上に長舌の惡しきことを言ひ、此の章更に惡を爲すの狀を説く、言ふこゝろは、婦人の多辯にして謀慮ある者は好みて人の言語を屈し、人を害ひ傷ることを欲し、變化常なくして、其の始めや、其の人を愬へ、其の終りや、又從ひて之れに背く、蓋し其の好惡常なく、口の出だす所に任するのみ、豈肯て我が言中正ならずと曰はんや、賈ものゝ三倍、即ち物を賣りて利の多きは、小人の知る所にして、君子の賤む所なり、然るに君子の人反りて之れを知る、婦人は内事を務めて公事に與かること勿るべきに、今其の職とする所の蠶を養ひ、若くは布を織ることを休めて、朝廷の政事に預るは、亦宜しきに非ざるなりと、天子にも藉田といふことありて、孟春の日に自ら耕し給ふの禮あり、婦人にも天子諸侯皆蠶室ありて、夫人世婦の吉なる者を卜し、蠶室に入りて、蠶を養はしめ、絲既に成れば、之れを染めて、君の祭服の

詩

毛

料を織るなり、故に此に蠶織の事を言ふなり、

天何以刺。何神不宥。舍爾介狄。維予胥忌。不弔不祥。威儀不類。人之云亡。邦國殄瘁。

天は幽王を指して言ふ、刺は責なり、宥は福なり、狄は遠なり、介狄は久遠の道なり、忌は怨なり、類は善なり、殄は盡なり、瘁は病なり、言ふこゝろは、幽王の政既に惡しきことなれば、何を以て之れ責めんや、何の神か王に福せざらんや、然るに王は久遠の大道を舍て、予れと相怨むや、其の怨むは、予の忠言を怨むなり、王の政を爲すこと善ならざれば、天より弔せられずして、不祥を國家に降され、威儀亦善ならざるが故に、群臣怨みて皆他國に奔り、天下悉く困み病まんとなり、

天之降罔。維其優矣。人之云亡。心之憂矣。天之降罔。維其幾矣。人之云亡。心之悲矣。

優は渥なり、幾は危なり、上章賢人の將に去らんとすることを言ふ、此の章又其の憂ふべきの狀を言ふなり、言ふこゝろは、天より災異の網を降だすこと優渥にして、多し賢人皆將に亡げ去らんとすと云ふ、天下の人心、之れが爲めに憂ふるなり、

毛

詩

天より災異の網を降だすこと、危険にして甚だし賢人皆將に亡げ去らんとすと云ふ、天下の人心之れが爲めに悲むとなり、

鬻沸檻泉。維其深矣。心之憂矣。寧自今矣。不自我先。不自我後。藐藐昊天。無不克鞏。無忝皇祖。式救爾後。

鬻沸は泉の沸く貌、檻泉は正しく出で、涌きのぼるなり、藐々は大なる貌、鞏は固なり、式は用なり、後は子孫を謂ふなり、言ふことろは、沸然として正しく下より沸き出づるの泉は、其の源を發すること、深くして遠し、我が心の憂ひ、今日より然るに非ず、従ひ來る所遠し、此の憂ひの我が未だ生れざる先きにも非ず、又我が死せし後にも非ずして、正に此の時に當る、人力之れを如何ともすることなし、藐々たる昊天、壞れ亂ると雖も、亦能く堅固ならざるなし、王者美大の徳あれば、其の位を鞏固にすること能はざらんや、王能く行ひを改め、過ちを悔い、徳を脩め、賢に任じ、皇祖を忝かしむることなければ、天意尙回すべく、用ゐて汝が後世子孫を救ひ、之れをして王位を保ち、邦家を喪ふこと莫からしむべしとなり、皇祖は文王を指すなり、文王は大姒を以て興り、幽王は褒姒を以て滅ぶるなり、

詩

毛

召 旻

旻天疾威。天篤降喪。瘝我饑饉。民卒流亡。我居圉卒荒。○天降罪罟。黷賊內訌。昏椽靡共。潰潰回遘。實靖夷我邦。○臯臯訛訛。曾不知其玷。兢兢業業。孔填不寧。我位孔貶。○如彼歲旱。草不潰茂。如彼棲苴。我相此邦。無不潰止。○維昔之富。不如時維。今之疚。不如茲。彼疏斯粝。胡不自替。職兄斯引。○池之竭矣。不云自頻。泉之竭矣。不云自中。溥斯害矣。職兄斯弘。不裁我躬。○昔先王受命。有如召公。日辟國百里。今也日蹙國百里。於乎哀哉。維今之人。不尙有舊。

毛

詩

此の詩、古序に凡伯刺幽王大壞也とあり、昊は閔なり、天下召公の如き臣なきを閔むなり、大壞とは、天下の事大に壞れて、復爲す可らず、宗周終に滅ぶるを見るなり、小雅は若之華何草不黃の詩に終り、大雅は瞻卬召旻の詩に終る、皆悲惋悽切にして、亡國の音なり、昔し周道興りて召南作る、今周將に亡びんとす、故に詩人召旻を思ひ、召旻を以て篇に命ずるなり、

旻天疾威。天篤降喪。瘝我饑饉。民卒流亡。我居圉卒荒。

毛

天は王を指して言ふ、疾は猶急といふがごとし、瘡は病なり、圍は邊垂なり、荒は虚なり、言ふこゝろは、昊天の王者其の政教を爲すこと急疾にして、此の威虐の法を行ひ、又篤く死喪の禍を降だし、我が民を病ましむるに饑饉を以てし、國中の民をして盡く流移して散亡せしむ、此の故に中國より四境の邊陲に至るまで、民皆逃れ去りて、盡く空虚となれり、是れ王の暴虐に由りて致す所なりと。

天降罪罟。蠹賊内訌。昏椽靡共。潰潰回遘。實靖夷我邦。

訌は潰なり、昏椽は昏亂椽輿の事にして、即ち内訌の實なり、潰々は亂なり、靖は謀なり、夷は平なり、言ふこゝろは、王暴亂を以て民を病ましめ、此の刑罰羅網の法を天下に降だし、諂佞の臣、又王を助けて殘酷の政を爲し、其の人を害すること、蠹賊の禾稼を害するが如く、内自から潰亂す、而して位に在る者、殘害侵削して、其の職事に共するなく、潰々として邪僻の行ひを爲し、王の國を滅ぼし平らげんことを謀るとなり。

皐皐譏譏。曾不知其玷。兢兢業業。孔填不寧。我位孔貶。

皐々は頑鈍にして道を知らざるなり、譏々は懶儒にして其の職事を務めざるなり、玷は缺なり、兢々は戒なり、業々は危なり、填は久なり、貶は墜なり、言ふこゝろは、小人位に在り、皐々然として頑鈍治道を知らず、譏々然として懶惰職事に供せず、心頑鈍にして力惰り、自ら以て宜しと爲し、王政已に壞れたれども、曾て其の大道の玷けたるを知らず、害天下に及ぶ、故に今時の人皆兢々として戒め懼れ、業々として危ぶみ恐れ、人心の安からざること已に久し、我が王の位、亦甚た墜つるとなり、蓋し政教行はれずして、諸侯と異なるなきを謂ふなり。

如彼歲旱。草不潰茂。如彼棲苴。我相此邦。無不潰止。

潰は遂なり、潰を以て遂と訓するは、猶亂を以て治と訓するがごとし、苴は草の枯れたるなり、潰は亂なり、止は語辭なり、言ふこゝろは、王の民に恩なきこと、天下の人をして彼の旱歳の草の申途盛茂することを得ず、樹上の枯草潤ひなきが如くならしむ、我れ此の王の邦國を見るに、亂れざることなからんとなり、其の後犬戎幽王を殺す、此の詩の言、信なりと謂ふべし。

維昔之富。不如時。維今之疚。不如茲。彼疏斯綽。胡不自替。職兄斯引。

替は廢なり、兄は茲なり、引は長なり、言ふこゝろは、維れ昔し明王の富ます所の者

詩

毛

詩

は當に富ますべき所を富まし、此の如く、小人を富ますことを爲さず、維れ今の疾
ましむるは、當に疾ましむべからざる所を疾ましむ、此の如きの賢人を疾ましめ
んとは思はざりしなり、其の賢者を疾ましむるに由り、小人進むことを得、彼の宜
しく精米を食ふべきの賢者、祿薄きが故に、疏米を食ひ、斯の疏米を食ふべきの小
人、却て精米を食ふ、汝小人、何ぞ自ら廢退し、賢者をして進むことを得せしめず、乃
ち茲に復亂を爲すの事を長かちしむるやとなり、

池之竭矣。不云自頻。泉之竭矣。不云自中。溥斯害矣。職兄斯弘。不裁我

躬。頻は涯な溥は遍なり、言ふところは、人池水の竭くるを見れば、外の滙涯より水

の之れを益すなきが故なりと云はざらんや、人泉水枯竭するを見れば、其の内の
地中、水の生ずるなきが故なりと云はざらんや、此の四句、政事の亂るは、外に賢
臣の之れを益するなく、内に賢妃の之れを輔くるなきに由るに喩ふ、今王内に賢
妃なく、外に賢臣なく、溥く此の内外助けなきの害あり、而して在位の小人、乃ち益
此亂を大にす、豈我が身に裁ひせざるを得んやとなり、

昔先王受命。有如召公。日辟國百里。今也日蹙國百里。於乎哀哉。維今
之人。不尙有舊。

辟は開なり、蹙は促なり、言ふところは、昔文王武王の天命を受け、王業を開くや、召
康公の如き賢臣あり、其の徳化の及ぶこと廣くして、日に國を辟くこと百里、今幽
王の時に至りては、之れに反して、日に國を削り、蹙めらるること百里、於乎哀きか
な、今の世と雖も、猶舊有徳の人あざらんや、假令ひ召公の如き人ありとも、王
之れを用ゐざることを嘆くなり、

周頌

頌は天子宗廟の樂歌なり、頌は容なり、頌容二字、古へ通用す、王者功成り、盛徳の形
容を美して、神明に告ぐ、其の辭從容悠遠なるを以て容と曰ふ、

清廟

於穆清廟。肅雝顯相。濟濟多士。秉文之德。對越在天。駿奔走在廟。不顯不承。無射於人斯。

此の詩古序に祀文王也とあり、此れより以下、思文まで十篇を清廟之什と曰ふ、
於には嘆する聲なり、穆は美なり、清廟は清明の徳ある人を祭るの官なり、廟は貌な
り、肅は敬なり、雝は和なり、相は助なり、濟々には多き貌、文徳とは文王の徳を指す、對
は配なり、越は於なり、駿は長なり、言ふこゝろは、於乎美なるかな、周公の清廟を祭
るや、其の祭りの禮義、既に内心に敬し、且外色に和らぐ、又諸侯明著の徳ある者來
りて祭りを助く、此の濟々たる衆多の士、皆文王の徳を執り行ひ、矢墜する所なく、
文王の精神、已に天に在り、此の衆士の行ひ、皆能く天に在せるの文王に配すと、乃
ち文王生時の行ひに順ふを謂ふなり、而して此の明著なる諸侯、威儀あるの衆士
と、長く奔走して、來りて文王の廟に在り、百世絶えざれば、則ち文王の徳、天に顯は
れ、人に承けられ、人に厭はるゝことなしとなり、

維天之命

維天之命。於穆不已。於乎不顯。文王之德之純。假以溢我。我其收之。駿惠我文王。曾孫篤之。

此の詩古序に太平告文王也とあり、文王命を受け、周邦を造立し、未だ太平に及ば
ずして崩じ、禮樂を制作すること能はず、成王の時に至り、周公政を攝し、文王の業
を繼ぎ、太平を致し、禮樂を制せんことを欲す、其の制作する所、皆文王の意なり、故
に太平の時を以て、文王に告ぐ、是れ其の樂歌なり、
純は大なり、假は嘉なり、溢は愼なり、收は聚なり、言ふこゝろは、維れ天の道、穆とし
て美なるかな、春行き夏來り、四時運行して息まず、鳥獸草木生々して極りなし、天
徳の美なること此くの如く、而して文王能く天心に當る、於乎顯かならざらんや、
文王の徳の大なる、此の嘉美の道を以て、我が子孫を戒愼し、其の道を行はしめん
と欲す、文王の意既に此くの如し、而して我が周公之れを聚めて以て典法を制し、
我が文王の意に順ひ、後世子孫に至るまで、世を重ねて厚く之れを行はしめんと
なり、

維清

維清緝熙。文王之典。肇禋迄用有成。維周之禎。

此の詩古序に奏象舞也とあり、象は文王の武功に象どりて作る所の樂舞なり、周公成王の時に至り、用ゐて之れを廟に奏せしなり、

緝熙は光明なり、典は法なり、肇は始なり、禋は祀りの名なり、迄は至なり、禎は祥なり、詩人既に太平にして象舞を奏するを見る、乃ち其の象どる所の事を述べて、功を文王に歸す、言ふこゝろは、今日清靜光明にして、敗亂の政なき所以のものは、乃ち文王征伐の法あるに由るなり、文王命を受け、始めて昊天を禋祀するの時、此の法を行ひて、紂の支黨を伐つ、故に武王之れを用ゐ、紂を伐ちて成功あり、天下清明を得るに至る、是れ此の征伐の法たる、周家天下を得るの吉祥なり、故に武王其の事を述べて、此の舞を制す、詩人其の奏を見て之れを歌ふなり、

毛 詩

烈文 辟公錫茲祉福。惠我無疆。子孫保之。無封靡于爾邦。維王其崇之。念茲戎功。繼序其皇之。無競維人。四方其訓之。不顯維德。百辟其刑之。於乎前王不忘。

此の詩古序に成王即政諸侯助祭也とあり、周公政を成王に歸すの明年、正月元日、新王政に即き、朝享の禮を以て廟に朝し、先祖を祀り、位を嗣ぐことを告ぐるなり、此の時諸侯君の祭りを助く、詩人此の歌を作りて戒めを述べしなり、

烈は光なり、惠は順なり、封は大なり、靡は累なり、崇は立なり、戎は大なり、皇は美なり、競は疆なり、訓は道なり、前王は武王なり、成王位に即き、先づ朝享の禮を以て偏く群廟を祭り、己れ位を嗣ぐことを告げ、祭りの末に於て、諸侯を戒め、祭り畢りて、更に禮を以て文王武王を文王の廟に禘祭し、以て周公を封ずることを告げしなり、成王祭りの末に於て、諸侯を呼びて、之れを戒めて曰はく、汝等是の光明の文章ある辟公よ、我が先君文王、汝に賜ふに此の祉福を以てするなり、爾諸侯能く我が命に順ひ、盡き止むの時なければ、則ち子孫世々此の位を保ち守るとを得べし、又武王紂を伐つ、の後、舊國は皆削滅せらるべきなれども、我が武王、汝が奮く君たるを見るに、誠に汝の國に大なる累ひを爲さざるが故に、其の封に就きて、之を立てたり、我が文王武王、汝が先人を愛すること此くの如し、汝當に先人の大功を念ひ、父祖に繼ぎて、職を守り、政を美にすべし、又之れが爲めに武王の徳を陳べて曰は

毛 詩

賢人を得れば國疆し、四方服せざる者あれば、其れ之れを道びかしむべし、天下の諸侯、皆其の道びく所に隨ふなり、務めて其の徳を明かにせざらんや、其の身正しければ、百辟卿士皆其の爲す所に注るなり、武王の道至て美なり、於乎我が前王武王の道、忘る可らざるなりと、之れに示すに、武王の道を以てし、法りて之れを行はしめんとするなり、

(九五〇)

天作

天作高山、大王荒之、彼作矣。文王康之、彼徂矣。岐有夷之行、子孫保之。

此の詩、古序に祀先王先公也とあり、先王は大王以下を謂ひ、先公は諸盤より不啻に至るまでを謂ふなり、

作は生なり、荒は大なり、夷は易なり、言ふこゝろは、天の此の萬物を高山の上に生ずるや、大王能く之れを大にし、之れを用ゐる例へば、天の覆ふ所、地の載する所、其の美を盡し、其の用を致さざるなく、上は以て賢良の臣を飾り、下は以て百姓を養ひ、之れをして安樂ならしむ、又文王の徳を説きて曰はく、彼の萬民の生ずる、文王之れを康んず、彼の萬民の歸往するものは、岐邦の君に和易にして、民を愛するの

情あればなり、父祖の徳此くの如くなるが故に、子孫をして天位を保つことを得せしむるなりと、

昊天有成命

昊天有成命、二后受之、成王不敢康。夙夜基命、宥密於緝熙。單厥心、肆其靖之。

此の詩、古序に郊祀天地也とあり、南郊に於て天を祀り、北郊に於て地を祀るの樂歌なり、

二后は文王武王なり、基は始なり、命は信なり、宥は寛なり、密は寧なり、緝は明なり、熙は廣なり、單は厚なり、靖は和なり、言ふこゝろは、周は始祖后稷の生るゝ時よりして、既に天下に王たるべきの天命あり、故に文王武王に至り、其の業を受け継ぎ、道徳を施し行ひて、王たるの功を成就せり、然れども敢て自ら安逸せず、早に起き、夜はに寐ぬ、天命に信順するに始まり、寛仁安寧の政を行ひ、天下を定められしなり、此の二后の徳、既に光明にして、又能く其の心を篤くし、倦み怠ることなく、遂に天下を和し安んぜられたりとなり、

(九五二)

毛

文王武王の王業を成し、天命に基づく所以のもの、此くの如くなれば、則ち後人の
繼ぎて之れを廣むる所以のもの、亦唯此の心を盡すのみ、文武の心に愧づること
なくして、而して後に能く文武の天下を安んじ、天命に負くなく、文武に愧づるな
し、此れ成王天地を郊祀するの心なり、成王の祀り、心に在りて物に在らず、故に此
の詩の作物を言はずして心と言ふなり、

我將

我將我享。維羊維牛。維天其右之。儀式刑文王之典。日靖四方。伊嘏文
王。既右饗之。我其夙夜。畏天之威。于時保之。

此の詩、古序に祀文王於明堂也とあり、文王を明堂に祀りて、上帝に配する時の樂
歌なり、

牌は大なり、享は献なり、儀は善なり、刑は法なり、典は常なり、靖は謀なり、嘏は假に
同じ、大なり、言ふこと、是は我が大にする所、我が献する所のものは、維れ肥えたる
羊と肥えたる牛となり、此の牛羊の肥えたる所以のものは、上天の之れを扶助せ
らるるに依りて、傷み病むことなきなり、我が周公成王、善く此の文王の常道に法

詩

毛

り、日々之れを用ゐて、四方の政を謀る、維れ天文王の徳を大にし、既に文王を助け、
我が周公成王の祭りに於て、又能く之れを歌饗せらる、然れども、天、福を降だせば、
亦威を降だす、日に文王に法れば、則ち之れに福し、一日文王に法らざれば、則ち天
威將に至らんとして、福保つ可らず、我が周公成王、今よりの後、夙夜の間、戦々兢々
として、惕れ厲ぶみ、以て天威を畏れば、庶幾はくは永く此の邦家を保ちて、福を受
くることを得んと、蓋し、天に對して自ら矢ふの辭なり、

時邁

時邁其邦。昊天其子之。實右序有周。薄言震之。莫不震疊。懷柔百神。及
河喬嶽。允王維后。明昭有周。式序在位。載戢干戈。載櫜弓矢。我求懿德。肆
于時夏。允王保之。

此の詩、古序に巡守告祭柴望也とあり、武王殷に克ち、既に天下を定めて、諸侯の國
を巡行し、方岳の下に至り、諸侯を朝會し、柴を焚き、高山大川を祭り、神に告ぐ、周公
禮樂を作り、此れを巡守祭告の歌と爲すなり、

邁は行なり、震は動なり、疊は懼なり、懷は來なり、柔は安なり、喬は高なり、高岳は岱

詩

宗なり、戢は聚なり、橐は韜なり、懿は美なり、肆は陳なり、夏は大なり、周公時既に太
 平なるを以て、武王の事を追述するなり、言ふところは武王既に天下を定め、時を
 以て其の國を行き回り、民を安んずるの政を布く、六軍皆従ひ、賢智の臣、各其の職
 を司どる、是に於て昊天も王を親み愛すること子の如く、之れをして天下に王た
 らしめ、實に之れを尊びて、諸侯の上に序す、人心久しく玩れたるが故に、薄か之れ
 を警め動かすに、動き懼れざるはなし、又天地群神、及び所在の山川を祭るに、山川
 鬼神も來り安んじて、之れを饗けざるはなし、允なるかは、周王の天下に君たるや、
 今にして天の周家を愛すること、昭然と明かにして、復疑ひを容れざるなり、然る
 所以のものは、慶讓黜陟の典を以て、在位の諸侯を治め、又其の干戈を斂め、其の弓
 矢を韜み、美德あるの士を求めて、之れを任用し、之れをして位に在らしめ、其の功
 を中國に陳ねたり、信なるかな、王の能く天命を保つこととなり、
 天に對して言へば則ち子と爲し、神人に對して言へば則ち后と爲し、位を以て言
 へば則ち王と爲すなり、
 古の天下を得る者は、必ず名山大川に告ぐ、是れ禮なり、舜堯の天下を受け、山川に

(九五四)

望み、群神に徧くすとあり、蓋し命を受くるの初め、然らざることを得ず、故に武王
 革命の初め、凱歌方に終り、天下始めて定る、遂に方岳に巡守し、告ぐるに革命の事
 を以てするなり、時適其邦とは、此の時を以て、諸侯の邦に行くの義なり、

執競

執競武王。無競維烈。不顯成康。上帝是皇。自彼成康。奄有四方。斤斤其
 明。鐘鼓喤喤。磬筦將將。降福穰穰。降福簡簡。威儀反反。既醉既飽。福祿
 來反。

此の詩、古序に祀武王也とあり、武王を祀るとききの樂歌なり、故に詩の言ふ所、美を
 武王に歸せざるものなきなり、
 競は疆なり、烈は業なり、皇は美なり、奄は同なり、斤斤は明察なり、喤々は和なり、將
 々は集なり、穰々は衆なり、簡々は大人なり、反々は難なり、反は復なり、言ふところは、
 能く強盛の道を持つ者は、維れ武王のみ、此の武王、豈強きことなしとせんや、維れ
 商に克つの功業、實に強しと爲すなり、豈顯かならざらんや、其の祖考を成し安ん
 ずるの道實に顯かなり、其の既に疆く、且顯かなるに由り、上天是の故を以て、之れ

(九五五)

を美するに大福を以てするなり、又重ねて武王福を得るの事を述べて曰はく、武王彼の祖考を成安するの道を用ひしが故に、天命を受くることを得て、紂を伐ち、同じく天下四方を有ち、斤々として周家一代明察の君たり、是れ其の顯かにして福を得るなり、又武王の宗廟を祭るや、鐘鼓の樂を作る、其の聲和して、噏々たり、磬筦の音を奏すれば、其の聲集りて將々たり、禮度に合ひ、神明に當る、故に神之れに福を降すこと、衆多にして且大なり、而して孝子の威儀に於けるや、反々として愈慎めり、是を以て神人醉飽し、福祿の來ること、反復して已まざるとなり、

思文

思文后稷。克配彼天。立我烝民。莫匪爾極。貽我來牟。帝命率育。無此疆爾界。陳常于時夏。

此の詩、古序に后稷配天也とあり、則ち后稷を祀るの樂歌なり、思は語辭なり、立は成立なり、極は中なり、來は小麥なり、牟は大麥なり、率は用なり、言ふこゝろは、我が先祖の文徳ある者は后稷なり、此の后稷、眞に大功德ありて、能く彼の上天に配するに堪へたり、天は生民を以て心とす、烝民の生ずること久し、

而して之れを養ひ、成立に至らしむる所のものは、后稷中正の至徳に非ざるはなし、后稷五穀を盡き、民の命、后稷に依りて存立す、又我れに貽るに小麥と大麥とを以てせり、蓋し春夏の間、穀物の絶ゆるときに當り、麥の熟するあれば、大に民の食を濟ふべし、是れ上帝の命ずる所、時に隨ひて用る育はしむるなり、夫れ衣食足れば、則ち禮義生ず、華夏の民、此の疆彼の界とをわかつたず、皆相生じ相養ひ、以て人倫の道を敷き、陳ぬるに至る、此の教の成立する所以のもの、亦后稷の徳に非ざるなし、故に其の功を述べて之れを歌ふなり、

臣工

嗟嗟臣工。敬爾在公。王釐爾成。來咨來茹。嗟嗟保介。維莫之春。亦又何求。如何新畬。於皇來牟。將受厥明。明昭上帝。迄用康年。命我衆人。庀乃錢鎛。奄觀銍艾。

此の詩、古序に諸侯助祭、遣於廟也とあり、周公成王の時、諸侯春來朝して、天子の祭りを助く、其の事畢りて歸らんとするに及び、天子戒勅して、之れを廟に遣はす、其の時の樂歌あり、是れより以下、武の篇に至るまで十篇を臣工之什と曰ふなり、

嗟々は之れを勅むるなり、工は官なり、公は君なり、保介は車右なり、新は新田、畚は開きてより三年の田なり、皇は美なり、將は大なり、迄は至なり、康は樂なり、序は具なり、錢は銚なり、古の田器なり、鍤は鋤の類なり、鍤は鎌の類なり、古へ天子の巡守、諸侯の述職、皆田野の治まるを以て慶と爲す、故に諸侯來朝して、祭りを助け、其の歸るに及びて、之れを戒むるに稼穡の事を以てす、周の先祖、農を力め、國を開く、故に廟に告げ、先祖の徳を以て之れに訓ふるなり、乃ち先づ嗟し又嗟し、重ねて歎じて之れを呼びて曰はく、我が臣の下に在る諸官、即ち諸侯の卿大夫等、汝等皆當に爾が君に在る所の職事を敬慎すべし、官を守るの道、成典を守るに在り、王爾に賜ふに成典、舊章を以てす、若し未だ喻らざる所あらば、其れ來りて之れを咨ひ、之れを度るべし、自ら用ゐ自ら専らにして、成法を壊ること勿るべしと、諸侯をして之れを聞かしめ、亦其の事を敬して自ら専らにせざらしめんことを欲するなり、又其の車右に勅するに農事を以てし、亦嘆じて之れを呼びて曰はく、爾保介歸らば、亦か、民の事は農に在り、農の事は春に在り、今や春の暮れなり、汝若し國に歸らば、亦何の民に施すを求むる所あるや、二歳の新田、三歳の畚田を如何する、荒蕪して未

だ開かざるものあるなからんや、美なるかな、二麥將に熟せんとす、秋の禾稼之れに繼ぐ、天の賜ふ所、大に昭明にして爽はず、秋に至らば、又將に豊年ならんとす、早く農夫に命じ、錢鍤を具へて、田畝を治め、忽ち鎌を持して稻を刈るを觀ん、事を先きにせずして、穫ることを望むべけんやとなり、

噫 嘻

噫嘻成王。既昭假爾。率時農夫。播厥百穀。駿發爾私。終三十里。亦服爾耕。十千維耦。

此の詩、古序に春夏祈穀于上帝也とあり、五穀の成熟を上帝に祈り求むるとききの樂歌なり、

噫は嘆なり、嘻は和なり、成王とは是の王事を成すなり、駿は大なり、私に民の私田なり、言ふこゝろは、噫、時の和するや、我が王、是の王事を成し、政教光明にして、至誠天に至り、猶能く農事を敬み重んじ、此の主田の吏員、及び農夫を率ゐ、民をして田を耕し、百穀を種えしむ、乃ち民に告げて曰はく、大に爾の私田より始めて耕發すべし、三十里に極るまで、亦爾が耕作に従ひ、十千の人夫、並び耕すべしとなり、

私田は公田に對して言ふことにして、上より其の民を富まさんと欲するが故に下に讓るなり、三十里といふものは、人目の望み見る處、三十里に極まるを以てなり、十千は万なり、三十里の中、万夫あるに非ざれども、大數を擧げて、耕作を勸め、徧く天下に及ぼすの意なり。

振鷺

振鷺于飛。于彼西雝。我客戾止。亦有斯容。在彼無惡。在此無數。庶幾夙夜。以永終譽。

此の詩、古序に二王之後、來助祭也とあり、武王般に克ちて、夏の後を祀に封じ、般の後を宋に封ず、乃ち此の二國の君來りて祭りを助くる時の樂歌なり、振々は群り飛ぶ貌なり、雝は澤の名、西雝は西方に在る澤なり、客は二王の後なり、言ふこゝろは、振々と群り飛ぶ潔白の鷺あり、其の往き飛ぶや、則ち西雝の澤に集る、誠に其の處を得たり、彼の杞宋二國の君來りて王の祭りを助く、亦此の潔白の儀容ありて、禮の宜きを得たり、但其の來りて祭りを助くるのみ此の儀容あるに非ず、又彼の國に在りても、國人皆之れを悦び慕ひて、之れを惡み怨む者なく、今又

詩

毛

來朝するも、周人皆之れを愛敬し、之れを倦み厭ふ者なし、猶庶幾くは、夙夜に之れを行ひ、此の道を以て長く美なる譽れを終へんとなり。

豐年

豐年多黍多稌。亦有高廩。萬億及秬。爲酒爲醴。烝畀祖妣。以洽百禮。降福孔皆。

此の詩、古序に秋冬報也とあり、秋冬農事已に成りて、田祖方社の神に報賽するべきの樂歌なり、

豐は大なり、稌は稻なり、萬々を億と曰ひ、億々を秬と曰ふ、皆は徧なり、言ふこゝろは、今鬼神の祐助を得て、豐年に會ひ、多く黍あり、多く稻あり、亦高大の廩ありて、其の中に穀物を積み貯ふること、萬億及び秬の數あり、豐積を致すこと、此くの如きは、神の助くる所なり、故に之れを以て酒を作り、之れを以て醴を作り、先祖先妣に烝め、畀へ、宗廟の祀り擧げざることなく、又百神を合せ祭るの禮を擧げざることなし、是を以て神の福を降すこと、甚だ徧しとなり、

有瞽

毛

詩

有警有警。在周之庭。設業設處。崇牙樹羽。應田縣鼓。鞀磬祝圉。既備乃奏。簫管備舉。嗶嗶厥聲。肅雝和鳴。先祖是聽。我客戾止。永觀厥成。

此の詩、古序に始作樂而合乎祖也とあり、周公攝政六年に禮を制し樂を作り、一代

の樂成りて、諸樂器を太祖の廟に合して神に告ぐるなり、
警は樂官なり、目なき者は音に審かなるが故に、樂を主とらしむるなり、有警有警
と重ねて言ふものは、其の多きが爲めなり、庭は廟庭なり、業は大板なり、嗶は鐘磬
を懸くるの木なり、崇牙は其の上に刻みて鋸齒の如くするなり、樹羽とは、五色の
羽を崇牙の上に樹て、飾りとするなり、應は小づゝみ、田は大づゝみなり、縣鼓は
周の鼓なり、鞀はふりづゝみなり、祝は形桶の如くにして蓋なく、椎を其の中に投
じて之れを撞くなり、圉は形伏したる虎の如くにして、背に二十七の刻みあり、木
を以て之れをかきならす、樂を止むるものなり、奏は樂を作すことなり、肅雝は慎
み和く義なり、和鳴は八音の聲、別々にならざるなり、客は二王の後なり、言ふこ
ろは、始めて大武の樂を作り、大廟に合するの時、此の警人あり、其の樂を作る者、皆
周の廟庭に在り、既に警人あり、又人をして虞を設け、嗶を設け、其の上に刻みて、崇

詩

毛

牙を作り、因て五采の羽を樹て、之れが飾りと爲し、既に應の小鼓あり、又田の大
鼓あり、之れを嗶業に懸くるを懸鼓と爲す、又鞀あり、磬あり、祝あり、圉あり、皆之れ
を庭に設け、既に備る、乃ち警人をして、擊ちて之れを奏せしむ、又吹くものは簫あ
り、管あり、己に備りて之れを擧ぐ、其の聲嗶々として和集し、皆恭敬和諧し、鳴りて
相奪はず、先祖の神、之れを聽き、我が客たる二王の後、適に來りて此に至り、此の樂
を聞き、永く其の樂の成るを觀るとなり、

潜

猗與漆沮。潜有多魚。有鱣有鮪。鱣鱣鰪鰋。以享以祀。以介景福。

此の詩、古序に季冬薦魚春献鮪也とあり、季冬の時、魚の肥えたるを以て、之れを宗
廟に薦め、春に至りて又鮪を献ずるなり、

猗與は歎美する詞なり、漆沮は二水の名なり、潜は糝なり、柴を水中に積み、魚をし
て之れに依りて止息せしむるなり、鱣はあゆの類、餘は魚麗の詩に見えたり、言ふ
こゝろは、猗與此の漆沮の二水、其の中に魚を養ふの潜あり、此の潜の中、乃ち衆多
の魚あり、鱣あり、鮪あり、又鱣鱣鰪鰋あり、我が太平の王者、之れを先祖に献じ、之れ

詩

毛

を以て宗廟を祀り、神明之れを饗して、大なる福を降し賜ふとなり。

離

有來離離。至止肅肅。相維辟公。天子穆穆。於薦廣牡。相予肆祀。假哉皇考。綏予孝子。宣哲維人。文武維后。燕及皇天。克昌厥后。綏我眉壽。介以繁祉。既右烈考。亦右文母。

此の詩、古序に禘太祖也とあり、禘とは、其の祖の出づる所を祭るなり、乃ち太祖文王を禘祭するの樂歌なり、

雖々は和なり、肅々は敬なり、相は助なり、廣は大なり、假は嘉なり、宣は徧なり、燕は安なり、繁は多なり、烈考は武王なり、文母は大妣なり、言ふこゝろは、彼の本國より來る者、其の顔色雖々として柔和に、既に此に至れば、則ち容貌肅々として恭敬なり、此の祭事を助くる者を國君の諸公と爲す、是の時に於て、天子の容は、則ち穆々として美なり、賓主共に各其の宜きを得、此の時に於て、天子大牲の牲を薦め、辟公祭りを助けて、其の祭祀の饌を陳ぬ、是れ天下の歡心を得ることを言ふなり、嘉なるかな君考文王、其の徳後世に被むりて、我れ孝子を安定す、故に今天下の歸する所となるなり、皇考徧く天下の人をして才智あらしむるものは、文徳武功を以て之れが君と爲り、教化の普及するが故なり、皇考能く民をして智ならしむるが故に、孝子其の徳に安んずることを得、又能く安んじて皇天に及び、天をして災異なくして瑞應を降さしめ、又能く其の子孫を昌大にして、長く天下を有たしめ、年を得ること秀眉の壽あり、又賜ふに繁多の福を以てせらる、我が孝子、徒に皇考に福せらるゝのみならず、既に光明の考に祐助せられ、亦文徳の母にも祐助せらるゝなりと、又美を武王と大妣とに歸して言ふなり、

載見

載見辟王。曰求厥章。龍旂陽陽。和鈴央央。儻革有鶉。休有烈光。率見昭考。以孝以享。以介眉壽。永言保之。思皇多祐。烈文辟公。綏以多福。俾緝熙于純嘏。

此の詩、古序に諸侯始見乎武王廟也とあり、周公政を攝すること七年にして、政を成王に歸す、成王位に即き、來朝の諸侯を率ゐて、武王の廟を祭る、然るに成王に見ゆと云はずして、始めて武王の廟に見ゆと云ふものは、祭りを助くるを美するが

詩

詩

故なり、

載は始なり、辟王は成王を指して言ふ、求厭章とは、車服禮義の文章制度あらんを
求むるなり、龍旂とは交龍を畫きたる旗なり、和は車の前の鈴なり、鈴は旂の上の
鈴なり、犂革有鶴とは、たづなの端に附けたる金厄の飾りなり、昭考は武王なり、享
は献なり、思は語助なり、言ふころは、諸侯始めて來朝して、君王に見ゆ、皆能く自
ら其の章を求め、法度を失はざらんことを欲す、故に其の建つる所、交龍の旂は、陽
々として文章あり、其の賦に在るの和と、旂上の鈴と、夾々として音聲あり、又犂皮
を以てたづなと爲し、其の末金を以て飾りと爲す、鶴然として美なり、此くの如く、
休然と盛んにして顯かなるは、自ら文章を求むるが故なり、既に祭時に至れば、諸
侯の伯たる者、之れを率ゐて明德の考に見え、武王の廟に入らしめ、之れをして祭
りを助けて、孝子の事を教し、以て祭祀の禮を献じ、我が王をして秀眉の壽を大な
らしむ、又諸侯の意を叙して曰はく、此の孝享介壽の道たる、我が諸侯長く安んじ
て之れを行ひ、我が君成王をして、衆多の祐を得せしめん、是の光明文章あるの君
公能く禮を得ること、是くの如くならば、我が昭考の神、乃ち此の諸侯を安んずる

詩

毛

に衆多の福を以てし、之れをして皆光明の徳あり、世々窮りなく、長く國君たらし
めんどなり、

有客

有客有客。亦白其馬。有萋有且。敦琢其旅。有客宿宿。有客信信。言授之
繁。以繫其馬。薄言追之。左右綏之。既有淫威。降福孔夷。

此の詩、古序に微子來見祖廟也とあり、微子は殷紂の庶兄なり、殷の滅びんとする
を見て、去りて周に歸す、周既に殷に克つの後、微子の賢徳あるが爲めに、之れを宋
に封じて、殷の後を繼がしむ、微子來るときは、客の禮を以て之れを遇し、臣とせず、
是れ微子周に來りて、周の祖廟に見ゆるとききの樂歌なり、

殷は白きを尙ぶ、萋且は敬慎の貌なり、一宿を宿と曰ひ、再宿を信と曰ふ、追は送な
り、淫は大なり、威は則なり、夷は易なり、言ふころは、微子來りて京師に至り、周人
の愛する所と爲る、故に述べて之れを歌ふ、我が周家、今先代を承くるの客あり、此
の客、亦我が周の如く、其の尙ぶ所の色に乗りて、其の馬を白くす、其の來るや、萋た
るあり、且たるあり、能く威儀を慎み、心力を其の事に盡す、身既に此くの如し、又其

詩

毛

の従行する衆臣、卿大夫の賢者を擇み用ゐる、皆玉を雕琢するが如し、是れ従者皆賢なるを以て、周人に愛せらるゝなり、又曰はく、客あり、一宿して又一宿す、客あり、再宿を経て復再宿す、留まるの日多ければ、已に去るべし、我れ之れに馬の絆しを授けて、其の馬を繋ぎ留めんと、其の去ることを欲せざるなり、然れども、去るに臨みて止らざれば、王、始めて之れを送り、王の左右の臣も亦隨ひ送りて、微子を安んじ樂ましむ、又微子が王者の後たることを嘆美して曰はく、微子既に殷の後を繼ぎ、其の大則ありて、周の代と雖も、猶殷の正朔を用ゐ、殷の禮樂を行ふことを得、天の福を降すことも亦甚だ易しと、之れを愛して其の福を願ふの辭なり、

武

於皇武王。無競維烈。允文文王。克開厥後。嗣武受之。勝殷遏劉。耆定爾

功

此の詩、古序に奏、大武也とあり、大武は周公武王の功業に象どりて作れる樂歌なり、皇は君なり、烈は業なり、武は跡なり、劉は殺なり、耆は致なり、言ふこゝろは、於乎美

にして君とすべき者は武王なり、此の武王、疆きことなしと謂ふ可けんや、殷に克つ功業、實に最も疆しとす、能く此の業を致して、疆きを得るものは、信に文徳あるの文王、聖徳を以て命を受け、能く其の後世子孫の基を開くに由り、武王其の跡を繼ぎて、之れを受け、紂を伐ちて之れに勝ち、人を殺すの害を止めて、以て爾の大功を致し定む、是を以て美して之れを歌ふなり、

関予小子

関予小子。遭家不造。嬛嬛在疚。於乎皇考。永世克孝。念茲皇祖。陟降庭止。維予小子。夙夜敬止。於乎皇王。繼序思不忘。

此の詩、古序に小子嗣王朝於廟也とあり、嗣王は成王なり、武王の喪を除きて、將に始めて政に即かんとし、廟に朝するなり、此れ其の樂歌なり、是れより以下、殷の篇に至るまで十一篇を、関予小子之件と曰ふなり、

関は病なり、造は爲なり、疚は病なり、皇考は武王なり、皇祖は文王なり、庭は直なり、序は緒なり、止思は語助なり、言ふこゝろは、成王將に政に蒞まんとして廟に朝す、乃ち己れの過ちを追傷して曰はく、関ましいいかな、我れ小子、往日家道の未だ成ら

ざるに遭ひ、己れをして孤獨にして嬾々と愛病の中に在らしむと、先王已に崩じ、人の家事を爲むるなきなり、幸ひに周公代りて家事を爲し、太平を致すことを得たり、今將に自ら政を爲さんとす、故に其の父を追述して曰はく、於乎歎美すべきものは、我が皇考武王なり、此の武王の道たる、永世之れに法るべし、能く孝行を爲し、常に能く此の君祖文王を念ひ、上天に事へ、下、民を治め、常に正直の道を行ふ、皇考は皇祖を念ひて、能く其の徳行を同じくす、維れ予れ小子、常に早く起き、晩く寝ね、敬慎して此の祖考の道を行ひ、敢て懈り倦まざるべし、於乎嘆美すべきものは、我が文武の君なり、我れ當に其の緒業を繼ぎ、敢て遺忘せざるべしとなり、

訪落

訪予落止。率時昭考。於乎悠哉。朕未有艾。將予就之。繼猶判渙。維予小子。未堪家多難。紹庭上下。陟降厥家。休矣皇考。以保明其身。

此の時、古序に嗣王謀於廟也とあり、成王政に即かんとして、廟に於て、諸臣と政事を謀られし時の樂歌なり、訪は謀なり、落は始なり、時は是なり、率は循なり、悠は遠なり、猶は道なり、判は分なり、渙は散なり、紹は繼なり、厥家は群臣を謂ふなり、言ふこゝろは、成王始めて政に即き、聖父の業を繼ぐこと能はざるを恐れ、乃ち廟中に於て、群臣と事を謀りて曰はく、汝等當に我が始めて政に即くの事を謀るべしと、群臣對へて曰はく、當に是の明德の考に循ひ、武王の施す所に效ひて、之れを爲すべしと、王又謙して之れに答へて曰はく、於乎此の昭考の道、悠然として遠く、我が徳之れを去ること懸絶して、未だ之れを治むるに及ぶこと能はず、汝群臣、予れを將けて、先王に就き近づき、其の道の分散する者を繼ぎて、之れを收めんことを欲す、予れ小子、才智淺短にして、未だ國家の衆難を統理するに任へざるなりと、又昭考の徳を述べて曰はく、武王能く其の父文王に繼ぎ、直道を以て上下に施し、又能く厥の家の職事を上下し、群臣を治めて次序あらしむ、美なるかな、我が君考武王、能く此の文王の道を以て、天下を定め、天子の位に居り、其の身を安んじ尊くすとなり、

敬之

敬之敬之。天維顯思。命不易哉。無曰高高在上。陟降厥士。日監在茲。予小子。不聽敬止。日就月將。學有緝熙。于光明。佛時仔肩。示我顯德行。

此の詩、古序に群臣進戒嗣王也とあり、成王廟に朝し、群臣と政事を謀るに由り、群臣戒めを成王に進むるなり、顯は見なり、士は事なり、小子は嗣王なり、將は行なり、光は廣なり、佛は大なり、仔肩は克なり、思止は語助なり、言ふこゝろは、王當に其の事を敬して之れを行ふべし、天の下に臨む、乃ち光明にして顯かに見、惡を去り、善に與す、其の吉凶を命ずること變易せず、王此の天を稱して、高くして又高く、上に在りて人の善惡を見ずと爲して、畏れざること勿れ、天乃ち升降して、以て其の事を行ひ、日月を轉運し、四方を照臨し、其の神近く此に在りて遠しと爲さずと、王既に其の戒めを承けて、之れに答へて曰はく、維れ我れ小子、聰ならずして、此の之れを敬するの義に達せざれば、將に漸を以て之れを學び、日に成就する所あらしめ、月に行ふ可き所あらしめ、且學びて光明の事を作さんと欲す、予が任ずる所、至りて大なり、汝群臣當に我れに示し道びくに顯明の徳行を以てすべしとなり、

小 苾

予其懲而苾後患莫予荇蜂自求辛螫肇九彼桃蟲拚飛維鳥未堪家

多難予又集于蓼

此の詩、古序に嗣王求助也とあり、武康亂を作し、國家靖からざるの時、成王忠臣の早く己れを輔けて政を爲し、此の患難を救はんことを求むるの樂歌なり、苾は慎なり、荇は徳と同じ、苇は使なり、蜂は律なり、律は使なり、肇は始なり、桃蟲は小鳥なり、言ふこゝろは、予れ往きの日、誤りて流言を信じ、周公を疑ふを懲り戒め、禍難の未だ已まざるを慎む、往日の事たる、予れをして之れを爲さしめし者あるなし、予れ自ら辛苦毒螫の害を求むるなり、始めは彼の管叔蔡叔の屬、流言の罪ありと雖も、小鳥の如くなりしが、後叛きて亂を作すに至りては、拚然と化して大鳥と爲りしものゝ如し、我れ才智淺薄にして、獨り國家の難の多きに堪ふること能はず、予れ又蓼の辛きに集り止らん、故に汝等宜く予れを助くべしとなり、蓼は辛き草なれば、患難に喩へしなり、

載 芟

載芟載柞其耕澤澤千耦其耘徂隰徂畛侯主侯伯侯亞侯旅侯疆侯以有隄其鑑思媚其婦有依其士有略其耜俶載南畝播厥百穀實函

斯活驛驛其達有厭其傑厭厭其苗。縣縣其薦載穫濟濟有實其積。萬億及秭爲酒爲醴烝畀祖妣以洽百禮有飶其香邦家之光有椒其馨。胡考之寧匪且有且匪今斯今振古如茲。

(九七四)

此の詩古序に春籍田而祈社稷也とあり籍田は周禮天官甸師氏の掌る所王自ら耒耜を載せて耕す所の田なり周公成王太平の時王者春時に於て親ら籍田を耕し以て農業を勧め又社稷を祈りて豊熟を求むるなり詩人其の豊熟の事を述べて此の詩を作るなり

爰は草を除くなり柞は木を除くなり澤々は耕すなり千耦は二千二人なり原隰は地形高下の別名にして隰は地形を指して言ふ新々に發く田なり畛は田の畔なり主は家長なり伯は長子なり亞は其の次の諸弟旅は其の外の子弟なり疆は我が力餘りありて我が田を耕し又人の耕作をも助くるを謂ふ以は用なり實を取らて儲はるゝなり噴は多き貌依は愛なり士は子弟なり略は利なり函は合なり活は生なり驛々は苗の生ずる貌厭々は多く長ずる貌縣々は絶えまなき貌穫は耘なり濟々は難なり萬々を億と曰ひ億々を秭と曰ふ烝は進なり畀は予なり洽

は合なり飶は香ばしきなり椒は猶飶といふがごとし胡は壽なり考は成なり寧は安なり且は此なり振は自なり言ふこゝろは周公成王の時籍田して農業を勧め社稷に祈りて豊熟を願ふ故に民皆農業を治むることを樂み其の草を爰り其の木を除き其の土氣の蒸達するを待ちて然る後之れを耕す其の耕すや澤々として土皆解散し又二人相對する者千耦の人あり皆此の爰り除く所草木の根株を耘り除くなり或は隰に往く者あり或は畛に往く者あり其の往く所の人家長長子次子其他衆子弟若くは強力の士若くは傭賃の人一家を盡して耕作に従ふ噴然として衆きあり其の來りて食物を饋る者其の婦と士とあり此の農人其の身を以て苦みと爲さず其の儲を饋り來るを以て勞と爲し之れを迎へて其の婦に媚び又其の從ひ來る所の子弟を愛す是れ王化の深くして農を務むるを見るべし此の農人の用ゐる所略然として利き耜あり此の利き耜を以て始めて南畝の中に耕し百種の穀物をまき布けば此の穀の種皆活くべきの氣を含み驛々と土を破りて生ひ出づるなり其の厭然として特に茂るものは傑出の苗なり厭々として長大なるものは其の齊しく生ずる苗なり是に於て農人乃ち縣々と其

(九七五)

の力を用ゐて、之れを芸る。此を以ての故に、其の大に熟するに至れば、之れを穫るに禾のすきまなく、穡衆くして、進み難きこと濟々たり、其の實のることの多きは、此れ民の積聚にして、乃ち萬億及び秭の大數あり、是に於て、上に在りて其の税を斂め、酒醴を作りて、先祖先妣に進め、又百衆の禮を聚めて、祭祀を爲す、此の爲る所の酒醴、饒然として其の氣馨しく、鬼神の饗する所となりて、我が國家の光榮と爲り、又椒の香しきが如く、鬼神福を降して、壽考と成徳との安寧を得るなり、是れ誠心天地を感ずるものにして、此れを務めて、此の事ありと云ふに非ず、今此の事ありて、今のみなるに非ず、此の事は古より以來、當に此くの如くなるべし、徳を修め禮を行へば、其の報必ず至るとなり、

良 耜

髮髮良耜。俶載南畝。播厥百穀。實函斯活。或來瞻女。載筐及筥。其饒伊黍。其笠伊糾。其鍤斯趙。以薅荼蓼。荼蓼朽止。荼稷茂止。穫之挈挈。積之栗栗。其崇如墉。其比如櫛。以開百室。百室盈止。婦子寧止。殺時稌。有捋其角。以似以續。續古之人。

此の詩、古序に秋報黍稷也とあり、太平の時、五穀の豊熟するは、社稷の祐くる所なれば、秋に於て、社稷の神を祭り、其の功に報ずるとききの樂歌なり、

髮々は猶測々といふがごとし、測は深く至るなり、深く耕すの貌なり、趙は刺なり、薅は去なり、蓼は水草なり、挈々は刈る聲なり、栗々は衆多なり、墉は城なり、百室は一族なり、五家を比と爲し、五比を閭と爲し、四閭を族と爲せばなり、黄牛にして唇の黒きを捋と曰ふ、捋は角の貌なり、言ふこゝろは、農人利き耜を以て、始めて南畝に耕し、髮々と深くして、其の百穀をまき種うるに、其の種皆生氣を含み、生ひ出でて漸く長せり、農人乃ち之れを芸る、是に於て、妻子の來りて饁を饋る者を見れば、四角なる筐と、圓き筥との籠に、黍を盛りたり、其の農夫の容を見れば、戴ける笠は、糾然として軽く擧がが、其の鍤を地に刺して、荼蓼の草を除き去る、其の勤苦すること知るべし、其の荼蓼の草既に朽ちて、作る所の黍稷茂ることを得るなり、乃ち其の成熟するに及びて、之れを穫れば、挈々として聲あり、其の積み聚むる所は、粟粟として多く、其の大なること城の如く、其の繁げく迫れること、櫛の齒の如く、百室戸を開きて、一時に之れを納む、是に於て、百室皆五穀盈ち、妻子も田野に饁を饋

ることを止めて、室内に安居し、養牛を殺して牲と爲す、穠然たる其の角あり、此の牲を用ゐて、社稷を祭り、來歲も亦今年の如く、豐年ならんことを祈り、將來の人をして、往古の人に繼がしめんとなり。

絲衣

絲衣其紕。戴弁。侏侏。自堂徂基。自羊徂牛。鼐鼎及鼐。兕觥其觶。旨酒思柔。不吳不敖。胡考之休。

此の詩、古序に釋、賓尸也とあり、祭りの明日又祭るを釋と曰ふ、釋は繼なり、昨日に繼ぐの義なり、釋祭して尸を賓とするときの樂歌なり、

絲衣は爵弁の服なり、繒を用ゐるに由り、絲衣と曰ふ、他の服は皆布を以て作るなり、弁は冠なり、紕は潔き貌、侏々は敬ひ順ふ貌なり、堂は廟門の内塾なり、基は門塾の地盤なり、大鼎を鼐と曰ひ、小鼎を鼐と曰ふ、思は語助なり、吳は譁なり、考は成なり、言ふことろは、祭りを助くるの人、祭りの前日に堂に上り、祭りの器物、其の他備はるや否を見る、其の身服する所は、絲を以て作れる祭服にして、其の色、紕然として、潔く、首には其の爵色の麻弁を戴き、其の貌、侏々として、恭順なり、此の人、堂に上

り、既に祭祀に用ゐる籩豆類の備はるを見、又降りて、門塾の基に至り、手を濯ぶの具を見、更に門外に出で、牛羊豕の三牲を見る、羊よりして牛に行き、其の肥えたるを見、又其の大鼎小鼎の覆ひを舉げて、其の潔きを見、乃ち之れを君に告ぐるなり、祭りの初、早くして事を行ふ者すら、其の恭順なること、此くの如し、故に祭りの時に當り、尸に事ふるの禮、失ふことなく、兕觥の罰爵は、觥然と徒らに設けたるのみにして、之れを用ゐる所なし、然る所以のものは、祭りを助けて美酒を飲む者も、自ら安んぜんことを思ひ、譁しきことを爲さず、敖り怠ることを爲さず、然れば神明も之れを嘉して、賜ふに壽考の休徴を以てせらるべしとなり。

酌

於鑠王師。遵養時晦。時純熙矣。是用大介。我龍受之。躑躑王之造。載用有嗣。實維爾公。允師。

此の詩、古序に告成、大武也とあり、詩中に酌の字なし、武王父文王の道を酌み取て天下を取ること、言ふなり、周公政を攝すること六年、武王の事に象どりて、大武の樂を作り、既に成りて、廟に告ぐ、作者其の樂の成るを見て、其の武功を思ひ、之

れを述べて此の詩を作るなり、
 鏘は美なり、遵は率なり、養は取なり、晦は昧なり、純は大なり、熙は廣なり、介は大なり、龍は和なり、躡々は武き貌、造は爲なり、公は事なり、言ふこゝろは、於乎美なるかな、武王の師を用ゐるや、此の師を用ゐて、此の闇昧の君を取る、是に於て周道をして大に廣からしめ、遂に大を有ちて又大なり、以て今日の太平を致す、我れ臣民と協和して、商を伐ち、天命を受けたり、苟も強力を用ゐるに非ず、躡々として威武の貌ある我が武王の爲す所、此の武を用ゐて文王の功に嗣ぐことあり、實に爾王の商を伐つは、信に師を用ゐるの道を得たり、是を以て大武の樂を作りて、其の事に象とるなりと、

桓

綏萬邦。屢豐年。天命匪解。桓桓武王。保有厥土。于以四方。克定厥家。於昭于天。皇以間之。

此の詩、古序に講武類禱也とあり、類も禱も皆師の祭りなり、武王將に殷に代らんとして、六軍を陳列し、武事を講習し、又上帝に類祭し、征伐する處の地に禱祭す、兵

を治め、神を祭り、然る後紂に克つ、成王の時に至り、詩人追て其の事を述べ、此の詩を作りしなり、

綏は安なり、士は事なり、間は代なり、言ふこゝろは、武王の紂を伐つ、万邦の民、其の暴虐に苦むが故に、之れを安んせんが爲めなり、故に民心之れを悦び、天意之れに順ひ、屢、豊年の祥を得たり、是れ但一時に非ず、天命久しくして懈らざるなり、我が桓々たる威武の武王、能く天下の事を保んむ有ち、其の武事を四方に用ゐ、能く其の家を定め、先王の業を成して、天下の主たり、於乎此の武王の徳、昭かに天に見はれ、殷紂暴虐の故を以て、武王遂に君として之れに代ることを得たりとなり、

賚

文王既勤止。我應受之。敷時繹思。我徂維求。定時周之命。於繹思。

此の詩、古序に大封于廟也とあり、賚は予なり、武王紂を伐ち、大に功あるの臣を封じて諸侯と爲す、成王の時に至り、其の事を述べて、此の詩を作りしなり、

應は當なり、繹は陳なり、思は語辭なり、言ふこゝろは、武王既に諸臣の功ある者を文王の廟に封じ、因て文王の道を以て、之れを戒めて曰はく、我が父文王、既に心を

政事に勤勞して天下を一統するの基業を立てたり、我れ當に其の意を受けて之れを有つべし、故に我れ文王の心を勞せし事を徧く布き及ぼし、陳ねて之れを行はんことを思ひ、往きて天下を定めんことを求む、文王の政事に勤勞せしは、是れ我が周の天命を受けて王たる所以なれば、汝諸臣、此の封を受くる者、亦當に釋ねて文王の道を行ふべしとなり、

般

於皇時周陟其高山。隨山喬嶽。允猶翕河。敷天之下。哀時之對。時周之命。

此の詩、古序に巡守而祀四嶽河海也とあり、武王既に天下を定め、諸侯守る所の國土を巡行して、四岳河海の神を祭祀し、神の祐助に依りて、福を得たることを、成王の時に至りて、述べられしなり、般は樂なり、天下に樂まるゝなり、高山は四嶽なり、隨は狹くして長き義なり、翕は合なり、嶽は聚なり、言ふことゝるは、於乎美なるかな、此の周や、既に天下を定め、四方を巡行し、其の至る處は、則ち高山の嶽に陟りて之れを祭り、其の之れを祭るや、大山の傍に於て、隨然の小山と、高く

して岳を爲すものあれば、皆信に山川の圖を按じ、九河を合せて一と爲し、大小の序を以て、之れを祭る、普天の下、山川は皆其の神を聚め、進みて命を受くるなり、是れ百神の職を受くべき所なりと、

駟

駟駟牡馬。在坰之野。薄言駟者。有騶有皇。有驪有黃。以車彭彭。思無疆。思馬斯臧。○駟駟牡馬。在坰之野。薄言駟者。有騶有駟。有騂有騏。以車伉伉。思無期。思馬斯才。○駟駟牡馬。在坰之野。薄言駟者。有驪有駟。有騶有騏。以車有維。以車釋釋。思無斃。思馬斯作。○駟駟牡馬。在坰之野。薄言駟者。有駟有駟。有驪有魚。以車祛祛。思無邪。思馬斯徂。

此れより以下、闕宮に至るまで四篇を、魯頌駟之什を爲す、此の詩、古序に頌僖公也とあり、武王の時、周公を魯に封ず、然れども周公封に就かずして、成王に相たり、其長子伯禽をして魯に往かしむ、是れを魯公と爲す、周公斃じての後、成王周公の勳勞あるを以て、伯禽に天子の禮樂を賜ふ、魯是に於て周頌を以て廟樂と爲す、其の後、魯又自ら詩を作りて、其の君を美す、之れを頌と謂ふ、然れども其の體は列國

の風にして、神に告ぐるの歌に非ず、故に章句あるなり、此の詩は、伯禽十九世の孫、僖公、能く伯禽の法に従ひ、節儉にして用を足し、寛恕にし、庶民を愛し、農事を務め、年穀を重んじ、牧馬の盛んなるに由り、魯人之れを尊ぶ、故に季孫行父、命を周に請ひ、太史克に命じて作らしめしものなり。

駟駟牡馬。在坰之野。薄言駟者。有驪有皇。有驪有黃。以車彭彭。思無疆。

思馬斯臧。

駟々は良馬の肥えたる貌なり、坰は林の外、即ち遠き野原なり、驪は黒毛にして内股の白きなり、皇は黄にして白きなり、驪は黒色なり、黄は黄にして赤毛の雜りたるなり、彭々は力ありて容のみよきなり、上の思は語助なり、臧は善なり、言ふこと、其の他都べて所を得たるが故なり、其のあらましに如何なる馬ありやと云へば、白蹄の驪馬あり、黄白の皇馬あり、純黒の驪馬あり、黄驪の黄馬あり、此れ等の馬を用ゐて、車に駕するときは、彭々然として力あり、容あり、是れ皆先祖伯禽の法に遵

ひて、牧養する所なれば、何事も伯禽の法に遵はんとすること限りなく、馬の善からんことを思ふと、是れ恩澤の禽獸に及ぶなり。

駟駟牡馬。在坰之野。薄言駟者。有驪有騶。有騂有騏。以車伋伋。思無期。思馬斯才。

驪は青毛と白毛と齊しく雜りたるなり、騶は黄白二毛の雜りたるなり、騂は赤くして、黄毛の少し雜りたるなり、騏は青毛にして、少し黒きなり、伋々は力ある貌なり、無期とは無疆に同じ、才は馬の能あるを謂ふ、詩の意前の章に同じ、此の章は、軍陣に用ゐる馬を言ふ、故に伋々と曰ひて、力あるを貴ぶことを見すなり。

駟駟牡馬。在坰之野。薄言駟者。有驪有騶。有騂有騏。以車繹繹。思無斁。思馬斯作。

騶は青黒のうろこまだらなるを謂ふ、騑は白馬にして、鬣の黒きを謂ふ、騏は赤馬にして、鬣の黒きを謂ふ、騶は黒馬にして、鬣の白きを謂ふ、繹々は能く走る貌なり、無斁とは古へ伯禽の法に従ひて、厭ふことなからんとの義なり、作とは馬の四足を調習して、車に駕するに宜しからしむるなり、詩の意、前章に同じ、此の章は、田獵